University of Fukui
Campus Master Plan 2012

序文

国立大学法人福井大学長　　福田　優

福井大学は「学術と文化の拠点として，高い倫理観のもと，人々が健やかに暮らせるための科学と技術に関する世界的水準での教育・研究を推進し，地域，国及び国際社会に貢献し得る人材の育成と，独創的でかつ地域の特色に鑑みた教育科学研究，先端科学技術研究及び医学研究を行い，専門医療を実践すること」を使命と定め，その目標達成のため，第2期中期計画に取り組んで参りました。

この使命を果たし，長期目標，中期目標及び中期計画を達成するために，本学が実施する各種事業の遂行や教育・研究・医療・社会貢献等の活動の場となるキャンパスが果たす役割はきわめて大きいと考えています。

キャンパスは独創的な発想と国際的な多様性に富む優れた人材を産み育む土壌として，創造的・先端的な教育・研究を推進する知の拠点として，また地域や国際的な連携，貢献の実践的な場として，更には産学官連携による新たな産業創出の実験の場として必要かくべからざるものです。キャンパスは学生にとっては，勉学，研究，クラブ活動，社会貢献活動等，今後の人生にとりきわめて貴重な経験や大切な時間を過ごす場所でもあります。また，キャンパスはいろいろな考え方を持つ様々な人々との出会い，語らい，お互いを高め合う場所であり，今後の人生を豊かな実りあるものにするための土壌となり，魅力ある人生の出発点にもなります。

職員・学生や地域の人にとって魅力ある心に残るキャンパスは，一朝一夕にできるものではなく，社会の変化や時代の変遷とともに，そこに暮らす人々の生活，文化と歴史によって創り出されていくものです。

このキャンパスマスタープランは，これらの夢の実現を図るために，福井大学がこれから目指す新たな大学像のあるべき姿・キャンパス像を示しています。

これまで，耐震化改修，新築，病院再整備も進んでおり，さらに，長期を見据えたキャンパスマスタープランが必要とされています。

「キャンパスマスタープラン2012」は，キャンパスの現況の把握，課題の抽出とそれらの解決策を示すとともに，福井大学が30年後にどのような姿を描いているかをフレームワークプランとして，またその実現に向けて1中期計画期間から2中期計画期間の間に実現すべき施設・設備・環境等キャンパス計画をアクションプランとして構成し，具体的に福井大学が何をなすべきか，どのような行動をとるべきかを実務的なマネジメントプランとして提示しています。

福井大学はこの「キャンパスマスタープラン2012」に基づき，グローバル化や社会の様々な変化に対応する大学の責務や役割を果たすための環境や空間を整備するとともに，大震災にも耐えられる施設の整備等大学の持続的発展を図り，教育，研究，医療がさらに発展していくことを期待しています。

平成25年3月

0. 目次

1. キャンパスマスタープランについて

（1） キャンパスマスタープラン2012の作成目的 1
（2） キャンパスマスタープラン2009の継承と発展 1

2. キャンパスマスタープラン2012の目標・方針

（1） 大学の基本的な目標 2
（2） 教育・研究・医療等の目標 2
（3） 国の施設整備の考え方 3
（4） キャンパスマスタープラン2012の基本目標・基本方針 4

3. キャンパス及び施設の概要（現状と課題）

3－1 福井大学各キャンパスの位置づけ 5

3－2 各キャンパスの地域での位置づけ 6

3－3 文京キャンパスの施設の概要（現状と課題）

（1） キャンパス環境 10
（2） キャンパス整備の状況（経年数・耐震性能） 17
（3） 屋外環境整備 18
（4） インフラストラクチャー整備 21
（5） 大学が目指す教育研究活動と施設との関連 22
（6） 課題のまとめと検討の方向性 24

3－4 松岡キャンパスの施設の概要（現状と課題）

（1） キャンパス環境 25
（2） キャンパス整備の状況（経年数・耐震性能） 32
（3） 屋外環境整備 33
（4） インフラストラクチャー整備 37
（5） 大学が目指す教育研究活動と施設との関連 38
（6） 課題のまとめと検討の方向性 40

3－5 二の宮キャンパス（附属幼稚園・小学校・中学校）の施設の概要（現状と課題）

（1） キャンパス環境 41
（2） キャンパス整備の状況（経年数・耐震性能） 44
（3） 屋外環境整備 45
（4） インフラストラクチャー整備 46
（5） 大学が目指す教育研究活動と施設との関連 47

3－6 八ツ島キャンパス（附属特別支援学校）の施設の概要（現状と課題）

（1） キャンパス環境・屋外環境整備 48
（2） キャンパス整備の状況（経年数・耐震性能） 51
（3） 屋外環境整備 52
（4） インフラストラクチャー整備 53
（5） 大学が目指す教育研究活動と施設との関連 54

3-7 敦賀キャンパスの施設の概要

（1） キャンパス環境 55

3-8 エネルギー消費量及びCO_2排出量 57

4. キャンパス・フレームワークプラン ～キャンパス長期ビジョン～

4－1 フレームワークプラン策定の基本方針（全キャンパス共通） 58

4－2 文京キャンパス

（1） 整備の方針・考え方 59
（2） 効率的な敷地利用計画 59
（3） グリーンキャンパス計画 59
（4） 建物改築・改修計画 59
（5） キャンパスデザイン計画 60
（6） エコキャンパス計画 60
（7） フレームワークプラン図 61

4－3 松岡キャンパス

（1） 整備の方針・考え方 64
（2） 効率的な敷地利用計画 64
（3） グリーンキャンパス計画 64
（4） 建物改築・改修計画 65
（5） キャンパスデザイン計画 65
（6） エコキャンパス計画 65
（7） フレームワークプラン図 66

4－4 二の宮キャンパス（附属幼稚園・小学校・中学校）

（1） 整備の方針・考え方 69
（2） 効率的な敷地利用計画 69
（3） グリーンキャンパス計画 70
（4） 建物改築・改修計画 70
（5） キャンパスデザイン計画 70
（6） エコキャンパス計画 70
（7） 地域コミュニティ・オン・キャンパス計画 70
（8） 施設・スペース活用計画 70
（9） フレームワークプラン図 71

4－5 八ツ島キャンパス（附属特別支援学校）

（1） 整備の方針・考え方 72
（2） 効率的な敷地利用計画 72
（3） グリーンキャンパス計画 73
（4） 建物改築・改修計画 73
（5） キャンパスデザイン計画 73
（6） エコキャンパス計画 73
（7） 地域コミュニティ・オン・キャンパス計画 73
（8） 施設・スペース活用計画 73
（9） フレームワークプラン図 74

5. キャンパス・アクションプラン ～キャンパス中期計画～

5－1 アクションプラン策定の基本方針（全キャンパス共通） 76

5－2 文京キャンパス

（1） 整備の方針・考え方 76
（2） 施設整備計画 76
（3） 整備計画図 78
（4） 環境整備計画 79
（5） エコキャンパス計画 79

5－3 松岡キャンパス

（1） 整備の方針・考え方 80
（2） 施設整備計画 80
（3） 整備計画図 81
（4） 附属病院再整備計画 82
（5） 環境整備計画 82
（6） エコキャンパス計画 82

5－4 二の宮キャンパス（附属幼稚園・小学校・中学校）

（1） 整備の方針・考え方 83
（2） 施設整備計画 83
（3） 整備計画図 84
（4） 環境整備計画 84
（5） エコキャンパス計画 84

5-4 八ツ島キャンパス（附属特別支援学校）

（1） 整備の方針・考え方 85
（2） 施設整備計画 85
（3） 整備計画図 86
（4） 環境整備計画 86
（5） エコキャンパス計画 86

6. 戦略的な施設マネジメントの推進

6－1 施設マネジメントの現況

（1） 施設有効活用のための施設マネジメント体制 87
（2） 財務構造と施設整備費 87

6－2 施設マネジメントの基本方針

（1） 施設マネジメントの基本的な視点の明確化 88
（2） 施設マネジメントの見える化 88
（3） 本学の実情等に適した施設マネジメントモデルの構築 89

6－3 施設マネジメントの具体的な取組事項

（1） 施設の利用・活用状況調査 89
（2） 施設整備の優先順位 89
（3） 建物管理情報の一元化 89
（4） スペースマネジメント 89
（5） 施設整備等の財源確保 90
（6） 外部組織との協議・連携 90

7. その他キャンパスの現状

7—1 上伏・安竹（農場）

（1） キャンパス環境 91
（2） キャンパス整備の状況（耐震性能・経年数） 92

7—2 上里町宿舎

（1） キャンパス環境 93
（2） キャンパス整備の状況（耐震性能・経年数） 94

7—3 文京第1・第2運動場

（1） キャンパス環境 95
（2） キャンパス整備の状況（耐震性能・経年数） 96

8. 参考資料

（1） キャンパス整備の経緯 97
（2） 各種委員会・WG 名簿 97
（3） キャンパスマスタープラン2012作成までの経緯 98
（4） アンケート集計結果 100
（5） 用語集 102

1. キャンパスマスタープランについて

（1）「キャンパスマスタープラン2012」の作成目的

本学の理念，教育・研究・医療及び社会貢献等における目標を具現化するアカデミックプランに基づき，大学キャンパスにふさわしい施設環境の整備と持続的維持・運用は，継続的に実施すべき重要な経営課題であり，それを効率的，かつ戦略的に推進する為に『キャンパスマスタープラン』の策定は欠かせないものである。

キャンパスの望ましい将来像を描き，今後，本学が具体的に施設整備を進め，整備された施設・設備等を持続的に維持・運用するための基本的な方向を示す『ガイドライン』として「キャンパスマスタープラン2012 」を作成する。

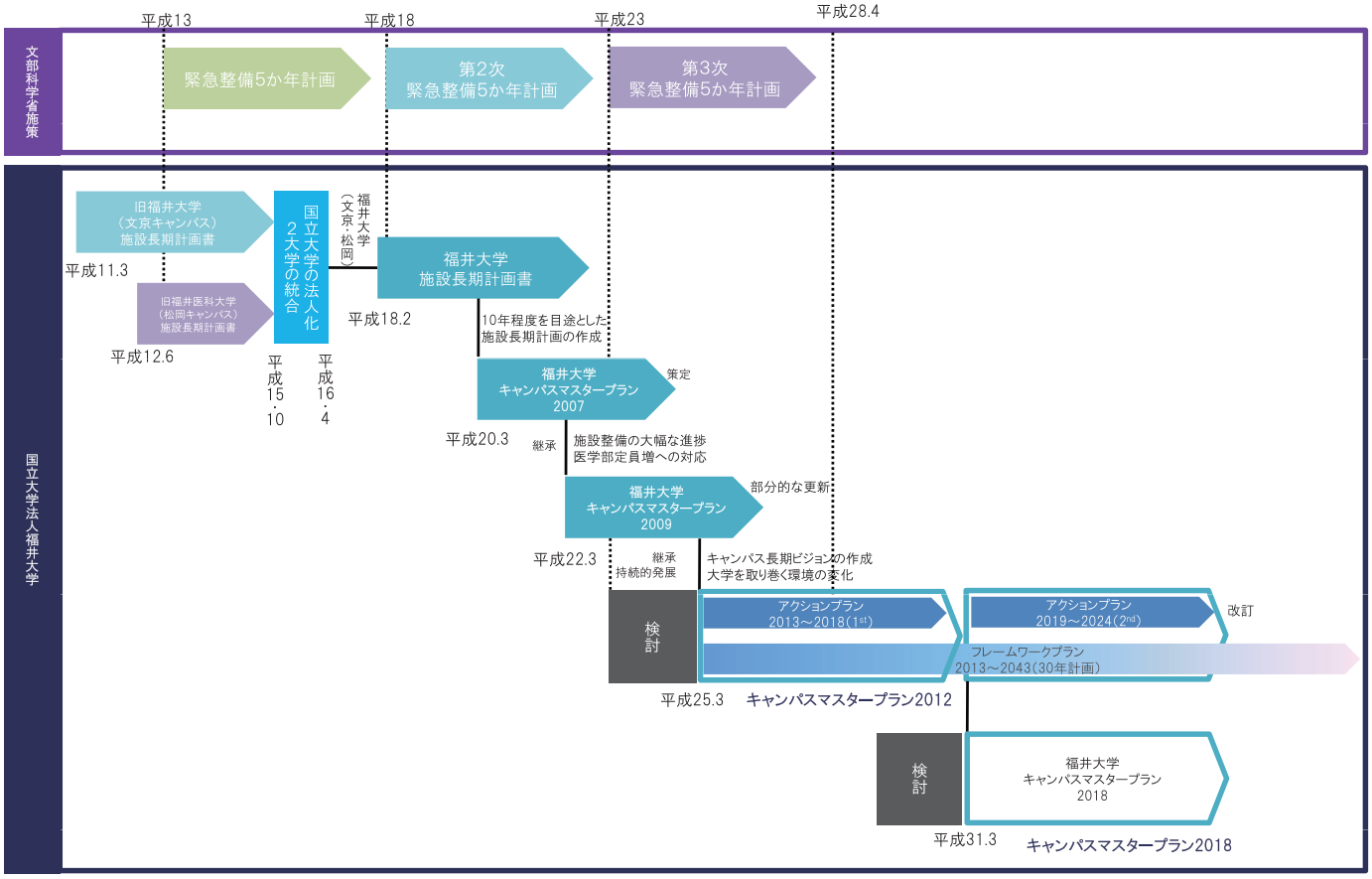
なお，『キャンパスマスタープラン』は，今後の国や大学の方針，予算状況，教育・研究・医療・社会貢献等の変化に柔軟に対応し，原則6年ごとに見直し更新する。

（2）「キャンパスマスタープラン2009」の継承と発展

「キャンパスマスタープラン2012」では，建物の新築・改修整備等を中心として計画されていたこれまでの「キャンパスマスタープラン2007」や「キャンパスマスタープラン2009」を原則継承していくが，文京キャンパスでは多くの建物が改修（耐震・機能）を終えたことや松岡キャンパスでは病院再整備事業に着手したこと等をふまえ，再度，現状キャンパスの課題・問題点を整理し，地域との関連性や福井の気候・風土の反映，キャンパス内の機能別ゾーニング，各種動線，建物の新増築・改修，環境整備，インフラ等を考慮した「キャンパス・フレームワークプラン～キャンパス長期ビジョン～」として30年～50年後のキャンパスを計画する。

また，「フレームワークプラン」の実現を図るため，「キャンパス・アクションプラン～キャンパス中期計画～」として，今後6年～12年後までの改修・改築などの具体的なキャンパス整備を計画する。

なお，これらの計画を実現するために経営的視点を持って，現有施設の有効活用（スペース管理）や施設の機能・性能水準を中長期に渡り保つための計画的な修繕・維持管理やエネルギー管理，コスト管理等の施設マネジメントを実施していくことが重要であり，その推進方法についても具体的な方向性を記載している。



2. 「キャンパスマスタープラン2012」の目標・方針

今後の施設整備の目標を定めるに当たって，福井大学の理念と長期目標及び策定された第2期中期目標・中期計画を基本的な指針とし，国の国立大学等の施設整備の考え方を踏まえて，施設整備（キャンパスマスタープラン）の目標・方針を定める。

（1） 大学の基本的な目標

－福井大学の理念－

福井大学の目指す教育・研究・医療及びこれらを通じた社会貢献

福井大学は，学術と文化の拠点として，高い倫理観のもと，人々が健やかに暮らせるための科学と技術に関する世界的水準での教育・研究を推進し，地域，国及び国際社会に貢献し得る人材の育成と，独創的でかつ地域の特色に鑑みた教育科学研究，先端科学技術研究及び医学研究を行い，専門医療を実践することを目的とします。

－福井大学の長期目標－

本学では，福井大学を約12年後にこのような大学にしたいという長期目標を次のように定める。

1. 福井大学は，21世紀のグローバル社会において，高度専門職業人として活躍できる優れた人材を育成します。
2. 福井大学は，教員一人ひとりの創造的な研究を尊重するとともに，本学の地域性等に立脚した研究拠点を育成し，特色ある研究で世界的に優れた成果を発信します。
3. 福井大学は，優れた教育・研究・医療を通して地域発展をリードし，豊かな社会づくりに貢献します。
4. 福井大学は，ここで学び，働く人々が誇りと希望を持って積極的に活動するために必要な組織・体制を構築し，社会から頼りにされる元気な大学になります。

（2） 教育・研究・医療等の目標

－第2期（平成22～27年度）中期目標・中期計画－

教育に関する目標

1）教育内容及び教育の成果等に関する目標

① アドミッションポリシーに沿った入学者選抜方法等の点検・改善を積極的に行い，それにふさわしい学生の入学を推進する。さらに，多様な学生の受入れに対応して，入学者の大学教育・生活への円滑な移行を支援する。また，学士及び大学院課程では教育の成果や社会ニーズを踏まえ，入学定員の在り方を検討する。

② 基本目標「21世紀のグローバル社会において高度専門職業人として活躍できる人材の育成」を目指して，国際的にも通用する質の高い教育を実施する。

2）教育の実施体制等に関する目標

① 質の高い教育を実現するため，教育内容・方法や成果を点検・評価するシステムを構築し，不断に改善を行う教育実施体制を整備する。

3）学生への支援に関する目標

① 社会を主体的・能動的に担っていく人間の形成を目指して，学生の成長を積極的に促す学習支援，生活支援，就職支援を行う大学づくりを進める。

研究に関する目標

1）研究水準及び研究の成果等に関する目標

■目指すべき研究の水準

① 独創的でかつ特色のある重点研究を推進し，国際・国内研究拠点の形成を目指す。

② 科学技術の発展に寄与する学術研究を推進する。

③ 地域・社会へ貢献する実践研究を推進する。

■成果の社会への還元

① 社会のニーズを踏まえ，地域の産業界・自治体等と連携し，本学の特色を生かした研究成果を社会に還元する。

2）研究実施体制等に関する目標

■研究環境の整備

① 研究面でのグローバル化を図り，特色ある研究成果を世界に向け発信するための体制及び環境を整備する。

② 教員個人及び組織の研究目標の達成並びに新たな研究分野の開拓に向け，適切な研究体制及び環境を確保する。

■研究の質の向上

① 研究水準の向上を図るため，適切な評価を実施する。

その他の目標

1）社会との連携や社会貢献に関する目標

① 地域の知の拠点として，高度な知的資源を社会に還元する。

② 地域との連携などによる生涯学習とキャリアアップ学習を推進する。

③ 地域との連携などにより，地域の活性化等に貢献する。

2)附属病院に関する目標

■教育･研究面

① 地域及び国際社会の先端で活躍する自立した教育･研究能力を有する優れた医療人を養成･輩出し，高度かつ先端的医療の研究開発を遂行する教育･研究環境を整備して，国際社会や地域社会の明日の医学･医療に貢献する。

■診療面

① 社会的要請の強い医療分野の充実を図り，高品質で高い安全性を有する医療を提供する。

■運営面

① 堅固な経営基盤を構築するため，環境の整備･経営改善を推進する。

3)附属学校に関する目標

① 地域における先進的な教育実践と研究の中心として，大学教員と附属4校園の協働体制のもと，学校教育法の理念と幼児･児童･生徒の状況に即した教育の実践と研究を行うとともに，教職大学院の拠点校として，長期実習を中核とした学生の実践力向上と教師教育を推進し，地域に開かれた学校づくりを目指す。

4)施設設備の整備･活用等に関する目標

① 施設設備面におけるマネジメントの強化により、施設等の整備･有効活用を促進し、教育･研究環境を充実させる。

（3） 国の施設整備の考え方

これまで「国立大学法人等施設緊急整備5か年計画」（平成13～17年度）及び「第2次国立大学等施設緊急整備5か年計画」（平成18～22年度）が策定され，これらの計画に基づき施設整備を実施することにより，耐震化や老朽･狭隘解消に一定の進展が図られてきた。

更に，平成23年8月に「第3次国立大学法人等施設整備5か年計画」が策定され，以下のとおり国立大学法人等の施設の計画的かつ重点的な整備を推進することになった。

－基本的な考え方－

■計画的･重点的な施設整備の推進

1 質的向上への戦略的整備 － Strategy

教育研究環境が十分な機能を備えるよう、戦略的に施設整備を推進。

2 地球環境に配慮した教育研究環境の実現 － Sustainability

温室効果ガスの排出削減、省資源・省エネルギーの取組を進めるため、
老朽施設のエコ再生等の推進や再生可能エネルギーの導入を促進。

3 安全な教育研究環境の確保 － Safety

耐震性などの安全性に問題のある施設や
基幹設備（ライフライン）を早急に改善。

３つの“S”で施設を整備

■長期的な視点に立ち、より効果的かつ効率的に施設整備を実施するキャンパスマスタープランに基づく施設整備の推進

システム改革の取組を推進

施設の適切な維持管理や有効活用、多様な財源を活用した施設整備などの取組を推進。

○施設マネジメントの取組

現在保有する施設を最大限に活用するため、適切な維持管理やスペースの有効活用、
エネルギーマネジメントなどの取組を一層促進する。

○多様な財源を活用した施設整備の取組

各法人において、長期借入金、寄附、地方公共団体や企業等との連携、
その他の自己財源など、多様な財源を活用して施設の整備や確保を実施しており、
これらの取組を一層促進する。

ー整備内容ー

■「重点的に整備すべき施設」として整備を推進

①建物の耐震化，老朽施設の改善

②狭隘解消整備

ー　高度化・多様化する教育研究に対応するためのスペース確保

③大学附属病院の再生

ー　先端医療・地域医療に対応した大学附属病院の計画的な整備

■老朽化した基幹設備（ライフライン）を改善

安全性と機能性を確保するため，経年25年以上の基幹設備（ライフライン）を解消

ー実施方針ー

1. 教育研究への効果やシステム改革への取組状況などを調査・評価し、事業を選定。
2. 質的向上への戦略的整備のため，カテゴリー毎に高い教育・研究効果が見込まれる事業を優先。
3. システム改革の推進，コスト縮減
4. 優先的に支援する対象の明確化と必要な情報提供。
5. 投資の効果を最大限発揮させることを前提とした必要経費の確保。

（4）「キャンパスマスタープラン2012」の基本目標・基本方針

大学キャンパスは，創造性豊かな人材育成や独創的・先端的な学術研究のための活動拠点であり，教育・研究・医療活動を通じた社会貢献を行うための重要な基盤である。今後，これらの活動目標を達成し，社会から頼りにされる元気な大学としていくためには魅力あるキャンパスの充実が何よりも重要である。

豊かな人間性を育くむのにふさわしく，充実した教育・研究・医療を通じた社会貢献を存分に展開するため，高機能かつ多機能な施設環境と安全・安心で快適なキャンパス環境の構築，キャンパスライフのQOL（Quality Of Life）の充実，その持続的維持・運用を目指し，「キャンパスマスタープラン2012」の基本目標・方針を次のとおりとする。

1）基本目標

①「教育」・「研究」・「医療」等の基盤を支えるサスティナブルキャンパス

・独創的でかつ特色ある研究が推進でき，世界に誇れる，卓越した研究拠点となる施設整備

・グローバルな社会における人材養成機能を重視した教育研究の基盤となる施設整備

・最先端で質の高い教育，研究，医療を実践し，将来，社会のニーズ・変化に対しフレキシビリティのある施設整備

②地域・社会・国際貢献に資する，人が集い，知の交流の場となるグローバルキャンパス

・様々な人が利用し，多様性や地域性・国際化等に立脚した豊かな知の交流が生まれる施設整備

③安全・安心で快適なユニバーサルキャンパス

・ここで学び，働く人々が誇りと希望を持ち，安全・安心で快適なキャンパスライフが送れる施設整備

2）基本方針

基本目標を実現するため，以下の基本方針により中長期的な施設整備・維持管理・運用計画を立て，これに基づき整備をすすめる。

①高度化・多様化する教育，研究，医療等に発展的に対応可能なキャンパスづくり

②大学の特色や教育研究成果の情報発信拠点としてのキャンパスづくり

③地域から国際社会まで幅広く貢献できる人材を育むキャンパスづくり

④福井らしさを感じさせる，個性豊かで魅力ある美しいキャンパスづくり

⑤学生・職員や外国人・地域住民等が集い，知の交流を促すキャンパスづくり

⑥安全性を優先し，誰もが安心・快適に活動できるユニバーサルキャンパスづくり

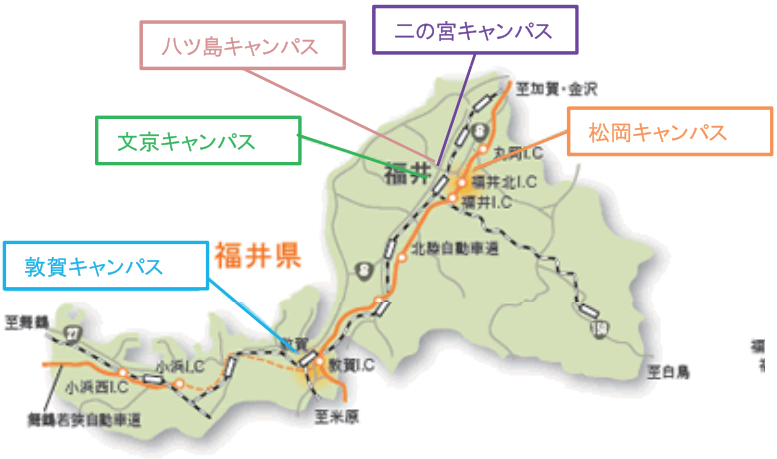
⑦地球環境保全や健康，QOLに配慮した緑豊かな美しいエコキャンパスづくり

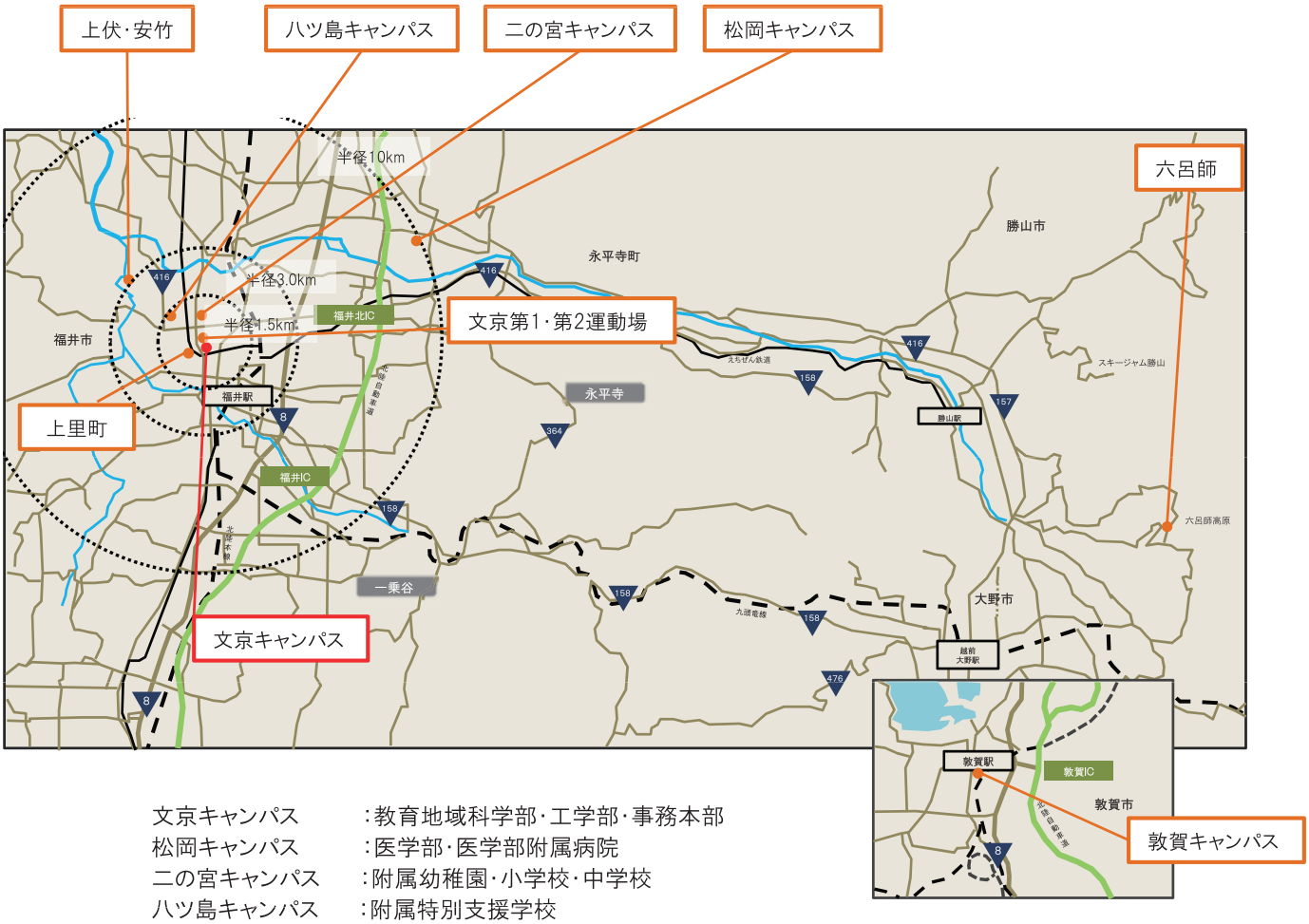
3. キャンパス及び施設の概要(現状と課題)

3－1 福井大学各キャンパスの位置づけ

福井大学の主要キャンパス(文京･松岡･二の宮･八ツ島･敦賀)は，福井市内，永平寺町，敦賀市内と，福井県嶺北･嶺南に点在している。本部のある文京キャンパスからの直線距離は，松岡キャンパスまで約10km，二の宮キャンパスまで約1km，八ツ島キャンパスまで約2km，敦賀キャンパスまで約50kmである。

また，文京キャンパス―松岡キャンパスは公共交通機関による移動が難しく，自動車を用い約30分を要する。





文京キャンパス	：教育地域科学部･工学部･事務本部
松岡キャンパス	：医学部･医学部附属病院
二の宮キャンパス	：附属幼稚園･小学校･中学校
八ツ島キャンパス	：附属特別支援学校
敦賀キャンパス	：附属国際原子力工学研究所
上伏･安竹	：農場･運動場
上里町	：学生寄宿舎･国際交流学生宿舎･国際交流会館
文京第1･第2運動場	：運動場･テニスコート
六呂師	：大学課外活動施設

3－2 各キャンパスの地域での位置づけ

【文京キャンパス】

文京キャンパスは，「福井市都市計画マスタープラン」において，【複合市街地ゾーン】の内，春山地区に位置する。この地域は，『教育・文化の町』として，3つの保育園・市立春山小学校・市立明道中学校・県立藤島高校・私立啓新高校など伝統校，名門校がある。更に，県立美術館・市立図書館・市立文化会館・市民福祉会館・広域市町村圏のフェニックスプラザと数多くの文化施設が存在する。

「まちづくり方針」の中で，［多くの教育・文化施設が立地する特性を活かして，子どもから若者，文化人，高齢者など多様な人々が集い，いきいきと活動できる文化の薫り高いまちづくりを進めて行く」とされている。また，「えちぜん鉄道田原町駅」及び「新田塚駅」周辺を「暮らしの豊かさを高める地域拠点の形成ゾーン」と位置づけており，田原町駅の交通連結点としての機能を活かし，日常生活を支える商業・業務機能や文化・教育機能，スポーツ機能，コンベンション機能などを集積した地域拠点を形成するとしている。

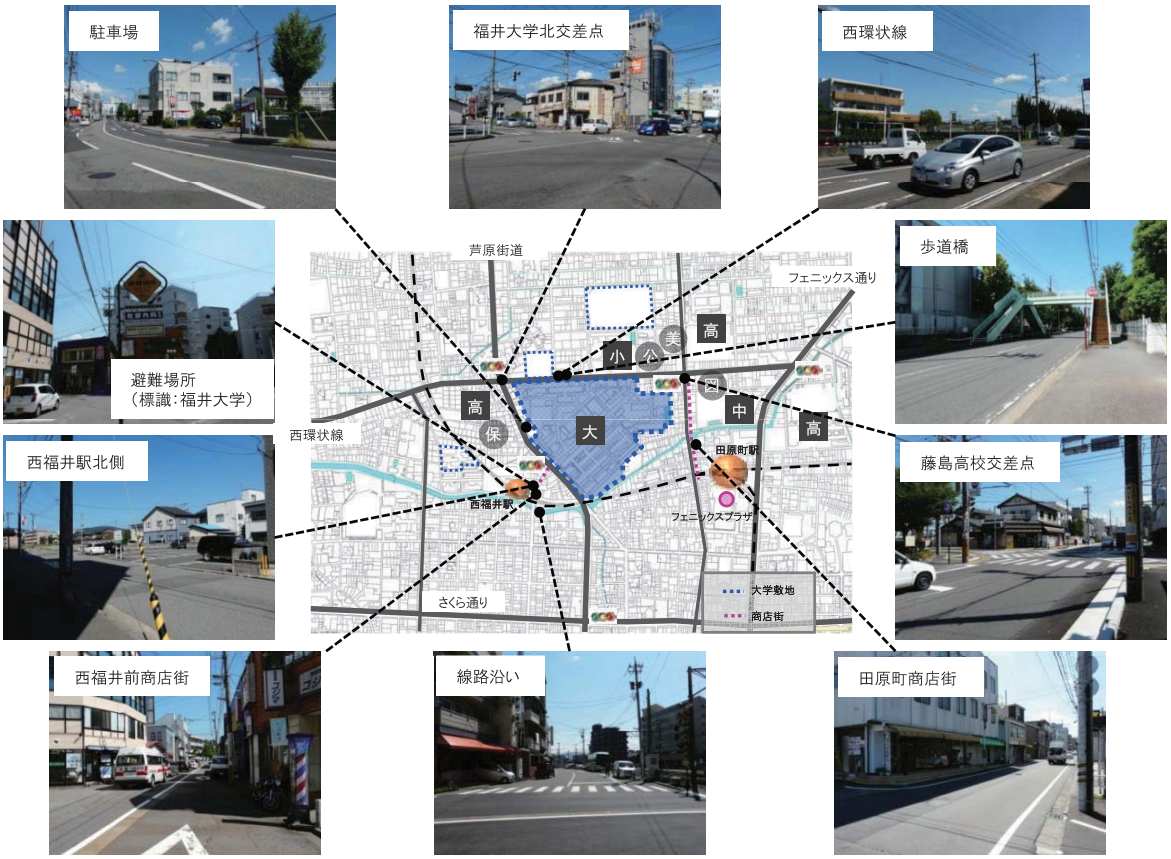
また，本学が位置する春山地区での拠点避難場所は「地震時：春山小学校・風水害時：春山公民館」であり，文京キャンパスは収容避難所として指定されている。

■拠点避難所とは、防災備蓄倉庫・非常用貯水装置があり，収容避難所としても機能します。

■収容避難所とは、避難所の中でも一定期間の避難所生活が送れるような避難所（屋内施設）を指します。

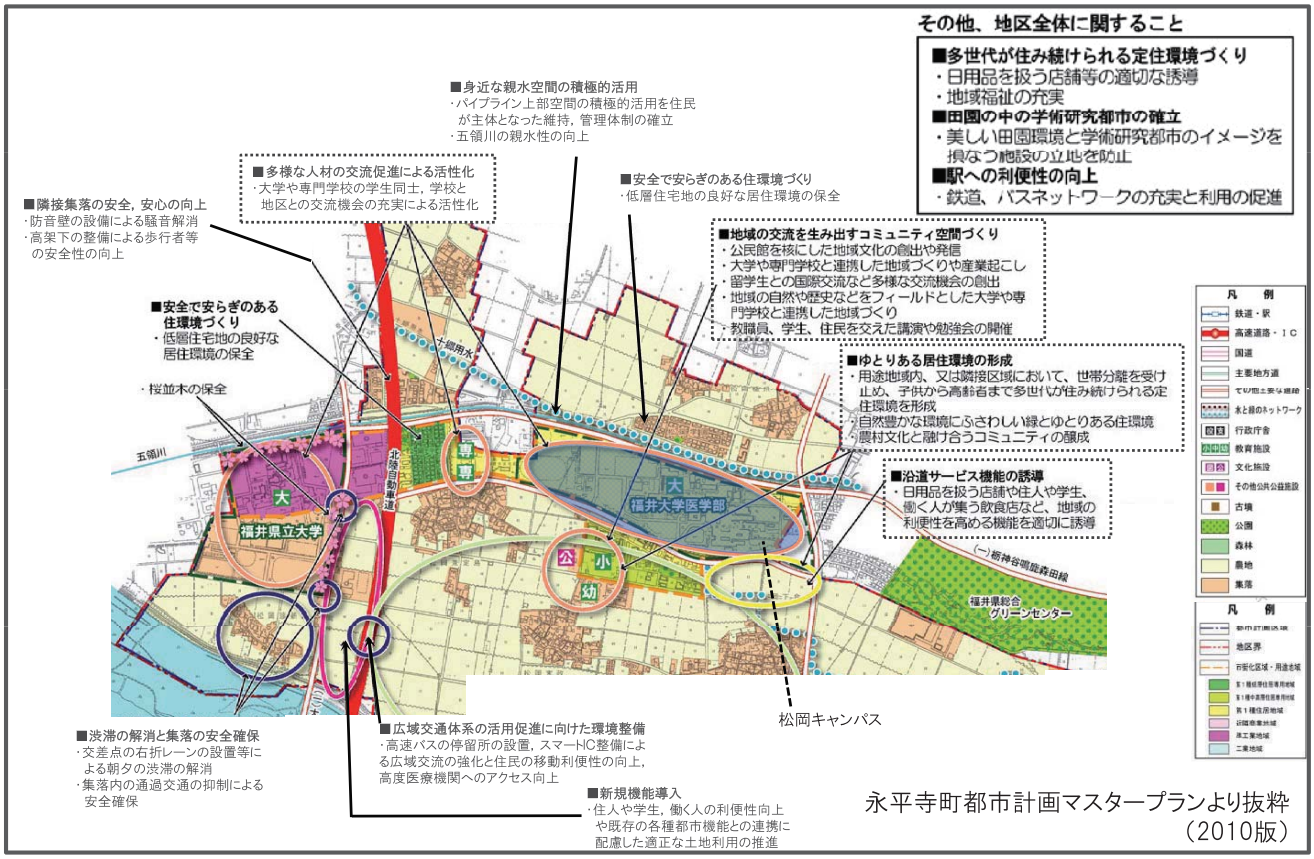
【改訂】福井市都市計画マスタープランより抜粋（2010版）

【文京キャンパス周辺状況】



【松岡キャンパス】

松岡キャンパスは，「永平寺町都市計画マスタープラン」において，【学術研究都市】に位置づけられ，地域に開かれた学びの場となる交流拠点の創出や，情報，文化，商業機能等の充実を図り，多様な人が学び，集う環境づくりを進め，また，周辺の田園環境と調和した魅力ある景観の創出を目指している。本学は，周辺の福井県立大学や専門学校と共に，「多様な人材の交流促進による活性化」や「地域の交流を生み出すコミュニティ空間づくり」を担う存在として期待されている。



永平寺町都市計画マスタープランより抜粋（2010版）

【松岡キャンパス周辺状況】

【二の宮キャンパス】

二の宮キャンパスは，「福井市都市計画マスタープラン」において，【ゆとりの住宅地ゾーン】に位置し，周辺は住宅地及び交通量の多い「サン二の宮通り」に面している。明新公民館区での拠点避難場所は「地震時：明新小学校・風水害時：明新公民館」と指定されているが，二の宮キャンパスはその他の収容避難所として指定されている。

【二の宮キャンパス周辺状況】

幼稚園前歩道

幼稚園正門前

幼稚園東側道路

小学校正門前

小学校正門前

中学校正門前

【改訂】福井市都市計画マスタープランより抜粋
（2010版）

【ハツ島キャンパス】

ハツ島キャンパスは，【田園環境共生ゾーン】に位置し，九頭竜川，日野川，足羽川の合流部で，河川に育まれた自然環境と景観を保全しながら，教育施設をはじめとする公共施設を活かした，快適でうるおいの感じられるまちづくりを進めていく地域にある。

【ハツ島キャンパス周辺状況】

敷地西側環境

敷地北西側環境

正門前

敷地南側環境

敷地南側環境

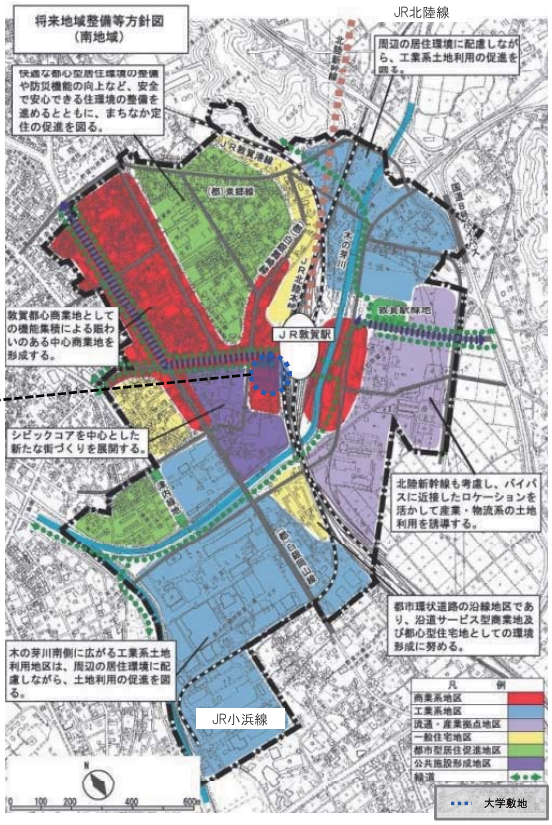
敷地東側（藤島中学校）

【改訂】福井市都市計画マスタープランより抜粋
（2010版）

【敦賀キャンパス】

敦賀キャンパスは，「敦賀市都市計画マスタープラン」において，【敦賀都心商業地】に位置し，機能集積による賑わいのある中心商業地を形成する地域にある。また，敦賀駅周辺ゾーンにあり，都市づくりの拠点の一部としての役割も担う。

【敦賀キャンパス周辺状況】



敦賀市都市計画マスタープランより抜粋
（2009版）

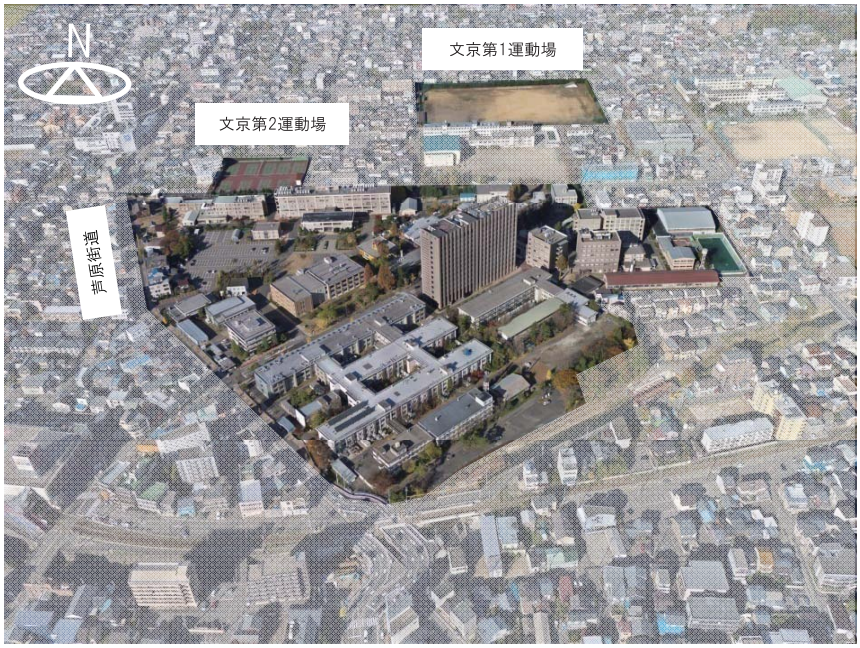
3―3 文京キャンパスの施設の概要(現状と課題)

（1） キャンパス環境

①キャンパスの立地環境

県庁所在地である福井市の市街地北部に位置し，周辺は小・中学校，高校，美術館，図書館等が多く文教地区を形成しており，キャンパス内の道路は通学路としても利用されている。

キャンパスの主要アプローチは西側の県道5号線（芦原街道）に接しており，西側北部は隣地に接している。北側は歩道付きの公道に面しており，また，敷地周辺部には原則的に緩衝帯としての緑地を設けているが、緑地が設けられない部分もある。



文京キャンパス　航空写真
（平成24年11月）

②所在地

●所在地：福井市文京3丁目9番1号
●学部等：教育地域科学部・工学部・附属図書館・産学官連携本部・学内共同教育研究施設・保健管理センター・事務局・福利厚生施設・総合情報基盤センター・課外活動共用棟等

③法的指定等

●都市計画区域内　第1種中高層住居専用地域（建ぺい率60%・容積率200%）
●準防火地域

④敷地面積・建物面積

●敷地面積　110，248㎡
●建築面積　30，725㎡
●建物延床面積　93，977㎡
●建ぺい率　27．8%
●容積率　85．2%

⑤防災

福井市の避難場所（地震時・風水害時共）に指定されている。
（福井市洪水ハザードマップ：洪水深が2.0m～5.0m未満の地域）

⑥ISO

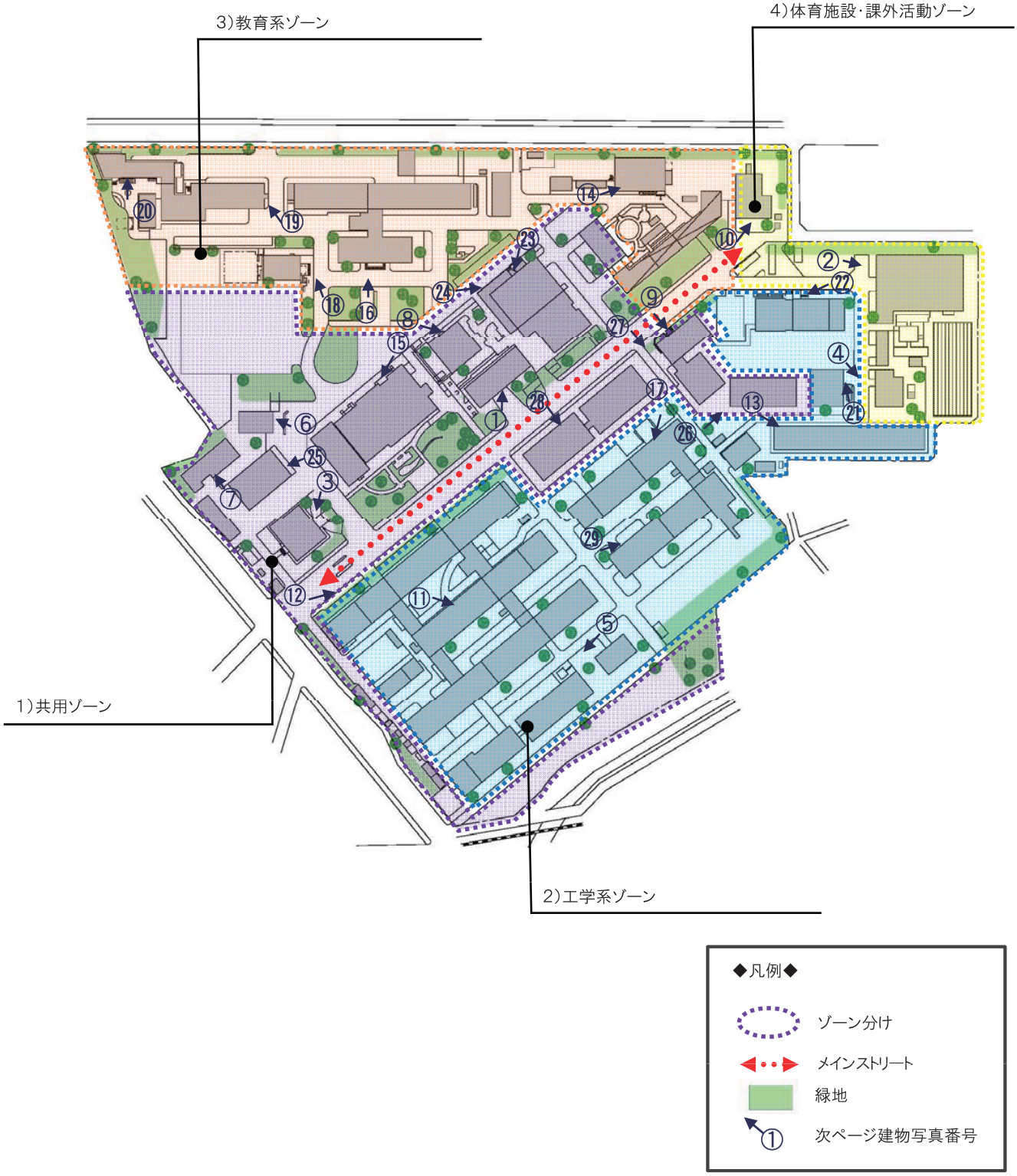
ISO14001（環境マネジメントシステムに関する国際規格の総称）認証取得

⑦ キャンパスゾーニングの現状

文京キャンパスのゾーニングは以下のとおりである。

1）共用ゾーン　（事務棟・図書館・学生サービス施設が集中しているが，事務棟が未改修である）
2）工学系ゾーン　（工学系については，ほとんどが耐震改修及び機能改修を終えている）
3）教育系ゾーン　（教育系については，耐震改修及び機能改修を終えている）
4）体育施設・課外活動ゾーン　（体育施設・課外活動施設が集中している建物は，改修が行われず，劣化が進んでいる）

正門を起点とした東西のメインストリートは特に交通量が多く，且つ，文京団地を大きく南北に分けている。共用ゾーンは中央部にあるため，工学系ゾーンと教育系ゾーンのどちらからも利便性が良い。



【改築必要建物】･･･

･建設年
昭和39年以前
（経年48年以上）
･大規模改修が行われていない
･機能不全が著しい

①. 大学会館（S37）
築50年を経過し，老朽化が著しく耐震性も悪い。平成24年には語学センターとして一部内部改修を行った。

②. 第1体育館（S40）
築47年を経過し老朽化が著しい。また，天井高が低く，公式試合が出来ない等，活動に支障をきたしている。

③. 事務棟（S42.S63）
築45年を経過し，老朽化が進んでおり，事務局機能を維持するため一部内外部改修を行っているが，耐震性･機能性が悪い。また，来客が多いがバリアフリー対応になってない。

④. 第2体育館（武道場）
（S44.H22外壁･防水改修）
築43年を経過し，老朽化が進んでいる。
平成22年に外壁･防水改修完了。

【改修必要建物】･･･

･建設年
昭和40年～平成9年
（経年47年～15年）
･大規模改修が行われていない

⑤. 総合研究棟Ⅲ（工学系4号館）
（S46.S47.S60）
耐震性は確保されているが，築41年及び27年で老朽化･機能劣化が進んでおり，工学系建物の中で唯一未改修である。

⑥. 保健管理センター（S50）
築37年を経過し，老朽化が進んでいる。

⑦. 牧島荘（S58）
築29年を経過し、老朽化が進んでいる。
非常勤講師や職員厚生施設だけでなく，会議やゼミ等にも使用し有効活用されている。

⑧. 総合情報基盤センター（S61）
築26年を経過し，老朽化が進んでいる。
平成23年に外壁･防水改修完了。

⑨. 産学官連携本部（Ⅰ号棟）（H6）
産学官連携本部の主要施設として産学連携･地域貢献の用途に活用されている。

⑩. 課外活動共用棟（H6）
本学では比較的新しい施設。今後とも適切な維持保全を行い有効に活用する。

【改修済み建物】･･･

・建設年
　～平成9年
　（経年15年以上）
・平成10年以降に
　大規模改修が行われた

⑪. 総合研究棟Ⅲ-2（工学系1号館2号棟）
（S41.H14耐震改修）
総合研究棟Ⅲ-3（工学系1号館3号棟）
（S42.44）
平成14年に耐震・機能改修が完了した。
外付けフレーム工法を採用。

⑫. 総合研究棟Ⅲ-1（工学系1号館1号棟）
（S37.39.40.41.42.H19耐震改修）
平成19年に耐震・機能改修完了。メイン道路に面するため意匠を考慮しﾀﾞﾌﾞﾙｽｷﾝ工法を採用。前面の環境整備を行い正門付近が明るくなり雰囲気がよくなった。

⑬. 先端科学技術育成センター
（S39.H20耐震改修）
平成20年に耐震改修完了。

⑭. 共用講義棟（S41.H20耐震改修）
平成20年に耐震・機能改修完了。

⑮. 総合図書館
（S41.S46.S57.H21耐震改修・増築）
平成21年耐震・機能改修に伴い書庫を増築し，高機能化を図った。
一般にも一部開放している。

⑯. 総合研究棟Ⅴ（教育系1号館）
（S44.S48.H21.22耐震改修）
平成21年～22年に耐震・機能改修完了。
平成20年度開設の教職大学院の拠点となっている。

⑰. 総合研究棟Ⅳ-1（工学系2号館）
（S42.S46.S48.H22耐震改修）
平成22年に耐震・機能改修完了。

⑱. 教育実践総合センター（S55.H22改修）
平成22年に機能改修完了。

⑲. 総合研究棟Ⅵ（教育系3号館）
（S54.H22耐震改修）
平成22年に耐震・機能改修完了。

⑳. 音楽棟（S51.H22）
平成22年に耐震・機能改修完了。

㉑. 超低温物性実験施設（S48.H22改修）
平成22年度に機能改修完了。

㉒. 総合研究棟Ⅶ（工学系3号館）
（S52.H4.H22耐震改修）
東館は平成22年に耐震・機能改修が完了。
西館は平成23年に外部改修完了。

㉓. 学生支援センター
（S45.S57.H5.H14.H24耐震改修・増築）
平成24年耐震・機能改修に伴い渡り廊下を増築し，学生サービスの充実を図った。

多様な財源の活用による整備！

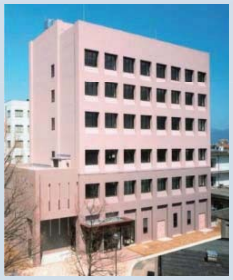
㉔. 学生支援センター（食堂）（S45.H25増築）
平成25年に生協の寄付等により食堂の増築を行った。

【良好建物】･･･

・建設年
平成10年～
（経年15年未満）

多様な財源の活用による整備！

㉕. アカデミーホール(H14)
創立50周年を記念して寄付によって建てられた。設計コンペを行い，デザイン的に工夫された建物。地域貢献にも有効に活用されている。



㉖. 総合研究棟Ⅱ(H14)
本学が重点研究を進める遠赤外領域開発研究センターとして研究を行っている。

㉗. 産学官連携本部(Ⅱ号棟)(H16)
本学が重点研究を進める産学官連携本部として研究や若手研究者支援を行っている。平成22年度に(独)科学技術振興機構(JST)事業の採択により，2階～6階部分を「ふくい産学官共同研究拠点」として改修を行った。

多様な財源の活用による整備！

㉘. 総合研究棟Ⅰ(H14.H20)
平成14年に本学最初の総合研究棟として建築。平成20年には西棟を増築し，一部自己資金により整備した。

㉙. 総合研究棟Ⅳ-2(工学系実験棟)(H26)
平成24･25年度に改築を行っている。

⑧ 人口分布（教職員・学生等）からみるキャンパス

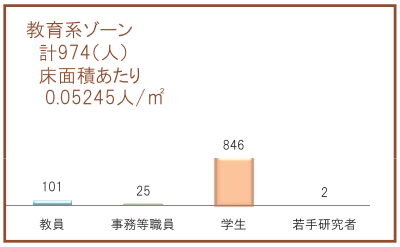
文京キャンパスの人口密度は，人員が時間によりかなり変動はあるが概ね下記のとおりである。学生支援センターは，食堂部分の狭隘を解消するために，平成24年度に改修，一部増築を行った。

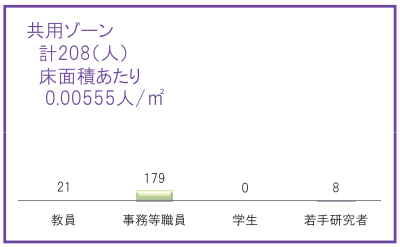
交通量調査データによると，学生支援センターと大学会館周辺は，短い休憩時間に歩行者，自転車，自動車等の通行や駐車・駐輪があり，かなり混雑している状況である。センターや会館利用者にとって建物周辺の駐車・駐輪は，スムーズな通行の妨げになるうえ，付近の車両通行により人身事故の発生が懸念されるため，車両通行を制限し，歩車を分離する必要がある。また，多数の学生等が集合することから，例えば，メインストリートの一部を歩行者のみの緑豊かな交流広場等とし，積極的なコミュニケーションが図れる仕掛けをつくれば，大学の活性化や地域住民との交流を促進する施設が効率よく整備できる。

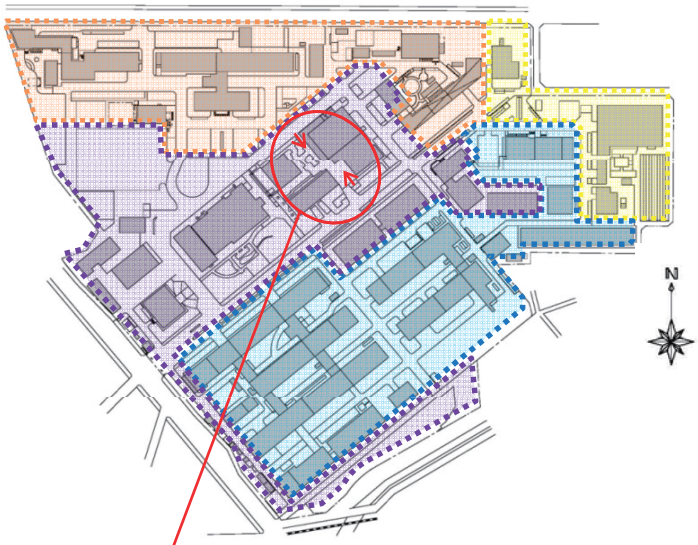
	教員	事務等職員	事務等職員（特命・パート等・一部看護師含む）	学部生	研究科	若手研究者	学生内の留学生（内数）
教育地域科学部・教育学研究科	84	1		705	141	2	14
教育地域科学部附属教育実践総合センター	4						
教育地域科学部附属地域共生プロジェクトセンター	2						
大学院教育学研究科	11						
教育系ゾーン事務局職員		11	13				
工学部・工学研究科	150			2537	672	10	129
工学部技術部		18					
工学系ゾーン事務局職員		16	19				
産学官連携本部	4					5	
遠赤外領域開発研究センター	7					3	
総合情報基盤センター	1						
アドミッションセンター	1						
留学生センター	5						
語学センター	1						
保健管理センター	2						
中央管理ゾーン事務局職員（役員含む）		121	58				
合計	272	167	90	3242	813	20	143

福井大学基礎資料2012より

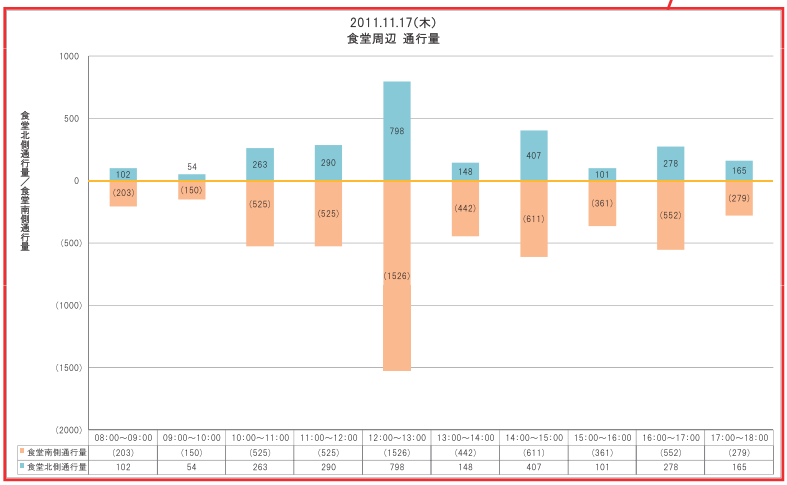
【各部局構成員数（人）】

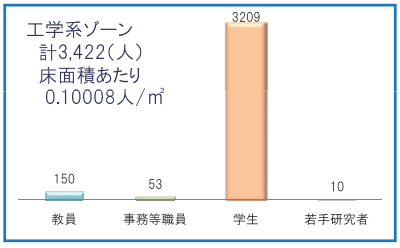


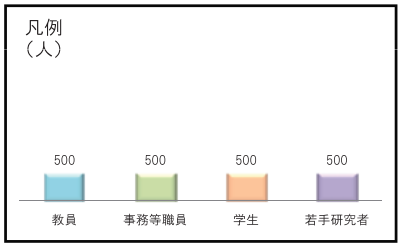




【2011.11.17 交通量調査時データ】







【図・表 各ゾーン利用者数】

⑨ 建物分布と施設整備率からみるキャンパス

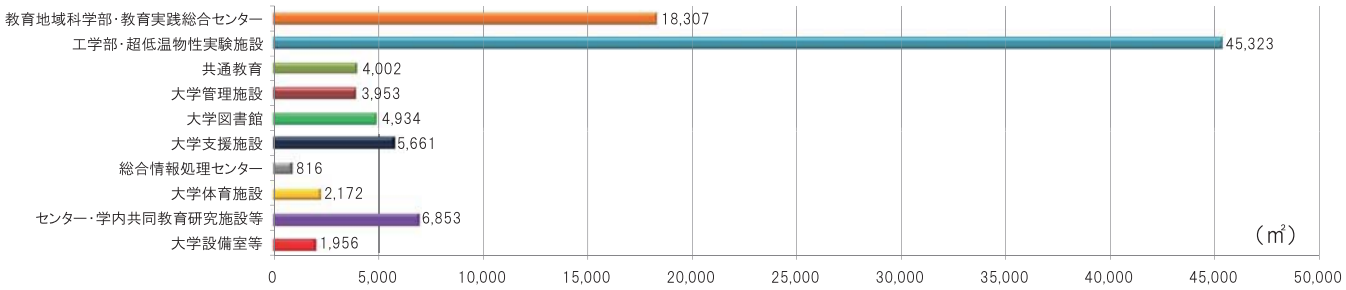
共用ゾーンには，教育系・工学系をはじめ，両学部が共通で利用可能な福利施設や図書館などの施設及び産学官連携本部が配置されている。共通教育に関しては，主に教育系ゾーンに配置されており，工学部系の学生には不便である。

文京キャンパスの施設整備率(保有面積／必要面積)は、現在73.49%となっており，全国の国立文教施設の平均施設整備率88.96%と比較すると，かなり整備が遅れている。

また，部局別で見ると，教育地域科学部は95.65%と全国平均より高いが，工学部が69.11%，その他が69.23%となっている。工学部やその他の整備率が全国平均と比較して極端に低く，狭隘が進んでいる事が分かる。今後，狭隘による教育・研究への影響がどの程度か，どこに不具合が出ているのか等を詳細に調査し，早急に対応策を検討し，計画案を立案する必要がある。教育地域科学部についても，全学の施設有効活用の観点から，利用方法の見直しも検討する必要がある。

面積区分	大学教育・研究施設（文京全体）	大学教育・研究施設（教育地域科学部）	大学教育・研究施設（工学部）	大学教育・研究施設（その他）	大学図書館	大学体育施設	大学支援施設
保有面積（㎡）	73, 144	15, 606	44, 524	13, 014	4, 934	2, 172	5, 661
必要面積（㎡）	99, 534	16, 316	64, 421	18, 797	6, 216	2, 296	5, 000
整備率（%）	73.49%	95.65%	69.11%	69.23%	79.38%	94.60%	113.22%
全国整備率との比較（平成24年度）	73.49%	95.65%	69.11%	69.23%	79.38%	94.60%	113.22%
	文京整備率	教育地域科学部	工学部	その他	文京整備率	文京整備率	文京整備率
	100.00%	50.00%	0.00%	全国整備率	全国整備率	全国整備率	全国整備率
	88.96%	66.01%	107.88%	125.07%			

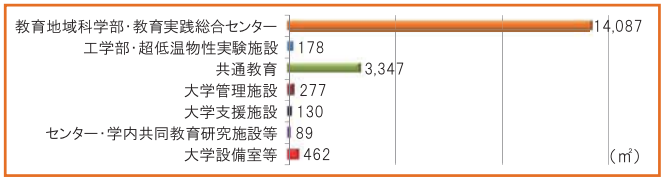
【施設整備率】



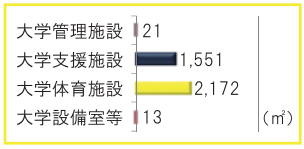
【文京キャンパス調査単位別保有面積】

福井大学実態調査より
（平成24年度末現在）

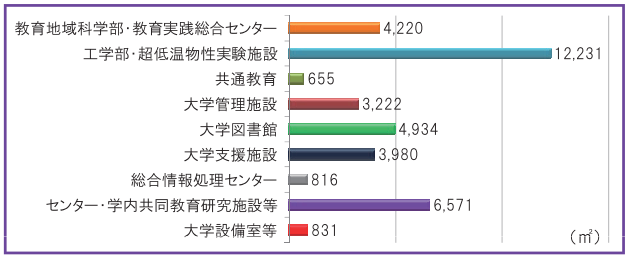
【教育系ゾーン】 建ぺい率：23.27%・容積率：75.13%

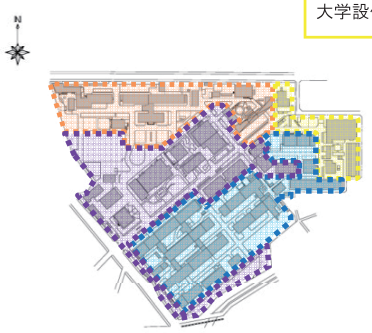


【体育施設・課外活動ゾーン】
建ぺい率：23.88%・容積率：38.15%



【共用ゾーン】 建ぺい率：32.42%・容積率：94.43%





【工学系ゾーン】 建ぺい率：27.09%・容積率：94.93%

【図・グラフ 各ゾーン建物保有面積】

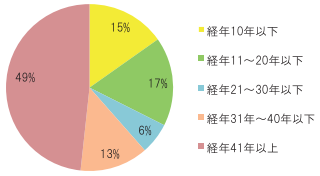
（2）キャンパス整備の状況（経年数・耐震性能）

文京キャンパス全体の建物面積　93,977㎡の内，耐震化率は90%を超えており，ほとんどの建物が耐震改修を完了しているが，主要建物では事務棟（Is値0.57）等，一部耐震性能が低い建物がある。また，経年が40年を超えた建物が全体の50%近くを占めており，今後は改築を含めた検討が必要である。

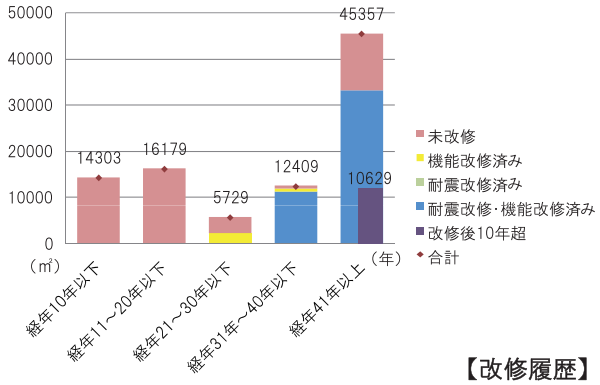
（平成24年度末現在）

【各建物の経年数】

【保有建物の経年構成比】



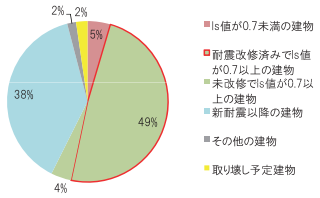
経年10年以下の建物	：14,303㎡
経年11～20年以下の建物	：16,179㎡
経年21年～30年以下の建物	：5,729㎡
経年31年～40年以下の建物	：12,409㎡
経年41年以上の建物	：45,357㎡
機能改修済み	：33,655㎡
改修後10年以上経過	：10,629㎡



【改修履歴】

【各建物の耐震性能】

【耐震化率】



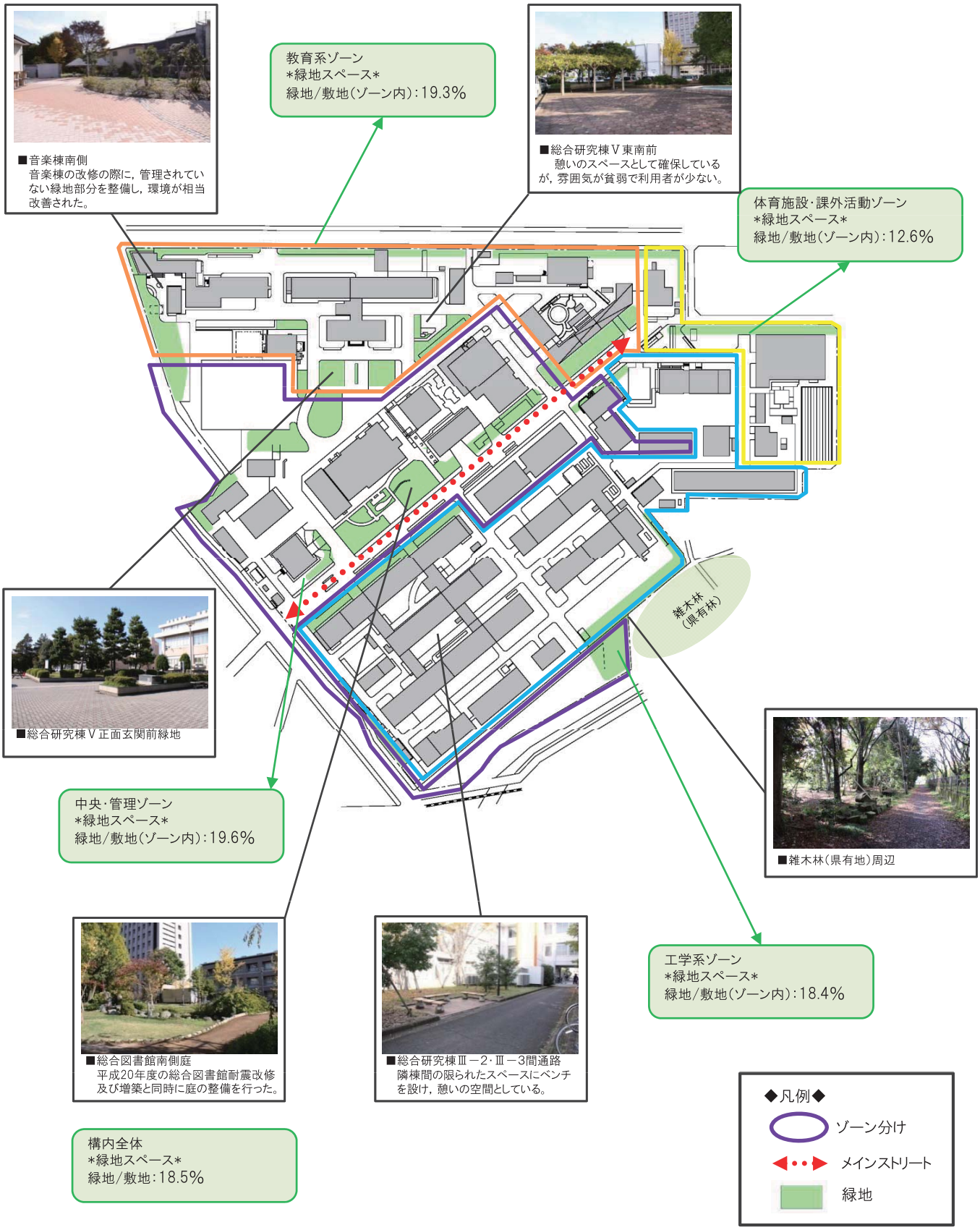
Is値が0.7未満の建物	：4,315㎡
耐震改修済みでIs値が0.7以上の建物	：45,779㎡
未改修でIs値が0.7以上の建物	：3,831㎡
新耐震以降の建物	：36,224㎡
その他の建物	：1,671㎡
取り壊し予定の建物	：2,157㎡

（3）屋外環境整備

①緑地

文京キャンパス全体の緑地率は18.5%と低い。ゾーン別の緑地率でみると，偏りは少なく平均的に分散している。緑地の形態としては総合図書館南庭のように中高木で並木や観賞に用いられる樹種を有する庭園的緑地が多く，学生等が集い憩うグリーン広場的なものがあまりない。学内アンケートの結果（P100参照）によると，緑地の割合は少ないと感じている意見が多く，緑地面積の充実が必要である。

また，樹種の統一性や目的性をあまり感じることができない。敷地南側には雑木林（県有林）があり，学生の活動スペースとなっているが，キャンパスとの連続性や一体感に乏しい。北側の敷地周辺の植栽は高木でキャンパスを目隠しし，暗くするイメージを与えている。



② キャンパス動線・駐車場・駐輪場・サイン

駐車場が各所に点在し，車両動線の制限が難しい。また，メインストリートには，駐輪場が建物に沿って設置されており，駐輪が非常に多い。さらにマナーの悪い駐車や駐輪もあり，キャンパスの景観を大きく損ねている。

敷地案内図や施設誘導サインのデザインは統一されているが，設置されている場所や内容が分かりづらいものがあり，来学者に不便を強いている。

■総合研究棟Ⅴ講義棟前
講義棟付近の通路に自転車があふれている。

■北門
正門以外の門は，キャンパスの入口としての雰囲気がない。

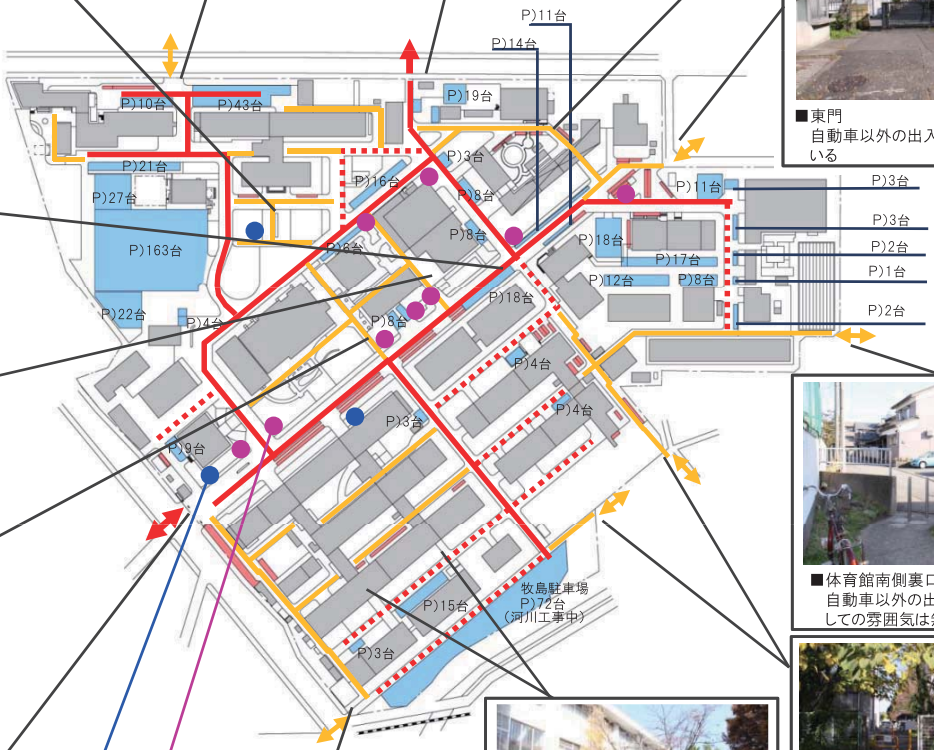
■北門ゲート
自動車の出口専用ゲートがある

■共用講義棟前
駐輪場から自転車があふれている

■メインストリート
駐輪場が配置され，メインストリートとしての雰囲気を損ねている。また，歩行者・自動車等，全ての車両が通行可能であり，交通量も多い。

■東門
自動車以外の出入口として利用している

■食堂前
キャンパスの中心となる正面通路や食堂・大学会館周辺に駐車や駐輪スペースが散在し，景観としてまとまりに欠ける。



■体育館南側裏口
自動車以外の出入口であるが，門としての雰囲気は無い。

■総合図書館・大学会館間

■工学系実験棟南側裏口
自動車以外の出入口であるが，門としての雰囲気は無い。

■正門
歩行者・自動車等，全ての出入口となり，混雑が見られる。

■総合研究棟Ⅷ（工学系4号館）裏口
自動車以外の出入口であるが，門としての雰囲気は無い。

■総合研究棟Ⅲ周辺状況

●敷地案内図

■牧島駐車場前道路

●施設誘導サイン
（日本語・英語表記）

◆凡例◆
- 車両メイン動線
- 車両サブ動線
- 歩行者動線
- 敷地案内図
- 施設誘導サイン
- 駐車場（計 605台）
- 駐輪場（計1,195台）

（駐車場整備）

車社会である福井において，駐車場の確保は重要な問題である。

構内道路は路上駐車であふれている

建物周辺の空いたスペースに駐車される

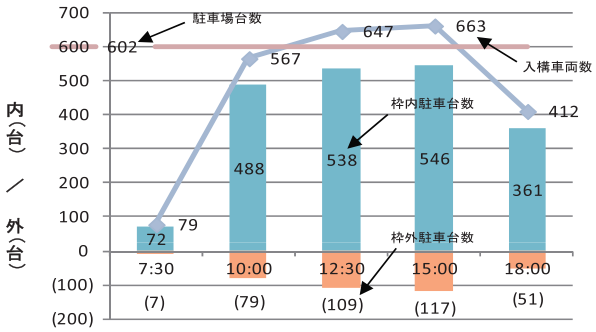
冬期間，除雪により駐車場が減少する

福井市の特性として通勤･通学者の居住地からの公共交通が不便であったり，研究等で遅くなった時のために車での入構希望者は多い。

現在，文京キャンパス内は駐車場はもちろん，それ以外の場所のいたるところに駐車され，車の見えない風景はないといっても過言ではない状態である。駐車台数や駐車のあり方を検討する必要がある。

前頁の文京キャンパスにおける駐車場の配置にも示されるが，まとまった駐車場は2ヵ所程度で，それ以外は10台程度の小規模駐車場がキャンパス全域に分散して配置されている。

このキャンパスマスタープランにおいては駐車場整備の在り方について，ハード整備の側面から検討を行っていくが，これに並行するソフト面での課題として，「駐車料金の課金」や，「公共交通機関への振り替えのインセンティブ制度」等について検討を行っていく必要がある。



文京キャンパスにおける1日の駐車台数の経時変化
（H23.6調査時）

平成23年6月の文京キャンパスにおける一日の駐車台数の経時変化に示されるように，日中は入構車両数が駐車場台数を上回っており，駐車台数とのバランスがとれていないことがわかり，入構車両の制限に問題があることが考えられる。（入構は許可制である。）

また，文京キャンパスは駐車場が分散しているため，満車に近い状態のときには，利用者は駐車場を探して構内を車でぐるぐると回っていることが予想され，無用な運行が交通事故の危険性の増大や，利用者の貴重な時間ロスを発生させていることが考えられる。

このような状況から，駐車場に関しては，
①構内に小規模駐車場が点在する状況の改善
②車両動線と歩行者動線が重複している状況について改善
③学生，教職員，来客者の車両動線の区分の明確化
④ハートフル専用パーキング，搬入車両用パーキングの配置
⑤積雪時の駐車台数と雪捨て場の確保
がポイントになると考えられる。

（4） インフラストラクチャー整備

インフラ設備の課題として，受電変電所の老朽・狭隘化，共同溝が未整備で，配線配管類が工事のたびに掘削され，キャンパス環境の悪化と耐震性能に不安を抱えている。また，BEMS(Building and Energy Management System)が整備されておらず，エネルギー管理や見える化の整備が遅れている。

文京キャンパスにおけるインフラの状況を示す。（使用量は平成23実績値）

建築構造物		保守状況等
＜共同溝設備＞		
構造	RC　延長約700m	経年37年

電気設備		
＜幹線設備＞		
引き込み	受電施設1か所，サブ変電所14か所	受電施設H15年更新
電圧	高圧　6.6kV 2回線	
変電設備容量	9,130 kVA	
契約電力	高圧　2,750 kW	
構内配線方式	埋設管路式　地下ピット配線	更新率 約90%
＜情報設備＞		
通信方法	スター方式　ギガビット	（配線）更新率 約80%

機械設備		
＜空調方式＞		
・熱源	電気式空冷ヒートポンプエアコン(一部氷蓄熱式)（H12～H23），（一部）蒸気式暖房，ガスヒートポンプ式エアコン	個別分散方式
＜給水＞		
・水源	井戸水　使用量　11.6万t/年(580t/日)	（井戸ポンプ)H23更新
・給水方式	高置水槽方式	（配管）更新率 約50%
＜排水＞		
・排水方式	合流方式	
・実験排水	PHモニタ槽にて管理	
＜ガス＞		
・ガス種類	都市ガス13A　20,513 Nm3/年	（配管）更新率 約90%

＜具体的課題の一例＞

屋内設備単体での更新は計画的に行われている。屋外設備の埋設方式の部分は点検が行いにくいため，漏えい・腐食などに気付きにくく，故障時に事後保全になるケースが多い。更新計画や点検計画について見直しが必要である。

雨水配管が破壊しており，木根が進入し，流れを阻害していた部分

・老朽化，機能性劣化

屋外設備について，築年数が古いものは鉄骨の防錆方法にも問題があり，腐食しているものがある。このような構造物は耐震性に劣ると考えられ，生活の安全を担う基幹設備としては早急な対応が必要である。

・安全性の確保

井戸については周辺では地下水の塩化が進んでいる地域もあり，本学も井戸水が飲用できなくなる可能性がある。市水の引き込みやろ過装置の設置等について検討しておく必要がある。

鉄骨造高架タンクの脚部に著しいさびの発生が認められるため，早急な対応が必要である。

（5）大学が目指す教育研究活動と施設との関連

近年の施設整備による効果

①学生支援センター耐震改修・食堂増築
・本建物の1階は，1日当たりの利用者数が2,000人を超える「文京団地で唯一の食堂」となっており，耐震補強工事によって「安全・安心な施設環境」が確保できた。併せて，食堂の増築により昼食時の混雑がかなり緩和された。
・これまでの学生支援センターのホールは大変狭く，学生への窓口サービスも充分に行き届かず業務に支障が出ていたが，改修に併せてホールの拡張整備が行われ利便性の高い学生支援施設になった。また，2階への出入り口が1ヶ所しかなく，階段が非常に混雑し，緊急時の二次災害が危惧されていたが，新たに「渡り廊下」を設置し，2方向の動線を確保することができ利用者の安全性が向上した。
・プライバシーに配慮した「相談室（個室）」を設け組織的な対応体制を充実させたことにより，学生が気軽に，安心して「履修相談」「メンタル相談」及び「学生生活相談」等を受けられるようになった。

■食堂増築部分

■厨房カウンター

■学生窓口

■学生相談室

②総合研究棟Ⅶ（工学系3号館）耐震・機能改修
・耐震補強による耐震性向上と共にバリアフリー対策により，安全・安心で高機能な教育研究環境が整備でき，高度情報化社会を担う情報通信分野の先導的技術者・研究者を養成ならびに，地域社会への貢献が期待できる。
・面積の再配分による共有スペースを確保することにより，学内外共同研究の活性化，本学各種GPの推進ならびに，実践的高度ICT教育の効率化を図ることができた。
・重油による暖房ボイラーから深夜電力利用による氷蓄熱方式の空調設備への更新，断熱材吹き付け，断熱防水，ペアガラスの導入による，省エネルギー効果が確認できた。

■計算機室

■多目的会議室

■リフレッシュコーナー

■リフレッシュコーナー

③語学センター（大学会館）機能改修
・実践的語学教育（社会に出て実際に「使える」専門分野での英語力）を推進する施設環境が整備された。
・高度職業人としてグローバル社会で活躍できる優れた人材育成とともに，学生の将来のキャリアの可能性をより広げる可能性に貢献できる施設環境が整備された。

■語学センター

■入口

■入口

■教室

④総合図書館増築，耐震・機能改修
・ラーニングコモンズとして自主学習のための環境整備を充実させた。閲覧室には個席やカウンター席を設置したこと，グループ学習室を増やしたこと，さらにマルチメディアコーナーを設けたことで，多様な学習環境が提供でき，利用実績も増えている。また，リフレッシュコーナーを設けたことで，学習中の小休憩によるメリハリをつけることができ，学習効率の向上が図られている。
・利用者がアクセスしやすい場所に展示ホールを設け，地元の著名人や所蔵資料を中心とした企画展を開催するなど，地域に広く公開を行っている。また，一般市民に図書の貸し出しを行い，「知の財産」を広く共有することで，地域における文化の拠点として地域貢献を行っている。

■閲覧室カウンター

■グループ学習室

■マルチメディアコーナー

■リフレッシュコーナー

施設の点検と課題

①教育地域科学部
・教育地域科学部については，平成21年度末に耐震・老朽改修が完了し，教育・研究施設の整備率は95.6%と全国平均を上回る。実践的教育GPに採択された「ライフパートナー」「探求ネットワーク」や学校改革実践教育を柱とする教職大学院のためのスペースも確保され，「学校教育や学校を支える地域のリーダーとなる高度専門職業人を養成し，教育と地域科学に関する実践的な研究を推進する」ための施設はほぼ整備されたと言える。
・グローバル社会に必要な教師教育の革新をスピーディに実現する連携事業を推進するためのスペースが不足しており，今後，自治体とも連携・協働を図りながら整備する必要がある。

■探求ネットワーク（ホール）

■探求ネットワーク（講義室）

■教職大学院

■コラボレーションホール

②工学部
・高度な専門能力に加えて，創造力，批判力，自己学習力および伝達力を併せた総合能力，すなわち，人間力を持つ高度専門技術者の育成を目的に，平成16年度から平成21年度の第1期中期計画期間の最終評価で全国トップクラスの評価を得た体系的な教育を推進すると共に，これまで採択された6件の大学GP等を継続して実施する。
・耐震・老朽再整備が進行中であるが，総合研究棟Ⅷ（工学系4号館），講義室棟は改修整備が遅れており，進化の激しい工学教育・研究の質の維持および高度化に支障が生じている。
・工学部教育研究施設の整備率が69.1%という状況で，教育研究領域の拡大や設備の導入のための施設の有効利用は限界にあり，新たな教育研究スペースの確保が必要になっている。

■総合研究棟Ⅷ
（工学系4号館）

■実験室

■講義室棟（外観）

■講義棟室（エクセルルーム）

③共同利用施設（産学官連携本部）
・産学官連携本部は，「創業型実践大学院教育」・「実践道場」として産業現場で活躍できる人材を産業界と共に育成している。
・「ふくい産学官共同研究拠点」は，独立行政法人科学技術振興機構の地域産学官共同研究拠点整備事業に採択され，リチウムイオン電池，燃料電池やめっき処理，レーザー微細加工などの研究に必要な最先端の機器を多数設置し，環境・エネルギーに関する共同研究を推進する施設として整備されている。
・計測・技術支援部の計測機器類は，学内の各学部建物に分散配置されているため利用・管理上支障が多く，集約・統合する必要がある。
・総合研究棟Ⅰの精密計測機器類は，上層階の12階に設置されており，建物の揺れ・振動が多く，精密測定に支障が起きているので，低層建物への移転・統合を検討する。

④留学生センター
・「留学生30万人計画」の一貫として，本学は将来は400人程度の留学生の受け入れを計画しており，従来に増して留学生の教育や生活をサポートする必要がある。それを指示する留学生センターの施設は，専用の建物が確保されておらず，かつ2カ所に分散されているため留学生サービス業務に支障が出ている。
・大学のグローバル化の促進のため，日本人学生の留学を促進するための環境整備も必要である。

（6） 課題のまとめと検討の方向性

①施設の老朽化及び狭隘化への対応

文京キャンパスは耐震・機能改修がおおよそ完了してきているが，経年50年を超える老朽化建物が増えてきており，今後は改築を伴う整備が必要となる。改築整備を行うにあたっては，十分に緑地や広場がとれていない状況を改善するため，建物を集約・統合して高層化する等，ゆとりのあるキャンパスを計画する。

②メインストリートを主軸にした景観整備と安全性の向上

正門から東西に直線的に延びるメインストリートは文京キャンパスの顔であり，福利施設等が面しているため人の通行量が大変多い。しかし，乱雑な駐車・駐輪であふれ，景観を損ねているとともに車両と歩行者の動線が複雑に絡むため，安全性にも問題がある。メインストリートはキャンパスの顔にふさわしい景観を保ち，安全・安心して利用できる活気ある交流空間とするため，車両はキャンパス中央部には進入しない等，明確な歩車分離に配慮し計画する。

③駐車場・駐輪場の整理と利便性の向上

キャンパス内の駐車場は小規模で分散していることから大変利便性が悪い。また，歩行者との動線の交錯も多く，人身事故が発生する懸念がある。駐車場利用時の利便性や安全性を図るために，集約化した駐車場を計画する。さらに，自転車やバイクについても歩行者への安全を図るために，集約化して駐輪場を計画する。

敷地の効率的利用への配慮から，駐車場と駐輪場を一体的に整備できる立体駐車・駐輪場を計画する。

④福利施設の配置等の検討

大学会館，食堂，課外活動施設等を集約化し，メインストリート沿いの中央付近に配置し，学生の利便性を図る。

⑤緑地・樹木・広場計画の検討

現状は不要な通路や管理されていない緑地が多く，広場が細分化され憩いのスペースが狭隘でイメージが悪いことから，季節を感じさせる樹木と近隣住民に影響を及ぼさない樹種の植栽や，学生が集い，憩える広場を各ゾーンの連続性に配慮し，適切に計画する。

⑥サイン計画の検討

点字ブロック，色弱者対応サイン，弱視者対応サイン等を含めた計画とし，周囲より目立ち，分かりやすいサイン計画とする。デザインを考慮し，英語等の外国語表記を入れる計画とする。

⑦降雪時対策

融雪装置の設置及び広場を利用した除雪時の雪捨て場や，ゾーン毎に建物を渡り廊下でつなぐ等を計画する。

⑧電気設備

引込み受電室の高圧配電設備は平成15年に改修更新され，サブ変電所や構内高圧ケーブルは，建物改修に合わせて更新を行っており，現在のところ大きな問題はない。日常点検による電力の安定供給を維持するとともに，今後の効率的な更新に向け，効果的な更新手順や高効率機器導入等を計画する。

⑨空調設備

空調設備は新築，改修に合わせて順次更新してきたが，本格的な設置が始まってから10年が経過し，今後5～10年後には，ふたたび更新時期を迎える。空調設備の経年数や稼働積算時間により，更新時期が異なるため十分な現状把握を行い，予算の確保を含めた円滑な更新を計画する。

⑩都市ガス設備

都市ガスの構内配管は旧式の白ガス管がまだ残っており，管の腐食によるガス漏洩の恐れや地震時に継手部分が緩むこと、可とう性が低いことが懸念されるため，早期にポリエチレン(PE)管への更新を計画する。

⑪給水設備

井戸水のくみ上げ水量は，現状では問題は無いが，近隣の塩化現象の進行により将来飲料不適合となった場合を想定し，市水の引き込み，井水の浄化処理等を計画する。

給水用配管，受水槽，揚水設備は経年劣化が進んでいるので更新を計画する。

⑫排水設備

構内の排水本管は，設置から30年以上経過し，配管つまりや勾配不足等のため，排水不良箇所が多い。また，排水管の部分的な改修は行っているが，総合的な調査が必要であり，キャンパス全体での効率的な排水設備の改修を計画する。

3―4 松岡キャンパスの施設の概要(現状と課題)

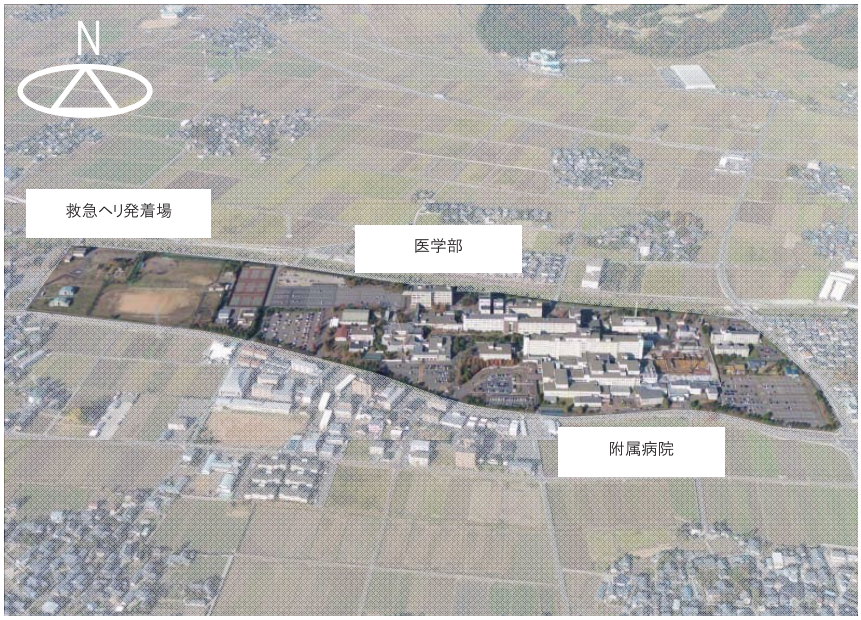
（1）キャンパス環境

①キャンパスの立地環境

福井市中心部から北東に約8kmの郊外に位置し，西側には福井県立大学，ソフトパーク福井等，東側には福井県総合グリーンセンター等の教育・公共施設が，また周辺に住宅団地が立地している。

東西に長い本キャンパスは，北側，東側，南側に公共道路が接し，西側は隣地に接している。敷地周辺および敷地内の各ゾーンの境には原則的に緑地ゾーンを設け，外部と各ゾーンとの緩衝効果の役目を果たしている。

また，公共交通が十分でなく，公共交通の依存率はわずかである。



松岡キャンパス　航空写真
（平成24年11月）

②所在地

●所在地：吉田郡永平寺町松岡下合月23－3

●学部等：医学部・附属病院・附属図書館・学内共同教育研究施設・保健管理センター・事務局・福利厚生施設等

③法的指定等

●都市計画区域内　第1種住居地域（建ぺい率70%・容積率200%）

④敷地面積・建物面積

●敷地面積　270，230㎡
●建築面積　40，530㎡
●建物延床面積　102，126㎡
●建ぺい率　15．0%
●容積率　37．9%

⑤防災

永平寺町洪水ハザードマップ：0.5m未満の浸水想定区域
防災倉庫設置

⑥ISO

ISO14001（環境マネジメントシステムに関する国際規格の総称）認証取得（附属病院を除く）
ISO　9001（品質マネジメントシステムに関する国際規格の総称）認証取得（附属病院）

⑦ キャンパスゾーニングの現状

松岡キャンパスのゾーニングは以下のとおりである。

1）医学系ゾーン　（耐震改修が必要な建物として臨床研究棟があり，その他築30年を経過し，狭隘化・老朽化している施設が多い。）

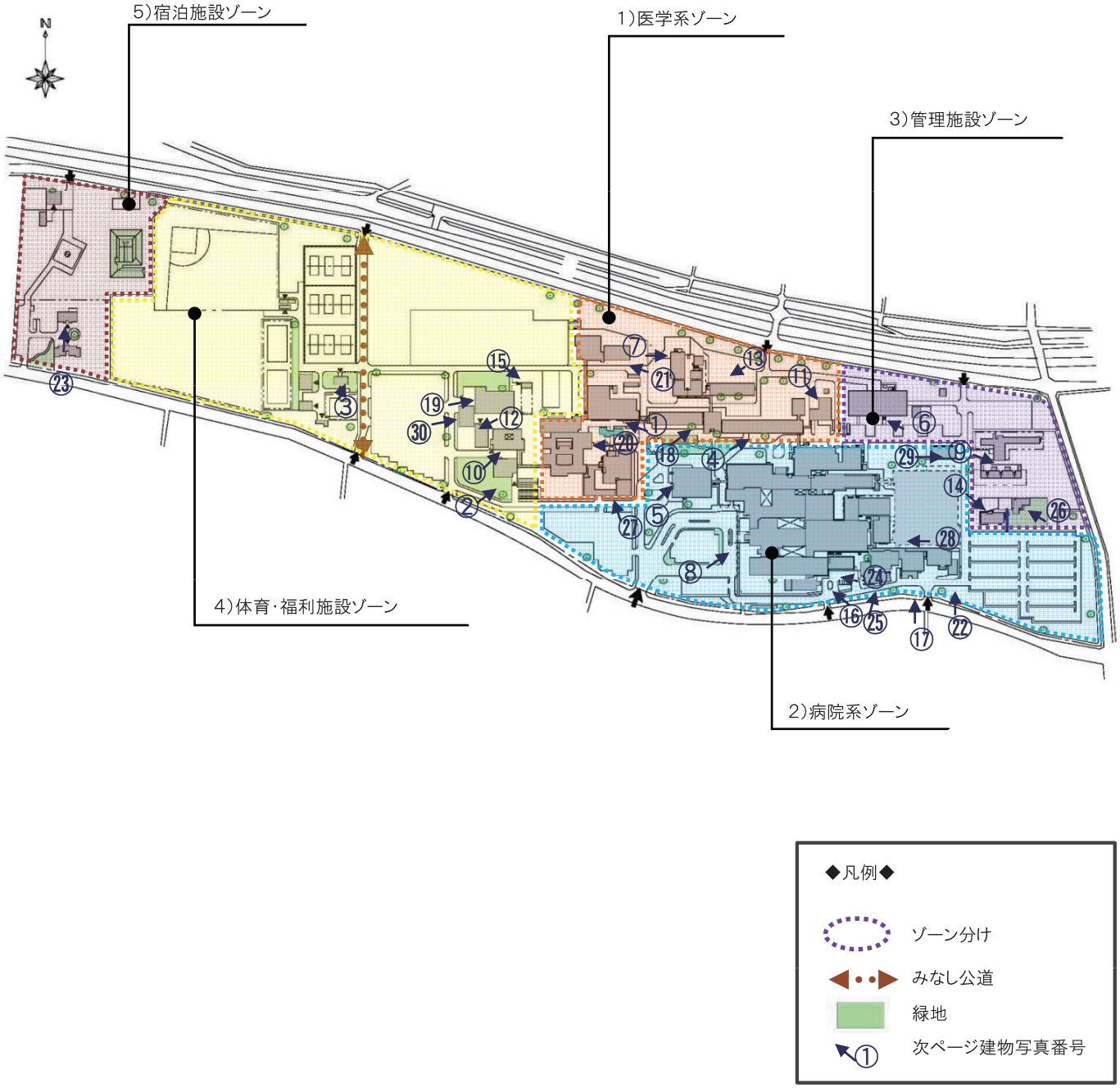
2）病院系ゾーン　（附属病院は築後30年を迎えており，平成23年度より病院再整備事業が始まっている。）

3）管理施設ゾーン　（松岡キャンパスのエネルギー供給の心臓部である中央機械室や宿泊施設，保育施設がある。）

4）体育・福利施設ゾーン　（屋内外体育施設や部活動施設，食堂や売店等があるが，学生生活の充実のために機能的な整備が望まれている。）

5）宿泊施設ゾーン　（松岡キャンパス内では比較的新しい国際交流会館及び特高受電室，防災倉庫，また慰霊碑や救急ヘリ発着場があり，管理が不可欠なゾーンである。）

医学系ゾーンと病院系ゾーンは，スタッフによる日常的に行き来が多く，近接していることが必須な位置関係である。



【改修必要建物】・・・
・建設年
昭和40年～平成9年
（経年47年～15年）
・大規模改修が行われていない

①. 基礎実習棟（S55）
松岡キャンパスで最初に建てられた建物。
耐震性に問題はないが，築32年を経過し，
老朽化が進む。

②. 食堂（S55）
築27年を経過し，老朽化が進んでいたため，
平成22年度に一部内部のﾘﾌﾚｯｼｭ改修を
行った。

③. 排水処理機械室（S55）
築32年を経過し，老朽化が進む。

④. 臨床研究棟（S56）
築31年を経過し，老朽化が進んでおり，耐
震性もやや劣る。
臨床医学研究の中心施設であるが，収納・
管理スペースが不足している等の問題があ
る。

⑤. 管理棟（S56）
耐震性は確保されているが，築31年を経過
し，老朽化が進んでいる。

⑥. 中央機械室（エネルギーセンター）（S56）
築31年を経過し，老朽化が進んでいる。
病院，校舎等ほとんどすべての熱源，電源，
水道の供給をしている。ボイラー，冷凍機，
中央監視，自家発電設備等を一部改修済。

⑦. 生物資源棟（動物実験施設）（S57.S61.H2）
築30年を経過し，施設・設備等の老朽化が著
しい。生物資源部門の老朽化した空調設備の
改修と，飼育装置の更新及びRI部門のアイソ
トープ施設整備の更新が必要である。

⑧. 医学部附属病院（S58.S59.H4.H9.H14）
築29年を経過し，老朽化が進んでいる。
平成23年からの新病棟の建設に続き既存
棟改修を行い，病院再整備計画を進める。

⑨. 看護師宿舎（S58.S58.H8）
築29年を経過し，老朽化が進んでいる。
平成8年に内部改修（単身室増設）を行っ
た。

⑩. 福利施設（S58）
築29年を経過し，老朽化が進んでいる。
ﾁｭｰﾄﾘｱﾙ教育の導入で，一部がﾁｭｰﾄﾘｱﾙ
室として使用されている。その分学生の共通
部分が少なくなっている。

⑪. 病理解剖棟（S59）
築28年を経過し，老朽化が進んでいる。

⑫. 武道場（S59）
築28年を経過し，老朽化が進んでいる。
平成23年に便所等のアメニティスペースの
改修を行った。

⑬. 院生研究棟（S60）
築27年を経過し，老朽化・機能劣化が進ん
でいる。

⑭. くずりゅう会館（S61）
築26年を経過し，老朽化が進んでいる。
非常勤講師宿泊施設，職員福利施設。
現在は，入院患者家族の宿泊も受け入れ
ている。

⑮. 弓道場(S61)
築26年を経過し，老朽化が進んでいる。

⑯. 救急部棟(H6.H18)
現在の救急部入口である。救急部は，平成26年に現在建設中の新病棟へ移転する。

⑰. サイクロトロン棟(H6.H15)
研究・診療用PETの関連施設。
築18年を経過し，老朽化が進んでいる。

【改修済み建物】・・・

・建設年
～平成9年
（経年15年以上）
・平成10年以降に
大規模改修が行われた

⑱. 基礎研究棟(S56.H21耐震改修)
基礎医学研究の中心となっている。
平成21年に耐震・外部改修工事が行われたが，機能劣化が進行し，内部改修が必要である。

⑲. 体育館(S56.H19耐震改修)
築31年を経過し，老朽化が進んでいる。
平成19年に耐震改修工事，平成22年に更衣室・便所等のアメニティスペースの改修を行った。

⑳. 講義棟(S55.H25)
築32年が経過し，老朽化が進んでいる。
平成25年に一部増築を含む全面改修を行った。

【良好建物】・・・

・建設年
平成10年～
（経年15年未満）

㉑. 看護学科棟(H11.H12)
築13年が経過したが，松岡キャンパスでは，比較的新しい建物である。

多様な財源の活用による整備！

㉒. 高エネルギ゛医学研究センタ-(H12.H23)
本学が重点研究とし，COEを獲得している生体画像医学の研究拠点となっている。
平成23年に寄付金により増築を行った。

㉓. 国際交流会館(H13)
留学生やその家族が入居している。デ゛ザ゛イン的にも工夫された建物となっている。

㉔. リハビリ棟(H17)
既存施設が狭隘であるため平成17年に自己資金にて増築整備を行った。

㉕. 臨床教育研究センター(H21)
平成21年に寄付金にて整備を行った。

多様な財源の活用による整備！

㉖. 保育施設(H21)はなみずき保育園
安定した看護師及び女性医師の確保を図るため，21世紀職業財団の補助と自己資金により整備された学内保育施設。大学の教育・医療と連携した質の高い保育が実現。

多様な財源の活用による整備！

㉗. 医学図書館(S57.H22.H23)
整備率が低く狭隘であったが，平成22年に第1期増築・改修，また平成23年に第2期増築を行い，閲覧室や学習コーナーが充実してきている。

多様な財源の活用による整備！

㉘. MRI(H23)
新病棟建設に先駆け平成23年に自己資金による整備を行った。

多様な財源の活用による整備！

㉙. RI排水処理施設(H23)
病棟建設に先駆け平成23年に自己資金による整備を行った。

多様な財源の活用による整備！

㉚. ｽﾁｭｰﾃﾞﾝﾄ･ｸﾞﾛｰｲﾝｸﾞｱｯﾌﾟｾﾝﾀｰ(H24)
平成24年に仮設講義室として使用後，スポーツ施設として使用するために自己資金による整備を行った。

⑧ 人口分布（教職員・学生・平均患者数等）

松岡キャンパスは人口が医学系ゾーンと病院系ゾーンに集中し，敷地内の人口の偏りが大きい。また，医学系建物と病院系建物は密接に連携する必要があり，建物が近接していることにより教育・研究の効率性・利便性が高まるが，松岡キャンパスの敷地は，東西に長く，南北に短い敷地のため，現状のような東西に長い研究棟になり，更に講義棟等主要な医学部建物はその先に配置されている。今後の整備計画においては，教育・研究の効率性・利便性のみならず，省エネルギーや冬期の降雪時の移動の観点などから，病院系施設の集約・統合に伴い，医学系施設についても集約・統合を図り，病院との移動距離を短くする必要がある。

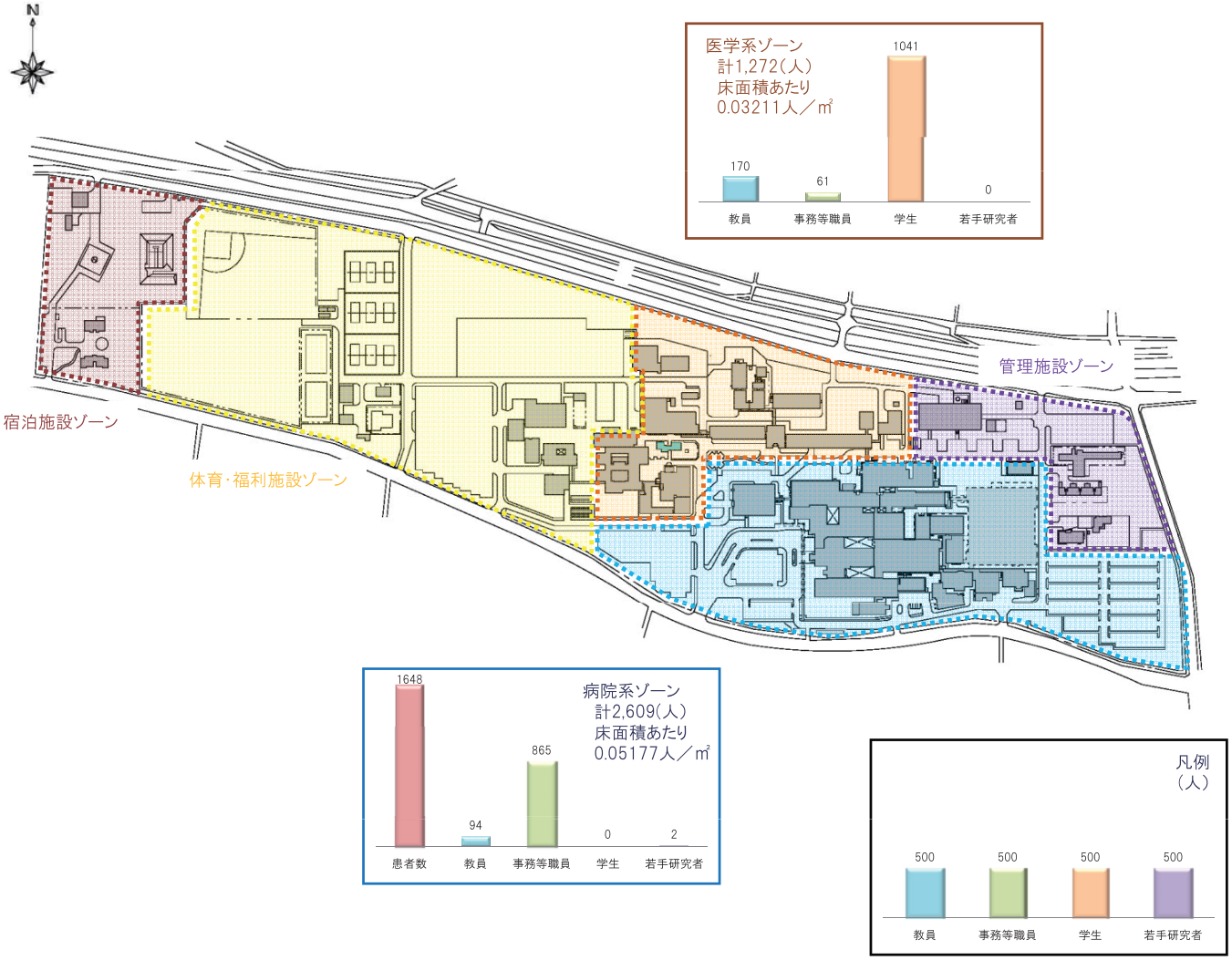
その他現状の問題点として，医学部の福利施設（食堂・売店）が施設群の西端に立地し，基礎・臨床研究棟からの距離が非常に長く利便性が非常に悪い。図書館も同様に医学系施設の端に配置されており，研究棟や病院からの利便性に欠けている。

駐車場と外来棟・病棟への移動距離が長く，病院サービスの向上，患者さん等の安全性，敷地の制約等から，集約・統合される病院と屋内で直結できる立体駐車場等の計画も検討する必要がある。

【各部局構成員数（人）】

	1日の平均患者数（入院患者+外来患者）	教員	事務等職員	事務等職員（特命・パート等・一部看護師含む）	学部生	研究科	若手研究者	学生内の留学生（内数）
医学部・医学系研究科		166	13		902	139		5
医学部系ゾーン事務局職員			11	37				
附属病院	1648	89	678					0
病院系ゾーン事務局職員			119	68				
高エネルギー医学研究センター		3					2	
子どものこころ発達研究センター		1						
ライフサイエンス支援センター		4						
保健管理センター		1						
合計	1648	264	821	105	902	139	2	5

福井大学基礎資料2012より



【図・表 各ゾーン利用者数】

⑨ 建物分布と施設整備率からみるキャンパス

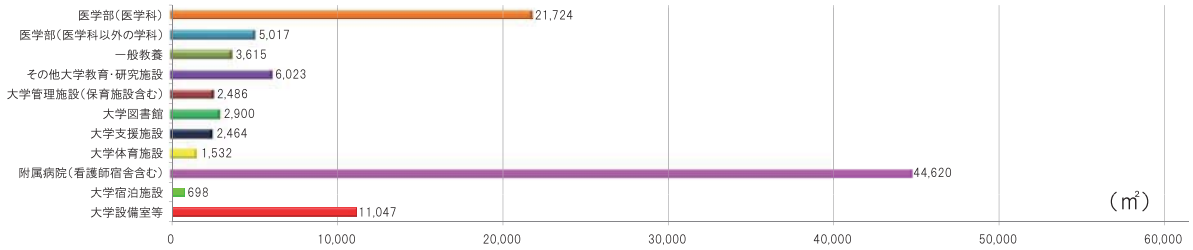
医学部系ゾーンは建物が密集しており，将来計画をする場合，ゾーンの拡張を検討する必要がある。

松岡キャンパスの施設整備率(保有面積／必要面積)は、現在85.38%となっており、全国の国立文教施設の平均施設整備率88.96%と比較すると、やや整備が遅れている。

しかし，分野ごとの整備に偏りがあり，医学部だけで見ると，76.15%と全国平均と比較して低く，狭隘である事が分かる。今後，狭隘による教育・研究への影響がどの程度か，どこに不具合が出ているのか等を詳細に調査し，早急に対応策を検討し，計画案を立案する必要がある。また，全学の施設有効活用の観点から，利用方法の見直しも検討する必要がある。

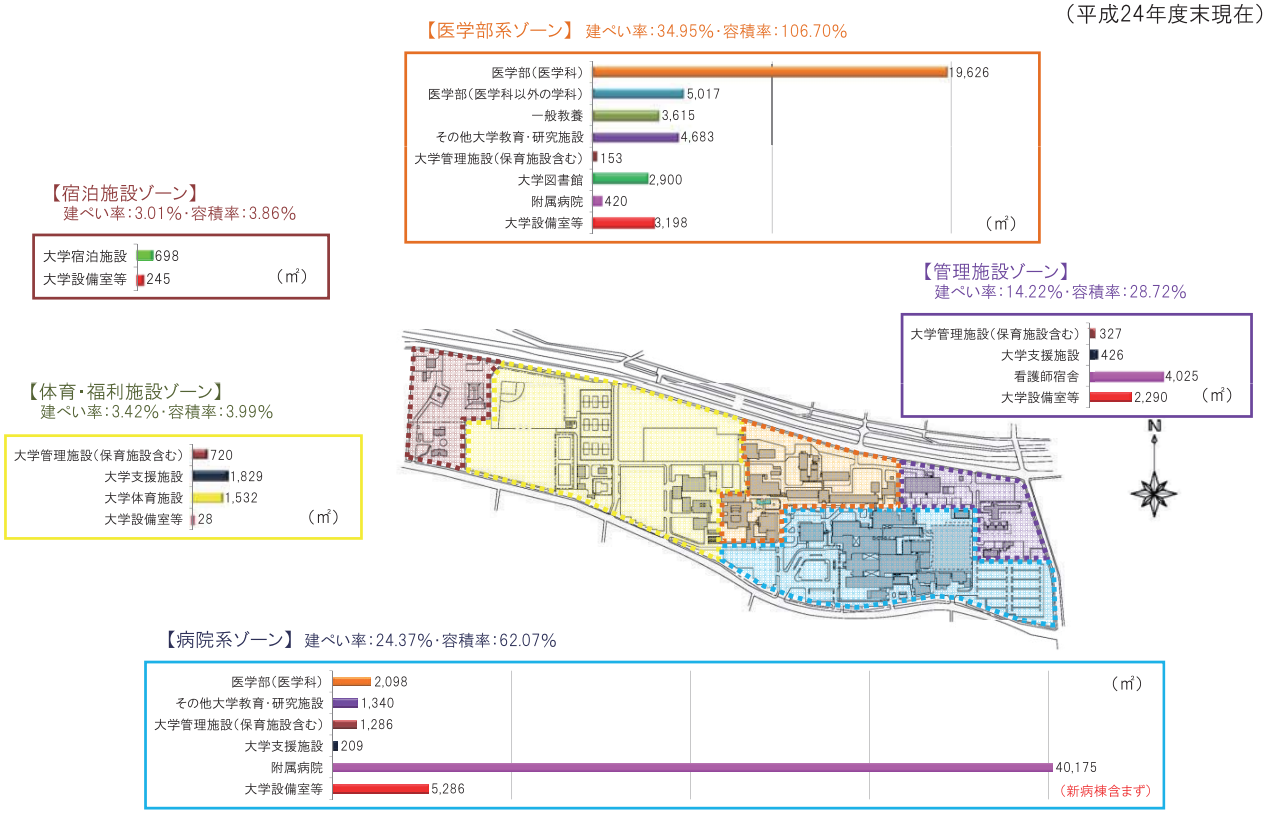
面積区分	大学教育・研究施設（松岡全体）	大学教育・研究施設（医学部）	大学教育・研究施設（その他）	大学図書館	大学体育施設	大学支援施設
保有面積（㎡）	36, 181	26, 543	9, 638	2, 900	1, 730	2, 464
必要面積（㎡）	42, 378	34, 854	7, 524	3, 653	1, 668	2, 205
整備率（%）	85.38%	76.15%	128.10 %	79.39%	103.72 %	111.75 %
全国整備率との比較（平成24年度）	松岡整備率 85.38% 医学部 76.15% 医学部以外 128.10% 全国整備率 88.96%			松岡整備率 79.39% 全国整備率 66.01%	松岡整備率 103.72% 全国整備率 107.88%	松岡整備率 111.75% 全国整備率 125.07%

【施設整備率】



【松岡キャンパス調査単位別保有面積】

福井大学実態調査より
（平成24年度末現在）



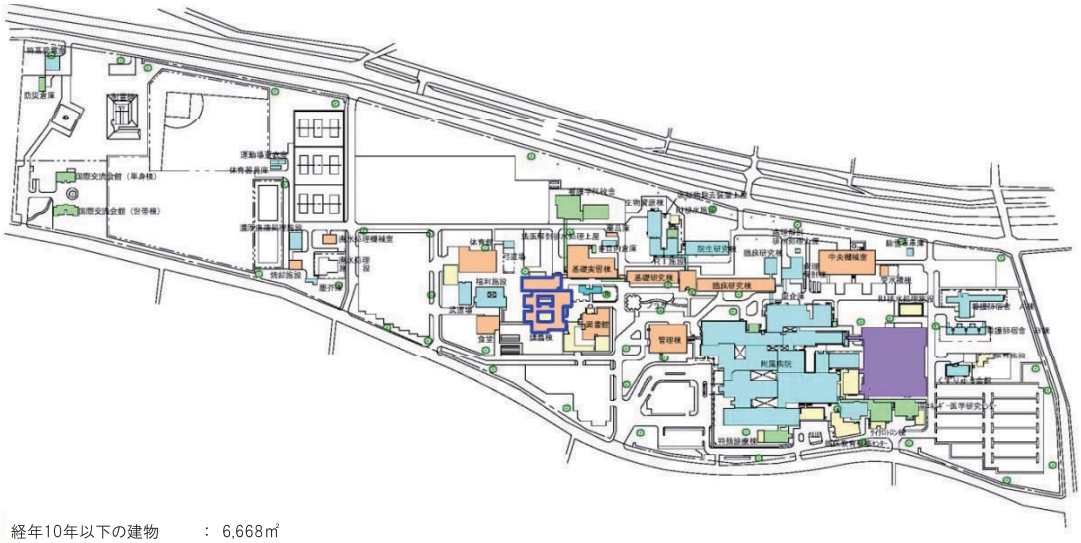
【図・グラフ　各ゾーン建物保有面積】

（2）キャンパス整備の状況（経年数・耐震性能）

松岡キャンパス全体の建物面積　127,215㎡（建設中の建物含む）の内，耐震化率は90%を超えており，臨床研究棟（Is値0.56）を除くほとんどの建物が耐震性に問題は無い。しかし，経年20年を超えた建物が全体の70%を占めており，今後は増築・機能改修を進める必要がある。

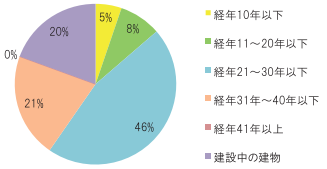
（平成24年度末現在）

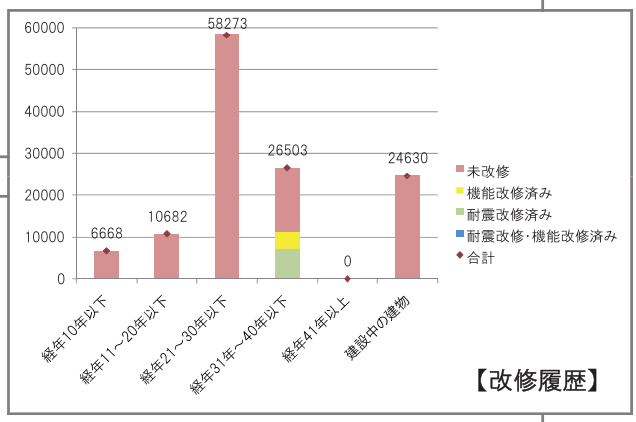
【各建物の経年数】



経年10年以下の建物	：6,668㎡
経年11～20年以下の建物	：10,682㎡
経年21～30年以下の建物	：58,273㎡
経年31～40年以下の建物	：26,503㎡
建設中の建物	：25,089㎡
機能改修済み	：4,155㎡

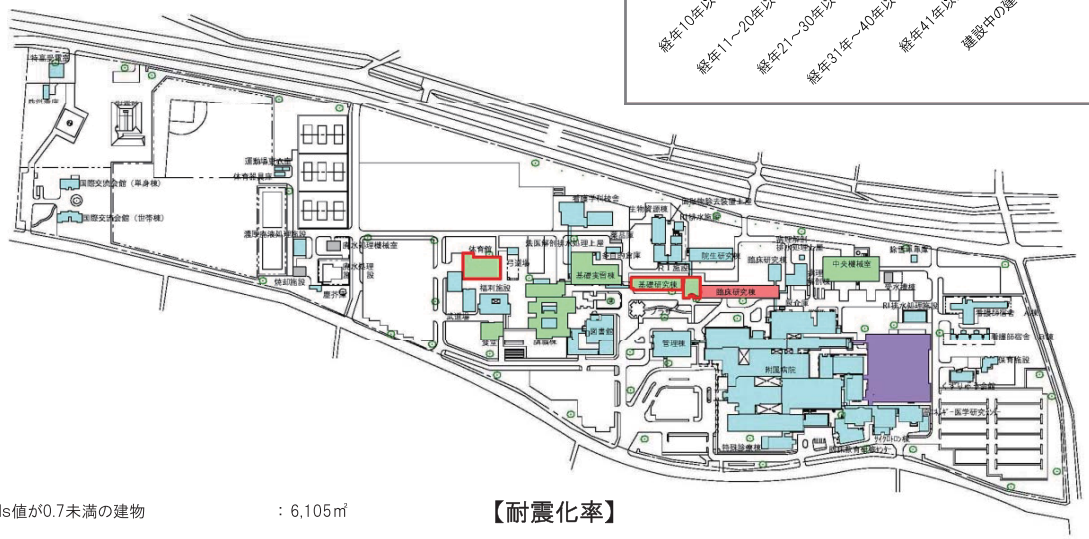
【保有建物の経年構成比】





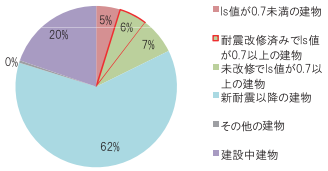
【改修履歴】

【各建物の耐震性能】



Is値が0.7未満の建物	：6,105㎡
耐震改修済みでIs値が0.7以上の建物	：7,122㎡
未改修でIs値が0.7以上の建物	：9,299㎡
新耐震以降の建物	：78,987㎡
その他の建物	：613㎡
建設中の建物（免震構造）	：25,089㎡

【耐震化率】



（3）屋外環境整備

①緑地

松岡キャンパス全体の緑地率は，27.3%と福井大学キャンパスでは高い数字であるが，課題はその緑地が，キャンパス西側部に偏在していることである。この原因は敷地が東西に長く，南北に短いため，敷地利用効率が悪く，施設のほとんどがキャンパス東側に集中し，建て詰まり状態になっており，緑地が十分に確保できないためである。

ゾーンごとの緑地率を見ても，特に学部ゾーンと病院ゾーンの緑地率は，キャンパス全体の緑地の8.1%と，大学キャンパスとしては，非常に少ない。また，その緑地の現状をみると，ほとんどが敷地周辺の境界部分と建物廻りが大部分を占めている。

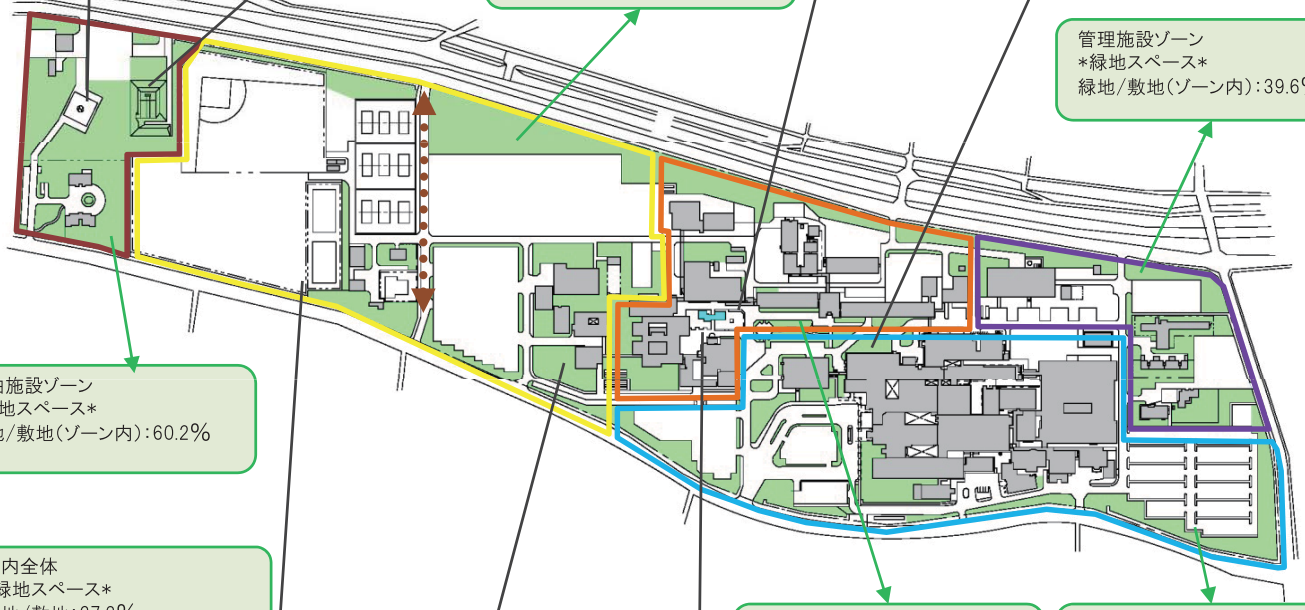
学内アンケートの結果（P100参照）からみると，上記の理由と福井の気候条件によるところもあり，緑地は活動場所としてあまり利用されていない。また，緑地への要望も緑地広場の確保というよりは，四季の変化や庭園風の目で楽しむ緑地を望んでいる傾向にある。しかし，病院の入院患者の立場からは，緑地は目の保養や観賞用にも必要だが，早期回復や社会復帰へ向けてリハビリや気分転換，入院によるストレス解消等に，安全で安心して散歩等ができるような公園風の緑地広場もしくは回遊公園的なものが必要である。

■救急へり発着場

■慰霊碑

■プラザ

■一般食堂アプローチ
研究棟側からのアプローチであり，学生・教職員が多く利用している。また，患者さんが散歩のためプラザへ行けるような動線である。



■運動場

■食堂横緑地スペース

■講義棟前広場

◆凡例◆
ゾーン分け
みなし公道
緑地

②キャンパス動線・駐車場・駐輪場

駐車場が各所に点在し，車両動線の制限が難しい。また，車両動線が複雑化しており，混雑する箇所がある。

■慰霊碑出入口

■院生研究棟裏駐車場
慢性的な駐車場不足の対応のため，平成23年度に66台分の増設を行った。

■研究棟側出入口（北側）

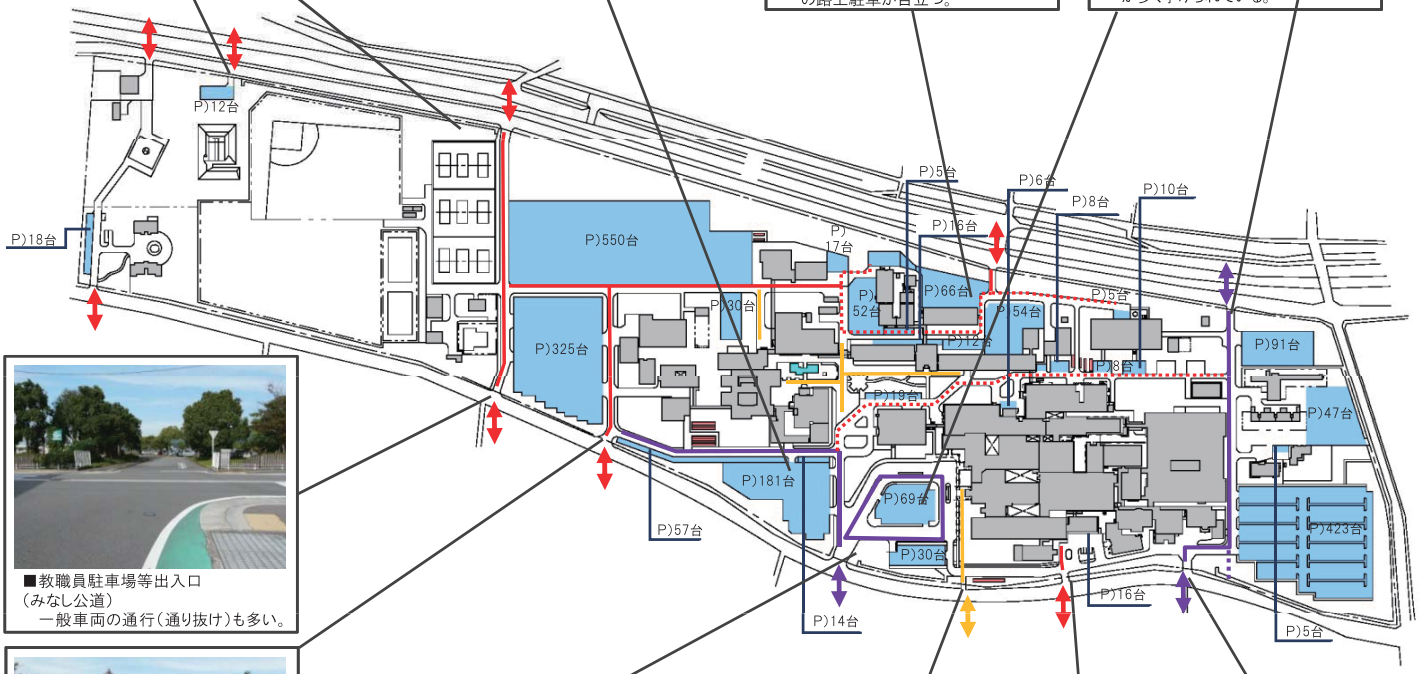
■附属病院外来者第2駐車場出入口（北側）

■みなし公道（北側）出入口
一般車両の通行（通り抜け）も多い。

■第1駐車場から病院玄関アプローチ
融雪設備を設けた歩道

■病理解剖棟前道路
日中は慢性的な駐車場不足のための路上駐車が目立つ。

■外来前駐車場と第1駐車場（患者用）
患者様アンケートでも駐車場不足問題が多く挙げられている。



■教職員駐車場等出入口
（みなし公道）
一般車両の通行（通り抜け）も多い。

■教職員駐車場等出入口

■附属病院正面出入口
附属病院正面出入口は車両動線が複雑化しており，日中には混雑がみられる。

■附属病院歩行者用出入口（外来用）

■附属病院外来者第2駐車場出入口

◆凡例◆

- 車両メイン動線（患者さん等）
- 車両メイン動線（教職員・学生等）
- 車両サブ動線
- 歩行者動線
- 駐車場（計2,126台）
- 駐輪場（計 333台）

■外来診療棟と身障者用駐車場

■附属病院外来玄関
外来玄関から駐車場がやや遠い。

■附属病院救急部出入口

（駐車場整備）

松岡キャンパスでは通院，通学，通勤のため自家用車が主に利用されている。

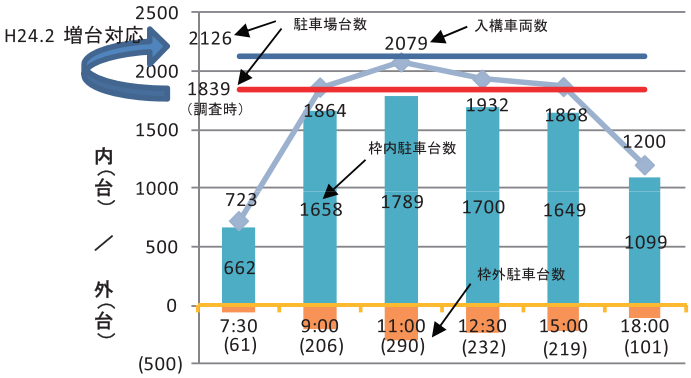
構内道路は路上駐車であふれている

病院付近の駐車場に停められない

冬期間，除雪により駐車場が減少する

収容駐車台数は附属病院の外来者用および学生・教職員用を含め，約2,100台確保されているが，外来入口付近にまとまった駐車場が少ないため，外来利用患者さんから不満の声が多い。また，屋外に屋根付き歩道等が十分に整備されていないため，雨天時や降雪・積雪時，歩道の凍結時など，駐車場から施設までの移動に不便であり，転倒の危険などが考えられる。県内の他病院では隣接した屋内型駐車場を整備しているところは少なくなく，患者さんが病院を選択する印象面からも屋内型駐車場とそれに付随する屋内通路の早期整備が望ましい。

前ページに示される松岡キャンパスの駐車場配置からもわかるように，構内建物の外周付近に駐車場が多くあるが，車の出入りが頻繁にあることが予想される病院外来入口付近にはまとまった駐車場が無く，200m程度離れた位置にやや広めの駐車場が配置されている状況である。



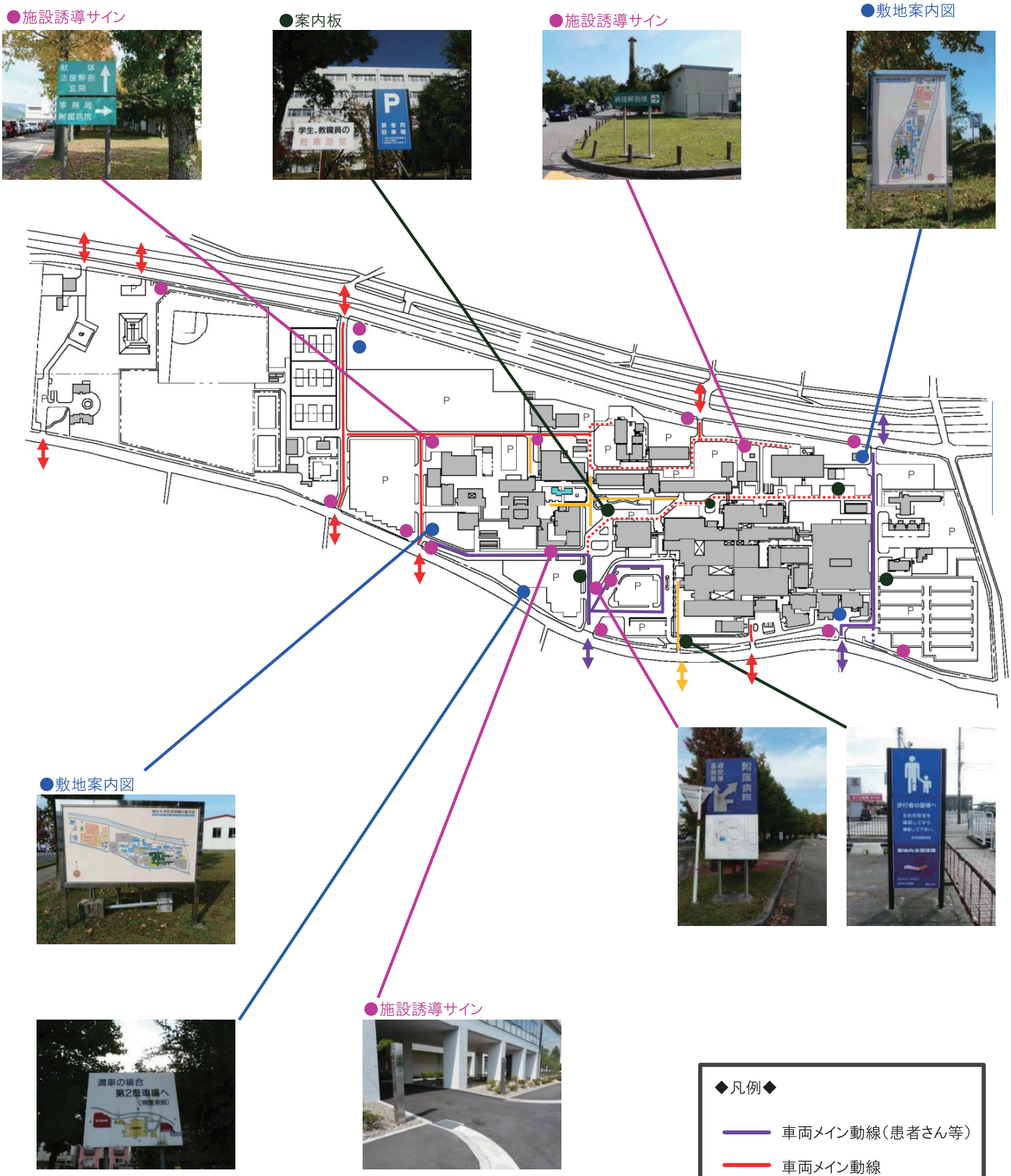
【松岡キャンパスにおける1日の駐車台数の経時変化】
（H23.6調査時）

平成23年6月の松岡キャンパスにおける一日の駐車台数の経時変化に示されるように，日中は入構車両数が駐車場台数を上回っており，駐車台数とのバランスがとれていないことがわかる。この交通量調査結果をもとに，駐車場の増加を行っているが，駐車場へのアクセスの悪さから路上駐車の解消には至っていない。このグラフでは，病院利用車両と学生・教職員の利用車両を一括で表示し，必要駐車場台数が確保されているように見えるが，駐車場整備にあたっては敷地全体の総駐車台数ではなく，それぞれの利用エリア別に駐車台数を設定し，利便性に配慮する必要がある。

特に，外来入口のロータリー付近では駐車場がまとまって確保されていない上，空スペースの有無がわかりにくいため，病院利用者は駐車場を探し回らなければならず，無用な運行が交通事故の危険性の増大や，病院利用者の貴重な時間ロスを発生させていることが考えられる。また，病院利用者の時間ロスは予約時間への遅れなども考えられ，医療機能や医療サービスの低下にもつながる。

このような状況から，駐車場に関しては，
①駐車場の目的に応じた台数設定と配置の改善
②車両動線と歩行者動線の重複と距離について改善
③患者，見舞客，学生，教職員，来学者の車両動線の区分の明確化
④ハートフル専用パーキング，搬入車両用パーキングの配置
⑤積雪時の駐車台数と雪捨て場の確保
がポイントになると考えられる。

③サイン
敷地案内図や施設誘導サインのデザインが統一されておらず，設置当初から更新されていないものが多い。



（4） インフラストラクチャー整備

松岡キャンパスにおけるインフラの状況を示す。（使用量は平成23実績値）
電力，熱源（空調，医療用），ガス及び給水等の主要なインフラ設備は，中央機械室（エネルギーセンター）に集中されており，24時間運転監視を行い，病院機能および教育・研究に支障が無いよう万全を期している。

電気設備		
＜幹線設備＞		
引き込み	特高受電施設1か所，中央配電所1か所，サブ変電所6か所	
電圧	特別高圧77kV　2回線	
変電設備容量	特高 6,000 kVA	
契約電力	特別高圧　3,250 kW	
構内配線方式	埋設管路式　地下ピット配線	（配線）経年35～33年 一部14年，新設時のまま
＜情報設備＞		
通信方法	スター方式　ギガビット	（配線）経年35～33年 一部10年，新設時のまま 一部，通信規格が型遅れ

機械設備		
＜空調方式＞		
・熱源	吸収式冷凍機2基(H11, H18)，冷温水発生機1基(H11)，空冷チラー1基(H18)，ボイラー3缶(H20, H21)，冷温水蓄熱槽，電気式空冷ヒートポンプエアコン	吸収式冷凍機　経年13年 冷温水発生機　経年13年
＜給水＞		
・水源	市水　使用量　25.4万t/年（980t/日） 井水　使用量　14.3万t/年	井水は融雪利用分含む
・給水方式	圧力水槽方式	（配管）経年35～29年 新設時のまま
＜排水＞		
・排水方式	雨水・生活排水分流（構内）	
・実験排水	排水処理施設にて管理	
・排水処理施設	排水処理能力　500㎥/日	施設経年　29年
＜ガス＞		
・ガス種類	LPG　10,350 Nm3/年	（配管）経年35～29年 新設時のまま

＜具体的課題の一例＞

松岡キャンパスのインフラストラクチャーは新設時のまま，経年30年以上が経過したものが多くある。今後，病院再整備計画や改修工事に合わせて，省エネルギー・省コストを勘案した効率的かつ機能的な設備として，計画的な更新が重要課題となっている。

内面ライニングが剥離し，脱落した状況

腐食・発錆が著しい配管類

・老朽化

医学部建物では照明器具が設置等時のまま，経年30年を迎えるものがほとんどであり，安定器が劣化し，照明が点灯しないものが急速に増えてきている。省エネルギーの観点からも早急な更新が必要である。

一般排水系統においては錆コブの発生による排水流れの阻害および腐食による排水管の肉厚減少が問題となっている。また，実験排水系統では，経年によるライニングそのものの劣化および時代の要求に応じた実験内容や使用状況等の変化により酷使され，内面ライニングが剥離し，排水管を詰まらせる状況が起きるなどしており，早急な更新が必要である。

・安全性，機能性劣化

情報通信線において，一部の校舎との連携部分は型遅れのケーブルとなっているため，大容量高速通信に適さない部分があり，通信需要に応じた、計画的な更新が必要である。

蒸気配管は，漏えいによる部分的修理が繰り返し行われている。また，保温材の劣化，トラップの機能劣化が進行しており，流れの阻害や，新たなピンホールを生む原因となっているため，早急な更新が必要である。

給水配管は経年により配管外部の腐食や発錆が進んでおり，他の設備にもらい錆を発生させる原因となっている。また，フレキシブル継手等の各種継手部分から漏水が頻繁に発生する状況となってきており，早急な更新が必要である。

（5）大学が目指す教育研究活動と施設との関連

近年の施設整備による効果

①医学図書館の増築，講義棟の改修
平成21～22年度の2期にわたる医学図書館の増築，平成24年度の講義棟（総合研究棟）の大規模改修を行い，平成22年度に100名から115名に増員された入学定員に対応できる講義室，実習室等の狭隘解消や自ら学び，考え，行動する課題解決型能動学修や語学力・コミュニケーション力涵養に適した修学環境の充実が図られている。

■閲覧室

■合併講義室

■コミュニケーションスペース

■マルチラーニングスペース

②高エネルギー医学研究棟の増築
平成23年度に高エネルギー研究センターの増築を行い，増加研究員への対応や将来用大型実験機器スペースの確保を行っている。これは企業との共同研究によるものであり，本学の最先端研究が注目されていることの証左である。

■外観

■外観

■研究室

■教員室

施設の点検と課題

①医学部
・医学部では第2期中期計画の「大学として重点的に取り組む領域」として『分子イメージングを含む先端的ライフサイエンス』を掲げている。近年，様々なセンターが開設され，最先端の研究が活発に行われているが，それに付随する施設整備状況は十分なものではない。平成23年8月よりテニュアトラック推進本部が，平成23年11月よりオートプシーイメージング教育研究センターが，平成24年4月より子どものこころの発達研究センター等が開設されているが，これらは既存施設を融通するなどによってスペースを確保しており，それに伴って既存領域やセンターに十分な面積配分が行えていない。それぞれ，これからの医学を担うための重要な分野であり，それに従事する若手研究者の育成の面でも十分なスペース配分が不可欠である。既存施設の大規模改修による面積再配分や，増築による面積確保など，病院再整備計画に合わせ，活動スペースの確保を行う必要がある。
・平成24年4月に本学を含める5大学（大阪大学，浜松医科大学，金沢大学，千葉大学）による連合小児発達学研究科が設置された。講義室として医学部の共同利用研究室を振り替えて利用している状況であり，在籍している学生の教育・研究スペースも十分ではない。また，ここは子どものこころの発達研究センターと密な連携が必要であるため，病院再整備計画に合わせ，子どものこころの発達研究センターと一体的に教育・研究スペースを整備する必要がある。

②医学部附属病院
・大学病院の使命と役割は，診療を通じて医学の教育と研究を推進し，教育・研究を通じて得られた成果を質の高い医療として提供し広く社会に貢献することであるが，開院以来30年近くを経過した建物・施設は，老朽化のみならず社会情勢の変化や医療の進歩に対応出来なくなっている。
・附属病院内は，実践教育の場である病室・ナースステーション・外来診察室等が狭く，また，カンファレンス室も数が少なく狭い。更にスキルラボ室等の教育スペースがない。これらの問題は，優れた地域医療人の育成や高度医療専門職を養成する上で大きな障害になっている。病院再整備の際に最も改善が求められるところである。
・県内で唯一の医師養成機関であるにも関わらず研修医室や学生控室がない等，修学環境が他大学等に比べて必ずしも充分でなく，本学卒業生が地域医療人として定着しないことが危惧される。病院再整備計画に合わせ，スペースの確保が必要である。

③共同利用施設・センター
・本学の先端的ライフサイエンス研究を推進するために設置されたライフサイエンスイノベーション推進機構の研究・人材育成スペース確保を病院再整備計画に合わせ整備する。
・ライフサイエンスイノベーション推進機構のライフサイエンス支援センター生物資源部門では，動物飼育スペースの不足や24時間稼働している動物飼育室の空調設備の老朽化が大きな問題となっている。動物飼育の国際基準に沿い，動物飼育スペースの増設や研究者の労働環境を改善し，かつ，省エネルギーを図るため，新しい空調システムへの転換が必要である。
・平成24年度より子どものこころの発達研究センターを，その問題の重要性から全学共同研究センターと位置付けているが，研究スペースはこれまでと同様，狭隘で，学内に点在している状況であり，効率的に運用される状態ではない。また，医学部で利用している共同スペースを振り替えて利用している状況であり，病院再整備計画に合わせ，まとまった教育・研究スペースの確保が緊急的に必要である。

④医学図書館
・医学図書館は増築による利用環境が向上した効果により，利用率が上昇している。また，開館時間を延長することによる学生からの評価も上々である。今後益々の貢献度上昇のためにメディア面や最新情報機器に対応できる施設整備が重要である。

⑤学生支援施設（課外活動施設，食堂，福利棟等）
・現在のキャンパスでは，課外活動やメンタルヘルスケアを始め，学生支援のための施設は十分ではない。このため，相談室，課外活動施設，ラウンジ・リフレッシュルーム（学生からのアンケートでも要望が多い）等の学生支援を集中化した施設の整備が望まれており，既存施設の有効活用を図るとともに，増築を含め再整備を進める。

（6） 課題のまとめと検討の方向性

①施設の老朽化及び狭隘化への対応

経年30年を経た建物が増えてくる状況を踏まえて，病院再整備計画をはじめ，各建物の効果的・効率的な老朽，狭隘化の改修，増築を計画する。

②駐車場について

患者さんと教職員・学生の駐車場を明確に区分し，駐車場の増設・設置位置及びカーゲート設置の検討を行い，違法駐車をなくす。また，『空車』『満車』の表示等により，患者さんに対してスムーズな誘導を行う。

患者用駐車場から病院建物までの歩道等は，積雪時の安全性や利便性に配慮し計画する。

③病院正面入口の病院利用者とその他利用者の自動車動線の検討

病院正面入口は様々な入構車があり，その動線が輻輳していることでたいへん危険である。病院正面入口の入構を患者さん，バス・タクシー等の公共交通機関に限定し， 出入り動線の混在を防ぎ，職員・学生及び業者関係は決められた出入口より入構する等とし，動線を整理し計画する。

④サイン計画の検討

敷地案内図が更新されていないため，一般利用者にとって大変わかりにくい状況となっている。年度ごとに見直し，状況に応じて更新が容易となるように，キャンパス内案内図の構造や配置等を計画する。また，病院利用者のための駐車場サインと施設誘導サインについては，他のサインとの識別が明確になるように配慮し計画する。

点字ブロック，色弱者対応サイン，弱視者対応サイン等を含めた計画とし，周囲より目立ち，分かりやすいサイン計画とする。新病棟建設に合わせて屋内外のサインのデザインを統一し，英語等の外国語表記も計画する。

⑤電気設備

サブ変電室の高圧設備・高圧ケーブルは，老朽化し，安全性に欠けるものや，非効率機器等が多くあるため，安全性の確保，省エネルギー化に配慮した更新を計画する。

病院・医学部建物では照明器具の老朽化および，情報通信線の型遅れが課題であるため，更新を計画する。

⑥空調設備

空調熱源や空調機は，耐用年数を考慮し計画的に更新しているが，全ての建物で中央熱源方式としているため，建物使用状況に合わず非効率的運用となっている。また，ダクトや配管は老朽化しているため，省エネルギー，省コスト等に配慮した全面的な更新を計画する。

⑦ガス設備

ガスの構内配管は共同溝及びトレンチ内を経て供給している。腐食等のおそれは少ないが，ガス漏れがあると建物全体に影響が大きいため，ガス漏れ感知器等日常点検により安全を維持しているが，今後老朽化に合わせ，効率的な更新を計画する。

⑧給水設備

給水は，中央機械室のポンプ設備により台数制御及び回転数制御による効率のよいシステムとなっている。今後とも，使用状況等を検証し，更なる省エネルギー・節水が図れる計画とする。

⑨廃水処理

既存廃水処理施設は設置当時のもので，現在は当時に比べ処理能力が小さくても済むことから，実情に適した処理施設への改修を計画する。

また，病院の事業継続計画（BCP：Business Continuity Planning）を考慮した処理システムの構築を計画する。

⑩融雪・除雪対策

駐車場については融雪設備の設置を推進するとともに，周囲に除雪が効率的に行えるスペースを設ける等，冬期にも駐車台数を確保できるよう計画する。また，歩行者の通路部分については地熱や井水，排熱等を利用した無散水融雪等を計画し，凍結時の転倒を防ぐとともに患者さんが通行する部分については屋根を設置する等，利用者アメニティの充実が図れる計画とする。

3―5 二の宮キャンパス（附属幼稚園・小学校・中学校）の施設の概要（現状と課題）

（1）キャンパス環境

①キャンパスの立地環境

福井市の北西，文京キャンパスから約1.5Km北側で，比較的閑静な住宅地に位置している。敷地は東西に長い整形で，敷地の高低差はなく平坦地である。

二の宮キャンパス　航空写真
（平成24年11月）

②所在地

●所在地：福井市二の宮4丁目45－1
●学部等：附属幼稚園・附属小学校・附属中学校

③法的指定等

●都市計画区域内　第2種中高層住居専用地域
（建ぺい率：60%・容積率：200%）

④敷地面積・建物面積

●敷地面積　40，071㎡
●建築面積　7，278㎡
●建物延床面積　11，977㎡
●建ぺい率　18．2%
●容積率　30．0%

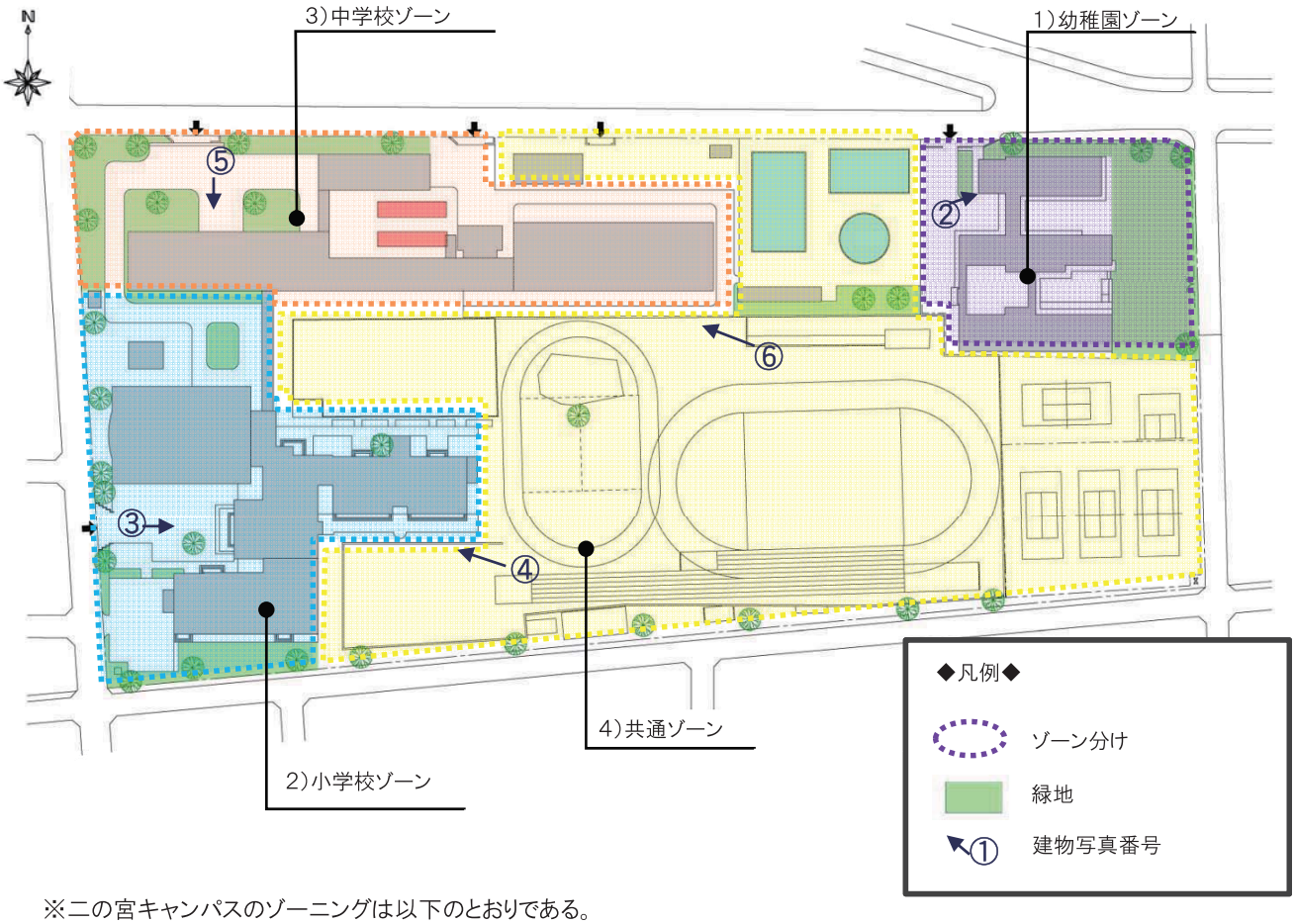
⑤防災

福井市の避難場所（地震時・風水害時共）に指定されている。
福井市洪水ハザードマップ：洪水深が1.0m～2.0m未満の地域
防災倉庫設置

⑥ISO

ISO14001（環境マネジメントシステムに関する国際規格の総称）認証取得

⑦ キャンパスゾーニングの現状



※二の宮キャンパスのゾーニングは以下のとおりである。

1）幼稚園ゾーン　（昭和42年，49年に整備され，平成22年度に園舎の改修及び遊戯室等の増築を完了した。）

2）小学校ゾーン　（平成2～5年に改築整備が行われ，耐震性は確保されているが，改築後すでに20年以上が経過し老朽化が進んでいる。）

3）中学校ゾーン　（附属中学校の主要校舎は，昭和61年に耐震補強と内部改修を行ったが，築後約50年を迎え，老朽化が著しい。）

4）共通ゾーン　（グラウンドはほとんど整備されておらず，排水も含め改修する必要がある。小，中学校の間の緑地は，保護者等の駐車場として利用され，車と児童・生徒との交差が問題となっている。）

二の宮キャンパスは，幼稚園ゾーンと小・中学校ゾーンが共通ゾーンのプールを挟み，建物を有するゾーンとして独立しており，ゾーン間の連絡機能に支障がある。

①. 附属学校全景

②. 附属幼稚園（S42.S49.H22）
平成22年度に耐震改修及び遊戯室の増築を完了した。

③. 附属小学校（H2.H3.H5）

④. 附属小学校

⑤. 附属中学校（S38.S51.S61改修）

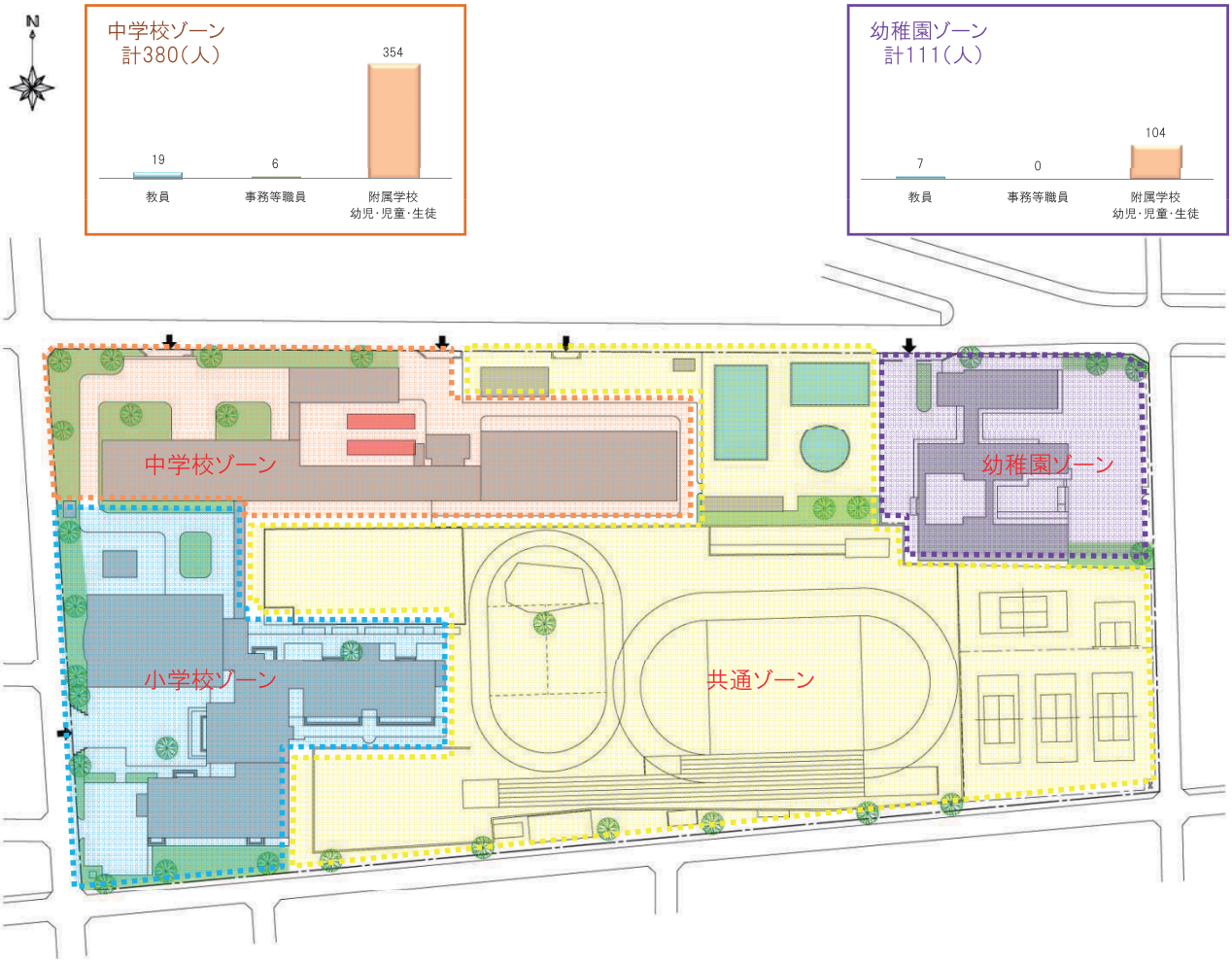
⑥. 附属中学校

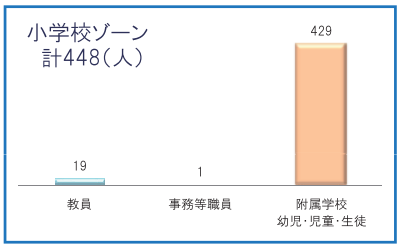
⑧ 人口分布（教職員・学生）

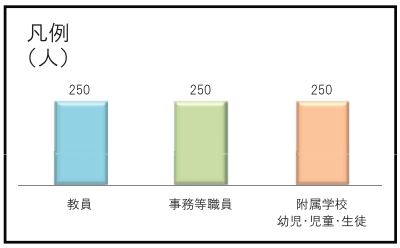
【各部局構成員数（人）】

	教員	事務等職員	学部生	研究科	学生内の留学生（内数）	附属学校 幼児・児童・生徒
教育地域科学部附属幼稚園	7				0	104
教育地域科学部附属小学校	19				0	429
教育地域科学部附属中学校	19				0	354
中学校ゾーン事務局職員		3				
中学校ゾーン事務局職員（契約・パート・嘱託・特命職員,一部看護師含む）		4				
合計	45	7	0	0	0	887

福井大学基礎資料2012より

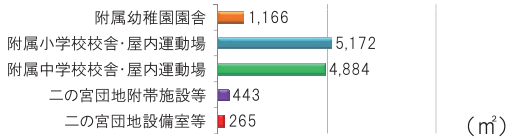






【図・表　各ゾーン利用者数】

⑨ 建物分布：建物延べ床面積（㎡）



福井大学実態調査より
（平成24年度末現在）

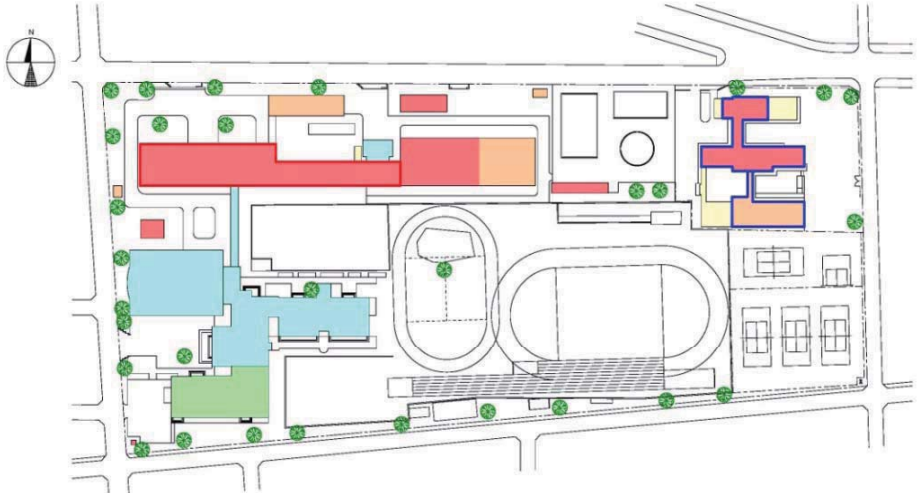
【グラフ　各ゾーン建物面積】

（2）キャンパス整備の状況（経年数・耐震性能）

二の宮キャンパスの全体の建物面積　11,977㎡の内，耐震化率は90%を超えており，技術家庭科教棟（Is値0.69）を除くほとんどの建物が耐震性に問題は無い。一方老朽化の面では，中学校校舎等の経年40年を超えた建物が36%あり，今後は改築を含めた検討が必要である。

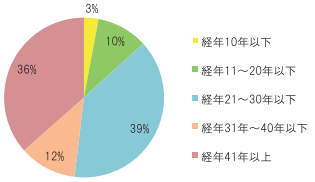
（平成24年度末現在）

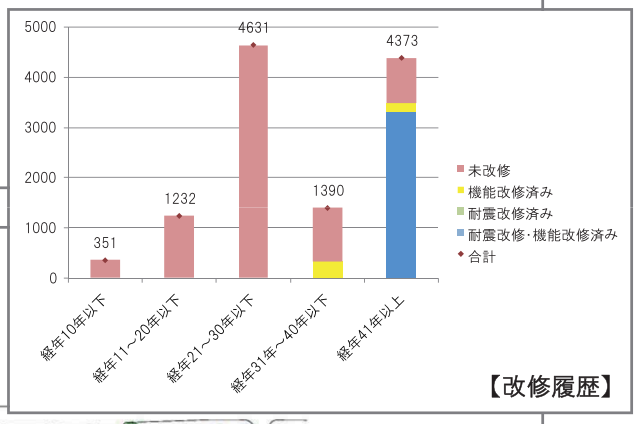
【各建物の経年数】



経年10年以下の建物	：	351㎡
経年11～20年以下の建物	：	1,232㎡
経年21～30年以下の建物	：	4,631㎡
経年31～40年以下の建物	：	1,390㎡
経年41年以上の建物	：	4,373㎡
機能改修済み	：	902㎡
改修後25年以上経過	：	2,904㎡

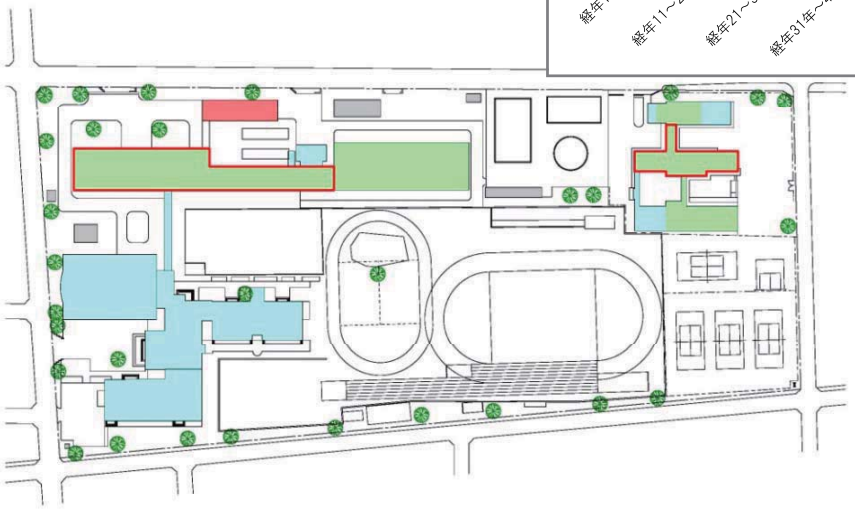
【保有建物の経年構成比】





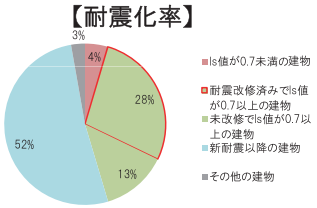
【改修履歴】

【各建物の耐震性能】



Is値が0.7未満の建物	：	547㎡
耐震改修済みでIs値が0.7以上の建物	：	3,302㎡
未改修でIs値が0.7以上の建物	：	1,585㎡
新耐震以降の建物	：	6,214㎡
その他の建物	：	329㎡

【耐震化率】



（3）屋外環境整備

－緑地・駐車場・駐輪場－

二の宮キャンパス全体の緑地率は6.5%と福井大学キャンパスにおいて大変低い。敷地の周囲を中高木が取り囲んでいるが，季節を感じる樹種が少なく，敷地周囲以外には緑地がほとんどない。幼・小・中学校があるこのキャンパスでは理科学習の教材や屋外学習の場として，明るい雰囲気を持ち，子どもたちの豊かな情緒を育む場として，また，屋外活動時における熱中症予防のための木陰やコミュニケーションの場として，十分な緑地を確保する必要がある。

■ 中学校外部

■ 小・中学校グラウンド

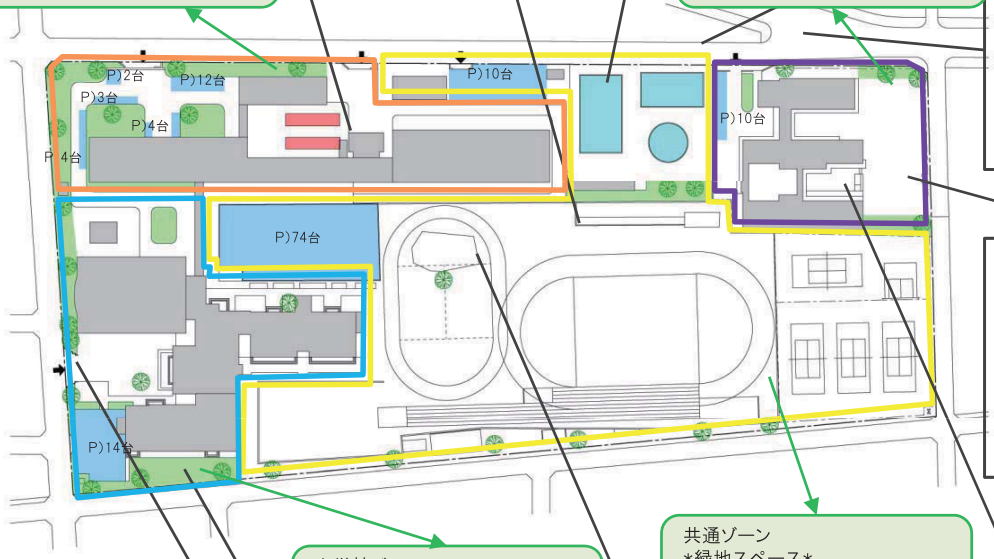
■ プール

■ 幼稚園・中学校前道路

中学校ゾーン
緑地スペース
緑地/敷地(ゾーン内):14.0%

幼稚園ゾーン
緑地スペース
緑地/敷地(ゾーン内):7.1%

■ 幼稚園前道路



■ 幼稚園園庭

小学校ゾーン
緑地スペース
緑地/敷地(ゾーン内):12.7%

共通ゾーン
緑地スペース
緑地/敷地(ゾーン内):0.9%

■ 小学校児童玄関

■ 小学校南側緑地帯

■ 小学校グラウンド「築山」

■ 幼稚園中庭

構内全体
緑地スペース
緑地/敷地:6.5%

◆凡例◆
- ゾーン分け
- 緑地
- 駐車場（計133台）
- 駐輪場（計155台）

（4） インフラストラクチャー整備

二の宮キャンパスにおけるインフラの状況を示す。（使用量は平成23実績値）

電気設備		
＜幹線設備＞		
引き込み	変電施設1か所	
電圧	高圧　6.6kV 1回線	
変電設備容量	325 kVA	
契約電力	高圧　216 kW	
構内配線方式	埋設管路式　地下ピット配線	
＜情報設備＞		
通信方法	スター方式　ギガビット	

機械設備		
＜空調方式＞		
・熱源	蒸気ボイラ1缶(H3)，温水ボイラ1缶(H3) 電気式空冷ヒートポンプエアコン(H18～H23)，蒸気式暖房	ボイラー経年21年 エアコン経年6～1年
＜給水＞		
・水源	井戸水　使用量　10,900t/年(55t/日)	井戸ポンプ　経年19年
・給水方式	高置水槽方式	(配管)更新率 約80%
＜排水＞		
・排水方式	雨水・生活排水分流(構内)	生活排水S63やり替え
＜ガス＞		
・ガス種類	都市ガス13A　11,499 Nm3/年	(配管)経年30～21年 メイン配管S57 各建屋内新設時のまま

＜具体的課題の一例＞

二の宮キャンパスのインフラ設備は設置から50年が経過し，これまでは応急的に対応してきたが，全体的に老朽化や機能劣化が目立つようになってきている。今後状況把握を的確に行い，省エネルギー・省コストな設備への更新を計画する必要がある。

・屋外排水

雨水排水能力に問題があり，近年のゲリラ豪雨の際には構内の排水能力が追い付かず，周囲が水たまりのようになってしまうケースが見受けられる。構内の排水能力について再検討するとともに，敷地周辺の排水側溝や河川の状況について福井市と協議を進める必要がある。

■平成24年9月3日大雨状況

■平成24年9月3日大雨状況

・空調熱源

蒸気式暖房を中学校教室および小学校の一部にラジエター式暖房で使用している。温水ボイラーによる床暖房を小学校の教室及び多目的ホールで使用している。

暖房熱源に使用しているボイラー2基は法定耐用年数に達している状況である。今後の熱源のあり方を見越した修繕・改修を計画的に行っていく必要がある。

・給水

現在は井戸水で賄っている。八ツ島キャンパスで地下水の塩水化による影響により飲用不適となった事例を受け，将来的に市水を引き込み可能なようにバックアップ体制は整備済みである。しかし，運用面においてはいつまで使用可能かという問題がある。市水を使用することになった場合は水道料金が発生し，運営費が大幅にかさむことになる。また，塩水は給水設備を著しく劣化させるため，設備保全に係る手間や維持費を増加させる原因となる。このため，市水引き込みの他，井水の浄化についても検討を進める必要がある。

（5）大学が目指す教育研究活動と施設との関連

二の宮キャンパスは，教育地域科学部附属幼稚園，小学校，中学校があり，義務教育としての普通教育のほか，教育理論の実証的研究および，教育地域科学部生・大学院生の教育実習の場である。中期目標においては大学教員と幼稚園，小学校，中学校および八ツ島キャンパスの特別支援学校を含めた附属4校園の協働体制の下，教育の実践と研究を行うとともに，教職大学院の拠点校として長期実習を中核とした学生の実践力向上と教師教育を推進し，地域に開かれた学校づくりを目指す，としており，それらに応じた取組みが円滑に実践できるよう，整備が必要である。

近年の施設整備による効果

①幼稚園の改修，増築

平成22年度に附属幼稚園の全面改修と一部増築によって，耐震性の確保および，狭隘の解消を行った。これにより，保育室がより機能的に使用可能となった他，衛生面の改善や，照明，冷暖房の効率の向上により，省エネルギー化された。また，教育面では保育の充実，公開教育や全体教育集会等の充実，園児の増員対応等が挙げられる。さらに，地域における幼児教育に係る教育研究拠点および地域の子育て支援の拠点として，放課後園庭の開放，子育て広場（未就園児・保護者のサポート）など活発な活動が行われるようになった。

■遊戯室

■玄関

■保育室トイレ

■中庭

施設の点検と課題

①小学校

附属小学校は昭和39年に二の宮キャンパスに独立開校後，平成5年に改築された，県内最初のオープンスペースのある教室を備えた校舎である。特色としては「児童の企画・運営による行事」「思いやりを大切にする集会活動」等を通して，自主的で自立的な児童の育成に努めていることである。現在は専門性を生かす教科担任制を一部導入し、協働して学びを深める授業実践に取り組んでいる。

改築から19年の間に，多様な理論の実践が行われ，それに伴って教育内容・教育方法が変化してきており，当初の利用想定から考えられなかった問題が明らかになってきている。例えば，理科室，家庭科教室と図工室を一体的な整備としているが，衛生面における問題から，スペースの有効利用や多様な使用方法が出来ないなどの問題が出てきており，早急な対応が必要である。

また，教育実習生同士がダイレクトなコミュニケーションが出来ない等，交流により互いに学びあい，実践力を高めあえる環境としての十分な教生控室等が確保出来ておらず，その充実が必要である。

その他，学びのスタイルが多様化していることに伴う，多様な使用方法ができるスペースの充実など，これまでの機能を維持しつつ，新しい取組みを可能とする一体的な改修が必要である。

②中学校

附属中学校では，生徒主体の探究的授業や保護者と連携した活動など先進的な学習活動を長年展開しているが，校舎の老朽化（築49年）のもとで，施設配置の不備や生徒主体の多様な活動を支える学校空間の不足などが，学習活動の足かせとなっている現実がある。地域の拠点校として先進的役割を果たすためにも，探究的授業を円滑に行うための実習型学習スペースや多様な学校活動を可能にする多目的スペースの設置等，既存校舎の改修では，物理的に建物機能の改善や新機能の取り込みに対応出来ないため、校舎の改築が喫緊の課題である。

③共通施設

通学時の幼児・児童・生徒の安全確保が喫緊の課題である。キャンパスは住宅地にあり，敷地周囲の道路幅員は6mで歩道が無く，通学時間帯の通行車両が多い。近年各地で多発している痛ましい，通学時の事故発生を防ぐために歩道整備を市とも協議しながら早急に行う必要がある。

3―6 ハツ島キャンパス（附属特別支援学校）の施設の概要（現状と課題）

（1）キャンパス環境

①キャンパスの立地環境

福井市の北西，文京キャンパスから約2.5Km北西側で，田園地帯の中に位置している。敷地は台形で敷地の高低差はなく平坦地である。

尚，本キャンパスは，昭和48年に附属特別支援学校として二の宮キャンパスより移転・新設した場所である。

ハツ島キャンパス　航空写真
（平成24年11月）

②所在地

●所在地：福井市ハツ島町1字3
●学部等：附属特別支援学校

③法的指定等

●都市計画区域内　市街化調整区域
（建ぺい率：70%・容積率：400%）

④敷地面積・建物面積

●敷地面積　14，781㎡
●建築面積　2，816㎡
●建物延床面積　3，734㎡
●建ぺい率　19．0%
●容積率　25．0%

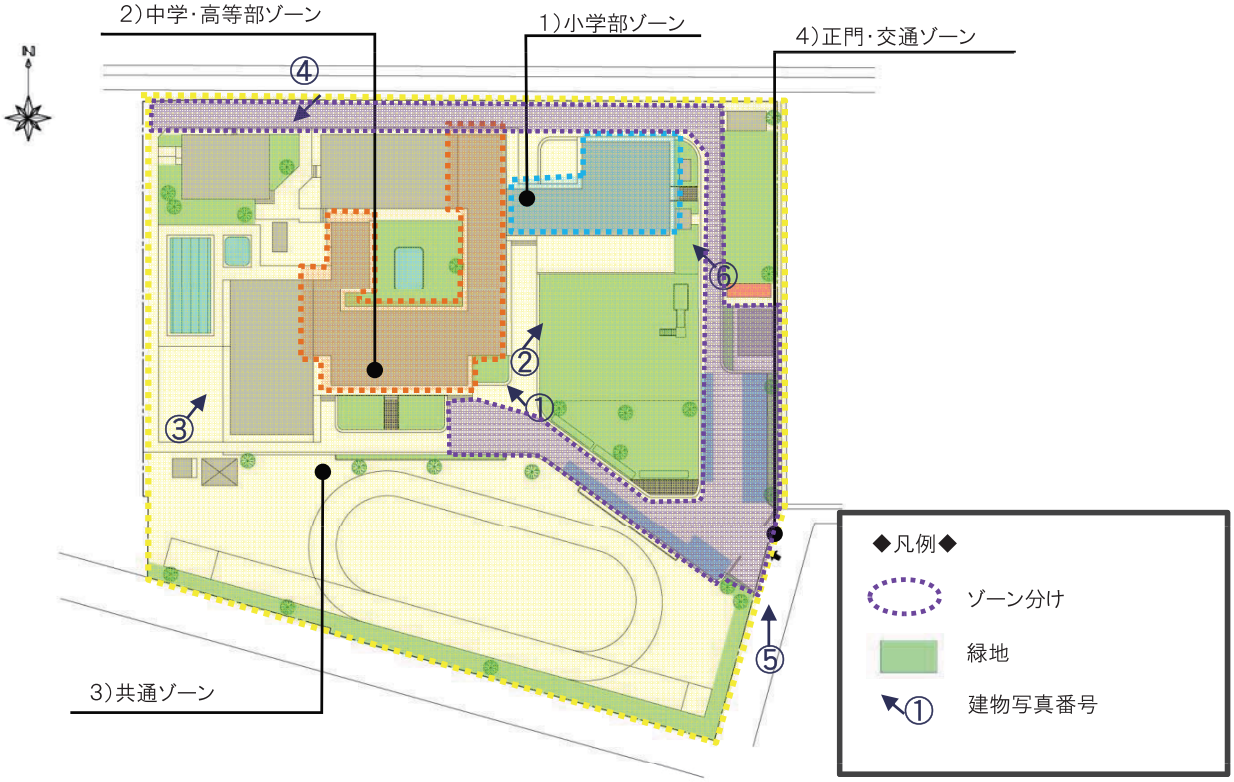
⑤防災

福井市洪水ハザードマップ：洪水深が1.0m～2.0m未満の地域
防災倉庫設置

⑥ISO

ISO14001（環境マネジメントシステムに関する国際規格の総称）認証取得

⑦ キャンパスゾーニングの現状



※八ツ島キャンパスのゾーニングは以下のとおりである。

1）小学部ゾーン　（小学部教棟は昭和48年に整備され，老朽化が進んでいる。）
2）中学・高等部ゾーン　（中学・高等部教棟は昭和48年に整備され，老朽化が進んでいる。）
3）共通ゾーン　（職業棟，屋内運動場や日常生活訓練施設をはじめ，児童・生徒が共通で使用するエリアである。日常生活訓練施設以外は昭和48年～昭和54年に整備され，全体的に老朽化が進んでいる。）
4）正門・交通ゾーン　（駐車場や車庫，搬入車両の通過ゾーンである。）

八ツ島キャンパスでは，小学部ゾーン，中学・高等部ゾーンと共通ゾーンが活動の場として密接な関係が必要である。また，正門・交通ゾーンが各ゾーンを分断する形で存在しており，屋外活動時に車両との接触事故等の危険が大きい。

①. 中学・高等部教棟（S48）
壁画のある学校
「虹の画家」として世界的に有名な靉嘔（アイオウ）氏の原画を元に作成された。生徒の情操教育のため，当時の関係者の努力と先進的な試みは賞賛に値する。この学校にかける情熱と期待が感じられ，末永く保存していきたい

②. 小学部教棟（S48）

③. 屋内運動場（S48）

④. 日常生活訓練施設（H5）

⑤. 正門

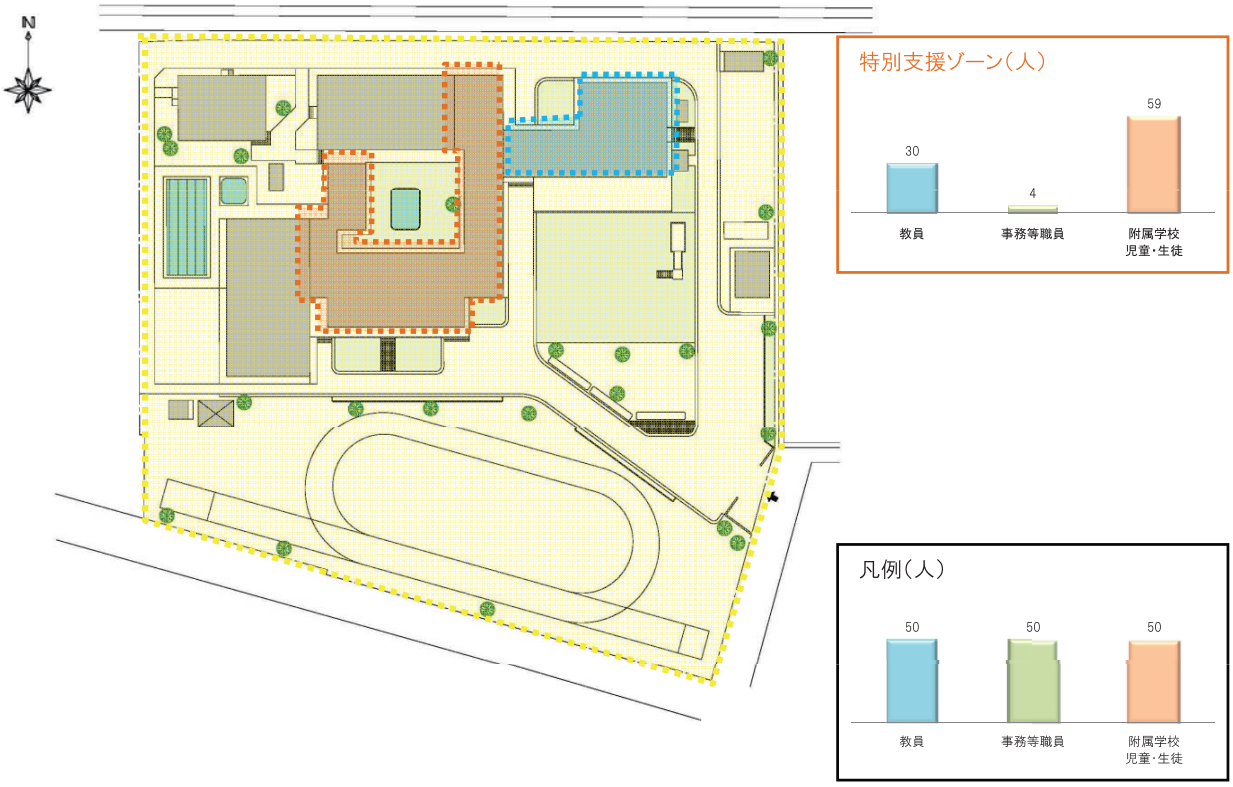
⑥. 校庭

⑧ 人口分布（教職員・学生）

【各部局構成員数（人）】

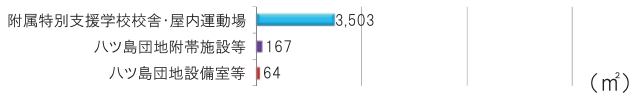
	教員	事務等職員	事務等職員（特命・パート等・一部看護師含む）	学部生	研究科	学生内の留学生（内数）	附属学校児童・生徒
教育地域科学部附属特別支援学校	30	3	1			0	59
合計	30	3		0	0	0	59

福井大学基礎資料2012より



【図・表 各ゾーン利用者数】

⑨ 建物分布：建物延べ床面積（㎡）



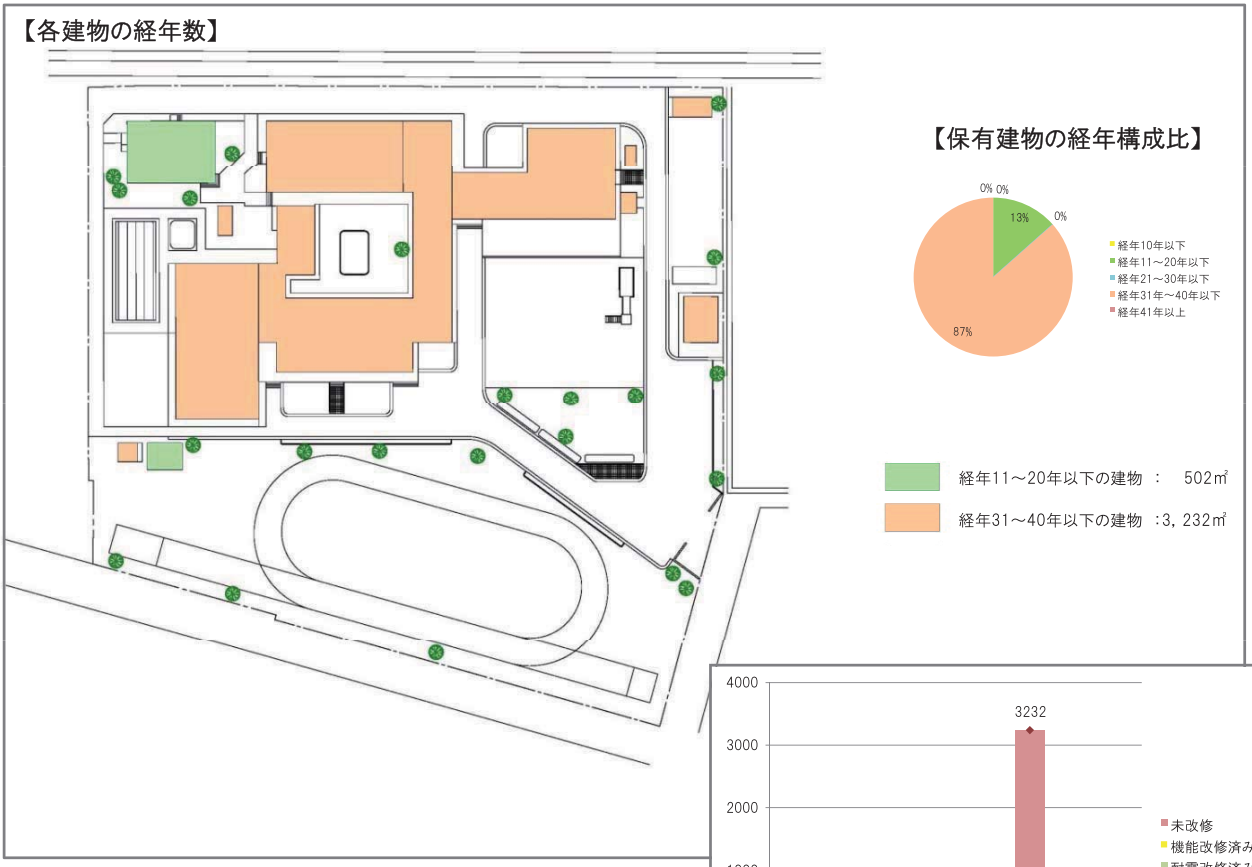
福井大学実態調査より
（平成24年度末現在）

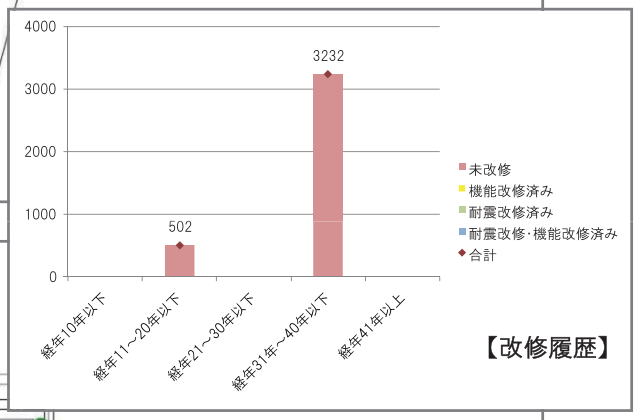
【グラフ 各ゾーン建物面積】

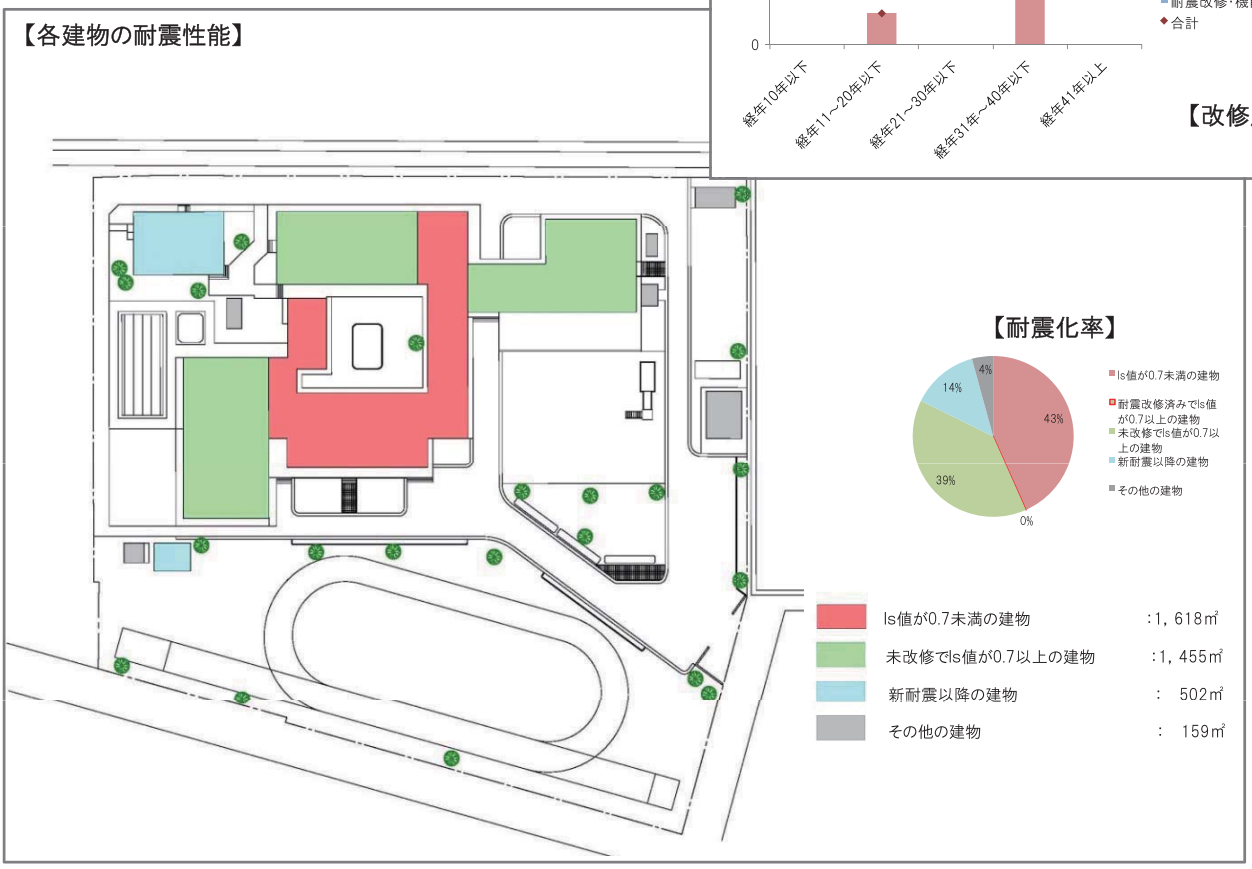
（2）キャンパス整備の状況（経年数・耐震性能）

ハツ島キャンパス全体の建物面積　3,734㎡の内，中学・高等部教棟（Is値0.62）のため,耐震化率は50%である。
一方老朽化の面では，90%近くが経年30年を超えており,改修が必要である。

（平成24年度末現在）







（3）屋外環境整備

①緑地・駐車場・駐輪場

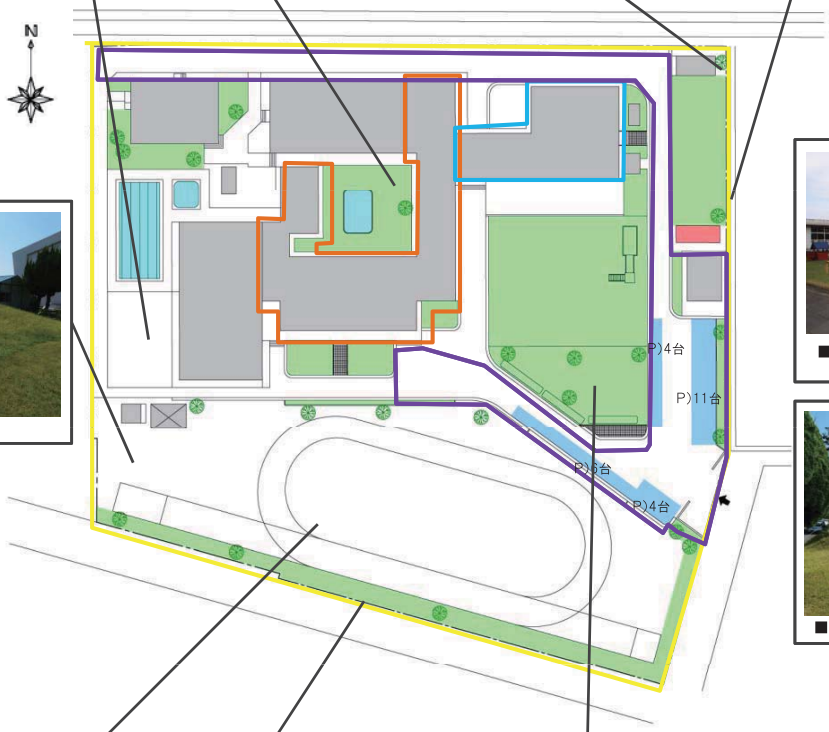
八ツ島キャンパス全体の緑地率は20.1%と低いが，「ふようのもり」や「藤棚」など，季節の移り変わりを感じることができる空間があり，屋外学習の教材として活用されている。また，「築山」や「グラウンド」等も芝生広場となっており，緑が感じられる屋外活動の場として重要である。しかし，安全面から中庭の池の利用が制限され，有効に活用されない広場がある一方，実習用の畑が少なく，面積を確保する必要があることなど，ニーズに合わせた敷地利用について調整を図る必要がある。

■実習畑

■中庭

■温室

■窯場



■築山

■小学部教棟前広場

■小学部教棟前広場

■グラウンド

■藤棚

■ふようのもり

構内全体
緑地スペース
緑地/敷地：20.1%

◆凡例◆
- ゾーン分け
- 緑地
- 駐車場（計25台）
- 駐輪場

（4） インフラストラクチャー整備

ハツ島キャンパスにおけるインフラの状況を示す。（使用量は平成23実績値）

電気設備		
＜幹線設備＞		
引き込み	受変電施設1か所	
電圧	高圧　6.6kV 1回線	
変電設備容量	100 kVA	H24トランス更新
契約電力	高圧　67 kW	
構内配線方式	埋設管路式　地下ピット配線	（配線）経年40年 新設時のまま
＜情報設備＞		
通信方法	スター方式　ギガビット	（配線）経年13年 新設時のまま

機械設備		
＜空調方式＞		
・熱源	温水ボイラー1缶(S48) 電気式空冷ヒートポンプエアコン	温水ボイラー　経年40年
＜給水＞		
・水源	市水　使用量　1,600t/年(8.0t/日)， 井水(雑用水)　2,600t/年	井水は融雪利用分含む
・給水方式	市水　直結直圧方式　(S58) 井水　高置水槽方式　(S48)	（市水配管）　経年15年 H9 ライニング化 （井水配管）　経年40年 新設時のまま
＜排水＞		
・排水方式	雨水・生活排水分流(構内)	（配管）　経年40年 新設時のまま
＜ガス＞		
・ガス種類	LPG　1,273 Nm3/年	（配管）　経年40年 新設時のまま

＜具体的課題の一例＞

ハツ島キャンパスのインフラ設備は，給水管の一部改修をしたもの以外は新設時のものがほとんどである。教育ニーズの変化に伴い，新しい設備が要求されてくることも考えられ，それらに対応するために長期的視点から電気容量の余力確保や増設スペースの確保等を検討し，省エネルギー・省コストな設備への更新を計画する必要がある。

・空調熱源

空調用温水ボイラーは体育館のパネルヒーターの熱源として用いている。以前は教室部のファンコイルの熱源としても利用していたが，段階的にヒートポンプエアコンを導入していることにより効率化が図られてきており，現在の暖房面積に対しては能力過剰となり非効率であり，また，設置から40年を経過していることから老朽化が進んでいるため，代替熱源の検討及び更新が早期に行われる必要がある。

・給水

給水設備については，昭和58年までは井水を飲料用として使用していたが，井水の塩水化により，飲料水として使用できなくなり，市水を飲料用水として使用し，井水を雑用水として使用している。井水に使用している配管は塩化水のため，腐食・発錆が進んでおり，衛生器具の動作不良の原因になるなど，給水設備の問題点となっている。

（5）大学が目指す教育研究活動と施設との関連

八ツ島キャンパスは，教育地域科学部附属特別支援学校があり，教育基本法，学校教育法，その他教育関係法規に基づき，知的障害のある児童・生徒の教育を行うほか，知的障害児教育の理論及び実践に関する研究を行い，また，教育地域科学部生・大学院生の教育実習をはじめ，同学部生の介護等体験，医学部看護学科生の小児看護学実習，県外大学生の介護等体験等を受け入れ，様々な実践指導の場として利用されている。中期目標においては大学教員と特別支援学校および二の宮キャンパスの幼稚園，小学校，中学校を含めた附属4校園の協働体制の下，教育の実践と研究を行うとともに，教職大学院の拠点校として長期実習を中核とした学生の実践力向上と教師教育を推進し，地域に開かれた学校づくりを目指す，としており，それらに対応した取組みが円滑に実践できるよう，施設の整備が必要である。

施設の点検と課題

①教棟（小学部，中学部，高等部教室）

現在の校舎が建築された当時は，教育課程は普通教育に準じた教科教育が中心であり，校舎の構造も普通学校に準じたものとなっており，現在本校が目指す教育内容・教育方針にはそぐわない状況になっている。また当時は，在籍していた児童生徒の障害の程度が比較的軽度だったが，近年では児童生徒における知的障害の程度や特性が多様化・重度化するようになり，児童生徒の障害に応じた校舎の機能改善が必要になっている。

歴史的に大切にしてきた「生活教育」の理念に基づく実践を推進していくにあたって，学年の枠を超えた縦割りの学級編成を導入しているが，より効果的な運用をするには「ホーム」というオープンで，柔軟に，多目的に使用できるスペースの整備が必要である。また近年，年齢に比して子どもたちの体が大きくなってきており，従来よりも余裕のあるスペース構成が必要である。また，これまでの増築における不自然な間取りや認識されにくい段差のため，構内で転倒するなど，バリアフリーに関する問題が発生しており，全体的に見直す必要がある。

さらに，地域における障害のある児童・生徒やその保護者を対象とした教育相談等を行うことや，県内の公立学校の教員を対象に行っている教育相談会、研修会の実施といった地域のセンター的役割をさらに充実させるためにも，経年39年で老朽化が激しい校舎の全面改修やそれに合わせた一部増築等の整備が喫緊の課題である。

②教棟（特別教室），職業棟

生活に根ざした教育課程を構築してきた中で，より効果的な教育内容や教育方法が実践されるに従い，中心的に使用される部屋が手狭になってきた。子どもたちの情緒や感性を育てる音楽室や，もの作りや体験活動で使用する「紙とすり」「木工」「焼きもの」「織もの」の部屋，それらの作品の保管場所や展示スペース，また，子どもたちの指導に当たって大変有効な職員自作の教材・教具を保管する部屋等である。本校では，特に専門的レベルで使用する薬剤や機器を使用しており，狭隘な状況で作業を続けさせることは，子どもたちの安全確保の面で不十分である。

子どもたちにとって，社会と連携した生活教育が行なわれることが社会的自立に向けての第一歩となるため，ものづくり等を通して地域と連携するためにも，ゆとりのある，安全な作業環境を整備する必要がある。

③職業訓練棟

通称「のぞみの家」と呼ばれる職業訓練棟は，本校舎と離れて立地しており，雨天や降雪等の悪天候の際は，子どもたちが転倒しやすいため，渡り廊下等の設置が望まれる。また，セキュリティの面においても特別な配慮を行う必要がある。平成5年の設置から19年が経過し，設備や内装が劣化してきている。木造の建物が提供する「木のぬくもり」が子どもたちのこころにとって貴重であり，適切な維持管理とともに改修計画を早急に立案する必要がある。

④体育館

体育館では，バスケットゴールや照明器具等の地震時における安全確保が必要である。また，老朽化によって，壁の仕上げ材が浮きあがり，釘が飛び出してくる状態となることや活動の多様化，安全対策用緩衝材の付加による器具の大型化によって器具庫が不足している状態である。校舎改修に合わせて適切な安全対策および機能の見直しを行う。

3－7. 敦賀キャンパスの施設の概要

（1）キャンパス環境

①キャンパスの立地環境

敦賀市の中心，敦賀駅から約400m西側で，市街地の中に位置している。
敷地はほぼ正方形に近い形で敷地の高低差はなく平坦地である。

敦賀キャンパス　航空写真
（平成24年11月）

②所在地

●所在地：敦賀市鉄輪町1丁目2街区4
●学部等：附属国際原子力研究所

③法的指定等

●都市計画区域内　第1種住居区域（建ぺい率：60%・容積率：200%）

④敷地面積・建物面積

●敷地面積	5，700㎡（借用）
●建築面積	2，328㎡
●建物延床面積	6，996㎡
●建ぺい率	41．0%
●容積率	123．0%

⑤防災

敦賀市洪水ハザードマップ：洪水深が1.0m～2.0m未満の地域

⑥施設の概要

福井大学附属国際原子力工学研究所は，平成21年4月，「世界トップレベルの特色ある原子力人材育成及び研究開発を行い，環境と調和した持続的なエネルギー供給基盤を持つ世界の構築に貢献する」をスローガンに，福井市の文京キャンパスに設置した。

平成23年12月には，敦賀市に研究所建物が完成し，翌平成24年，敦賀市より無償貸与を受け，福井大学敦賀キャンパスとして運用している。

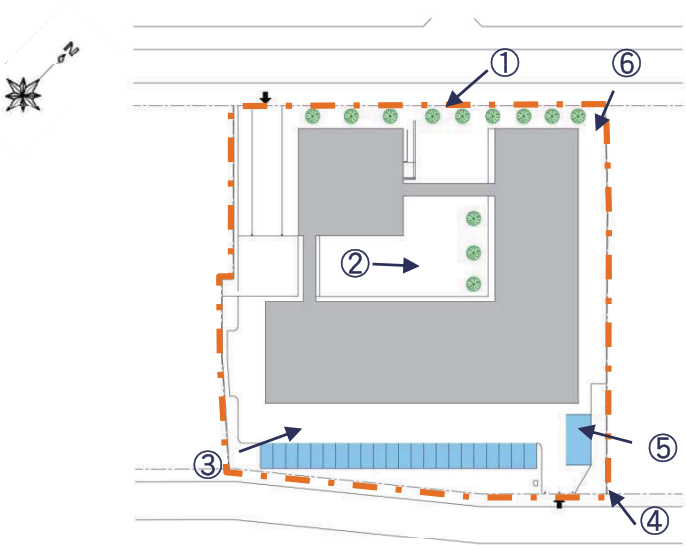
⑦研究・教育活動の展開

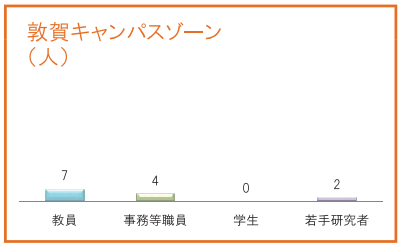
『研究』
・福井県嶺南地域の研究機関，民間企業等との共同・協力による，実炉を対象とした原子力の基礎・基盤研究
・フランス，アメリカをはじめとする海外の研究機関との活発な学術交流，国際的な原子力安全基盤研究
・原子力の安全性向上，防災危機管理の向上に役立つ研究

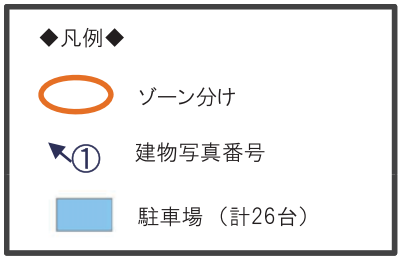
『人材育成』
・原子力に関する学部基礎教育（工学部副専攻コース）
・「原子力基盤工学コース」での大学院生の専門教育
・留学生の受け入れ
・国内外からの研究者・研究員の受入れ，県内の原子力施設を活用した質の高い国際的人材育成

『連携・拠点化』
・北陸・中京・関西圏の大学，研究機関との連携
・原子力施設を核とした研究拠点の形成促進
・若狭湾エネルギー研究センターや各種ネットワークとの連携
・地域に開かれた研究所として，講演会，セミナー等を通した地域貢献

⑧ キャンパスゾーニングの現状







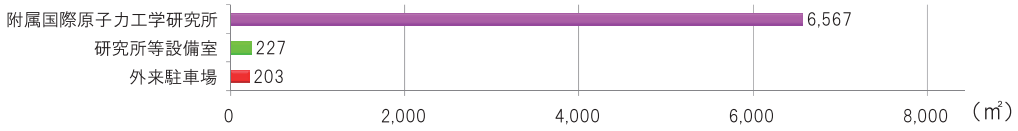
⑨ 人口分布（教職員・学生）

【各部局構成員数（人）】

	教員	事務等職員	事務等職員（特命・パート等・一部看護師含む）	学部生	研究科	若手研究者	学生内の留学生（内数）
附属国際原子力工学研究所	7	2	2			2	0
合計	7	2	2	0	0	2	0

福井大学基礎資料2012より

⑩ 建物分布：建物延べ床面積（㎡）



福井大学実態調査より
（平成24年度末現在）

【グラフ 各ゾーン建物面積】

①. 附属国際原子力研究所正面玄関

②. 中庭

③. 南面外観

④. 南東面外観

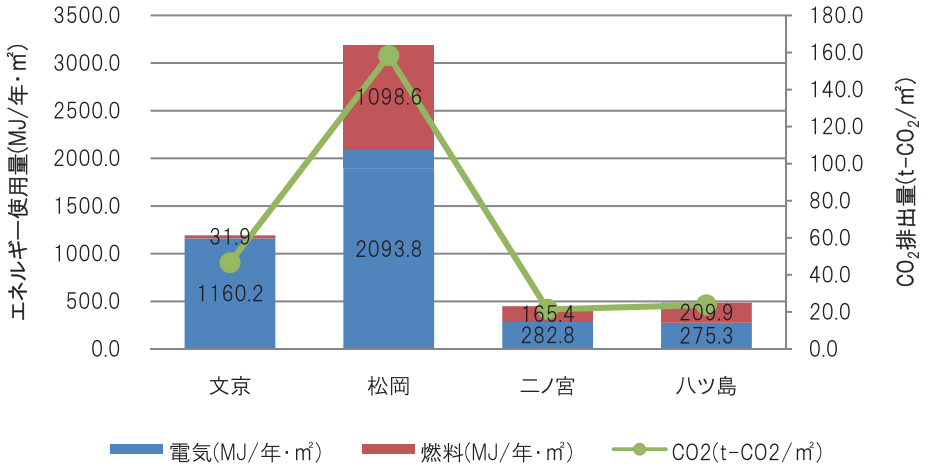
⑤. 東面外観

⑥. 北面外観

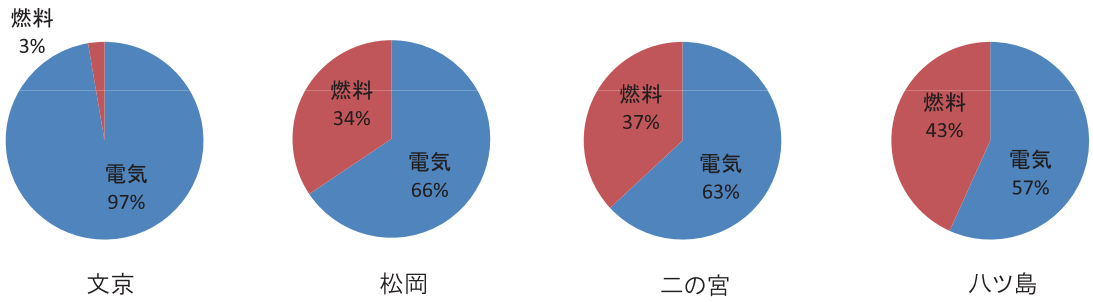
3-8. エネルギー消費量及びCO_2排出量

（1） 主要キャンパスにおけるエネルギー消費とCO_2排出量

福井大学における単位面積あたりエネルギー消費量および，CO_2排出量，電気使用と燃料使用による割合を以下に示す。



【面積当たりエネルギー使用量およびCO_2排出量】



【エネルギー使用種類の比率】

各キャンパスにおいて，エネルギーとして電力が主に使用されていることより，電力の安定供給はキャンパスの運営にとって重要な課題である。
単位面積当たりエネルギー使用量は松岡キャンパスが最も多く，次に多い文京キャンパスの2倍以上である。燃料の使用割合も多いため，CO_2排出量が文京の3倍以上と非常に多くなっている。

文京キャンパスは空調用ボイラーを廃止し，電力化することにより，エネルギーの電力割合が9割を超えている。通常時における電力の安定供給に対する検討とともに，災害避難所として，非常時における電力の供給範囲や供給能力などの検討が必要である。また，避難所としての基本的な機能に加えて，重要な研究を維持させることも必要であり，事業継続計画（BCP：Business Continuity Planning）を踏まえた検討が重要である。

松岡キャンパスは附属病院があり，常時安定した空調環境を提供する必要があることから，エネルギー使用量が必然的に多くなる。また，研究棟においても先端実験研究機器はエネルギーを多く消費するものがある。このことから，様々な手法を活用して省エネルギーを行うことが課題となる。また，燃料の効率的な利用方法も検討課題の一つである。病院として，また大学として，医療の先端的教育・研究を継続する観点から，災害時等のBCPを踏まえた検討が重要である。

二の宮キャンパスは電気式空調設備の導入に伴い，エネルギーの電力割合が6割を超えている。今後もCO_2削減のため，クリーンな電力設備の導入が考えられ，通常時の電力安定供給は重要である。また，二の宮キャンパスも文京キャンパスと同様に，災害避難所に指定されているが，非常時の研究機能維持の重要性はなく，避難所として適切な電力供給が行えることが必要である。

八ツ島キャンパスは全館において温水暖房を使用しているため，空調用の重油使用量が多い。八ツ島キャンパスとしては，福井大学のエネルギー総使用量の0.4%程度であり，割合は小さいが，今後もエネルギーの効率的な利用を検討していくことが重要である。

4. キャンパス・フレームワークプラン　～キャンパス長期ビジョン～（30年～50年後を見越したキャンパスプラン）

4―1　フレームワークプラン策定の基本方針（全キャンパス共通）

キャンパスを長期的視点から，適切に計画・利用していくために，機能別ゾーニングや土地利用，交通，緑地等の空間形成の骨格とユニバーサルデザイン，地球環境保全，QOL（Quality Of Life)向上等の基本方針を示すサスティナブルキャンパスとしてのフレームワークプランを立案する。施設は教育・研究の時代に合わせた社会的要求を適切に満足する必要があり，その要求を本学キャンパス内で効率的に実現するため，建物を個別に計画せず，キャンパス内を目的別・用途別に設定し，教育・研究効果や施設利用効率が高められる計画とする。

また，本項内では状況がわかりやすいように，イメージを挿入，一例として示している。

フレームワークプラン策定における基本方針を次のとおりとする。

（1）効率的な敷地利用計画

建物を効率的・機能的に計画するため，キャンパス内を機能に応じてゾーニングする。

建物の高層化による建て詰まりの解消，車社会である福井の特性から肥大する駐車・駐輪場の設置面積増大の解消と交通事故防止，積雪時の安全確保等のため一部立体駐車・駐輪場等を整備する。

原則として，キャンパス内部は歩車道を分離し，緑地や交流広場を増やし，キャンパスの安全・安心・利便性の向上を図り，学内構成員のQOLを向上する。

（2）グリーンキャンパス計画

緑豊かな美しいキャンパスとするため，緑地と建物の面積バランスに配慮し，キャンパス内における気候の緩和や，潤いと安らぎを醸し出す緑地，学内構成員同士や地域住民等とのコミュニケーションを図る緑地や広場，キャンパス周辺と調和を図る緑地，建物周辺にあって建物環境を改善する緑地等を適切に計画する。

（3）建物の有効利用と改築・改修計画

キャンパス空間の維持・向上を図るため，建築後50年以上が経過し，構造体が劣化し，良好な教育・研究環境の再生が困難と判断された建物はLCC及びLCCO_2の削減を勘案して改築する。学生の良好な教育環境と研究者の先進的・先端的な研究環境を創造し，その環境を維持持続する運用体制を整備する。また，その環境を活かして，多様性に富む積極的なグローバルコミュニケーションを促し，新たな知的発展を促進するとともに，安らぎにも配慮し交流を促す各種の仕掛けや広場を有する緑豊かな潤いのあるキャンパスを創造する。

（4）キャンパスデザイン計画

キャンパス全体で建物デザイン，色調，高さ，壁面線等の調和を図るとともに，キャンパス外構である広場・街路・緑地，サイン，ファニチャー，照明，駐車場，ゴミ箱等について統一したデザインを採用する等ランドスケープを考慮した美しいキャンパスデザインを行う。

また，キャンパス内の施設配置図，建物内サイン等を充実させると共に，適切な多言語併用標記とする。

（5）ユニバーサルデザイン

大学を訪れる全ての人が安全・安心に利用できるよう，キャンパスとその施設は，ユニバーサルデザインに基づいて，身障・健常者別，身体的条件，性別，年齢，国籍，宗教，知的能力，運動能力等の区別なく全ての人にとってバリアフリーとなること，多様性を受け入れることでグローバル化を目指す。また，防犯・防災，交通事故，施設・設備の安全，気象条件等にも配慮し，キャンパス内ゾーニングや利用建物の制限等を計画する。

（6）エコキャンパス計画

環境負荷の低減と省エネルギー対策を積極的に推進し、地球環境に優しいエコキャンパスを実現するため、建物の高断熱・高遮熱・高気密を図るとともに日射を制御(抑制・導入)するデザインを採用する等建物のパッシブソーラー化を図る。また，良好かつ先進的・先端的な教育・研究環境の維持持続と省エネルギーの両立，更にはエネルギーの地産地消を図るため，自然換気・外気冷房や地中熱・井水等の自然エネルギーの導入，太陽光発電・風力発電等の再生可能エネルギーの導入，高効率機器・システムの導入，排熱等の未利用エネルギーの導入，外部からのエネルギー供給状況やその料金体系，社会的要求の変化等に対応可能なシステムの導入，BEMS(Building and Energy Management System)等のエネルギー管理装置の導入を図る。これらの具体的手法や各キャンパスに適したハード対策手法及び実施したハード対策を効率的かつ有効に運用するエネルギーマネジメントの具体的手法，スマートキャンパスの実現手法等について計画する。

（7）地域コミュニティ・オン・キャンパス計画

地域の活性化，多様な発展を遂げる核としてキャンパスの価値が最大限に利用されるよう，地域社会と連携を図りやすいキャンパスを目指す。「COC(Center Of Community)構想」を推進し，大学の学び・研究の資産が見えやすく，積極的に活用されやすい，地域に根付いた知の拠点として地域住民を始め，教育・研究・医療・福祉・国際等幅広い分野の人々が訪れやすい環境を計画する。計画にあたっては開放・交流のゾーンを明確にすることや安全を確保する機器等でセキュリティを十分に配慮し，心身の安全や，良好な教育・研究環境の確保，知的財産等の保全等を図る。

（8） 施設・スペース活用計画

大学の施設・スペースは，教育・研究・医療等の用に資するスペースを中心に配置されている。しかし，各部局やセンター等の 実験・研究，教育，医療の特性等によって，施設やスペースの必要面積は異なる。更には，時間帯でみた利用頻度や同一目的の部屋が複数ある等，利用率の向上と施設・スペースの有効活用は喫緊の課題である。

一方，留学生の増加，外部資金によるプロジェクト研究，企業との産学連携研究，新たな教育施設の需要，学生の自学自習や教員等との交流スペースの不足，医療技術等の進展等により，施設・スペース面積は逼迫している状況であり，部分的に慢性的狭隘状況にある。これらの問題を解決するためには，施設の面積現況とその利用状況を常に把握（データベース化）し，スペースの流動化を図り、増加する施設需要に柔軟に対応する必要がある。これらの具体的手法について計画する。

4―2 文京キャンパス

（1） 整備の方針・考え方

・改築にあたっては，敷地（空間）の有効利用の観点から，建物の高層化を図る。
・正門から東門に通じるメインストリートは，キャンパスモールとして整備する。

（2） 効率的な敷地利用計画

ゾーニング
・学び・究めのゾーン ：教育系ゾーン，工学系ゾーン，共通教育系ゾーン
・集いのゾーン ：福利厚生ゾーン，体育ゾーン
・憩い・交流のゾーン ：図書・情報ゾーン，広場・緑地，地域交流・事務棟ゾーン
・交通ゾーン ：構内道路，駐車場，駐輪場
・共通ゾーン ：地域・共同利用ゾーン
・メインストリート及び外周道路内側は車両通行禁止（緊急車両，物品等搬入車両を除く）とし，歩行者優先歩道・広場とする。
・メインストリートは，文京キャンパスの顔として，キャンパスモール（遊歩道）を整備する。

キャンパスモールのイメージ

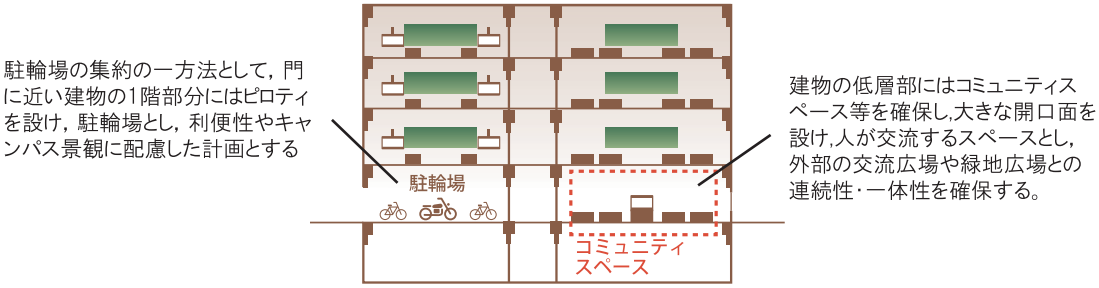
キャンパス広場のイメージ

（3） グリーンキャンパス計画

・敷地に占める緑地率は，現状の18.5%から30%以上を目指す。
・キャンパス南面の底喰川や雑木林との調和を図る。
・福井の原生種を中心に，適切な樹種，ボリューム，配置，剪定方法などを考慮し，効率的かつ維持管理費の少ない計画とする。

（4） 建物の有効利用と改築・改修計画

・残る建物 ：総合研究棟Ⅰ（13階建て）等
・改築（新築）する建物 ：昭和時代に建てた建物はすべて改築する。
・建物の高層化計画 ：「6階建て」以上を基本とする。
・新たに必要な施設，将来計画用の建物用地の確保：建物の高層化・複合化によって計画用地を確保する。
・正門周辺は地域交流ゾーンとし，アカデミーホール，事務棟を含めたスペースを核に地域に開かれたキャンパスを目指す。
・「民間と大学」・「地域と大学」が協働可能なスペースの確保を検討する。
・建物の新築・改修時には，適切な位置に共同利用スペース並びに，学生・職員の交流スペースを確保する。
・門に近い構内交通の要所の建物1階には部分的にピロティを設け駐輪場とし，キャンパス中心部への自転車の進入を防止する。
・メインストリートに面する建物1階については，交流広場等との連続性や一体性を確保し交流の機会を増やすため，コミュニティスペース等の設置や人を引きつけやすいデザイン・外装を工夫する。

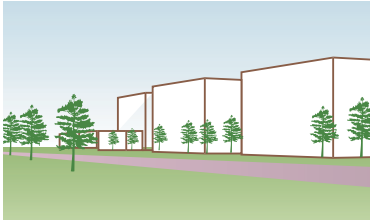


【改築・改修時計画イメージ】

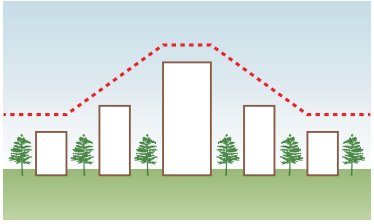
（5） キャンパスデザイン計画

・建物形態，壁面線，スカイライン，外装材，色調等調和と連続性を考慮する。ただし，図書館，福利厚生施設，交流施設等の公共性の高い建物は，人を引き込む魅力として外観の一部にアクセントとなるような形態や外装材を取り入れる。

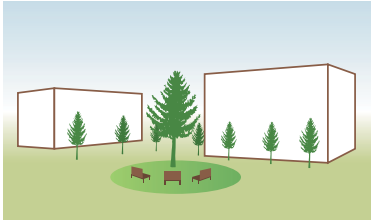
・ベンチ等のファニチャーを配置し，地域住民や教職員・学生等との交流の場として整備する。



建物形態， 壁面線， スカイライン等の調和と連続性の保持



原則的に敷地周辺部を低層から中層とし，中心部を高層エリアとすることで， 地域への圧迫感を軽減する



広場の確保及びファニチャーを設置する

（6） エコキャンパス計画

・省エネルギー，緑化，視覚的教育効果もあるグリーンカーテンの導入促進を図る。

・公用車の低炭素化，キャンパス内の通行車両に対する低炭素化活動を推進する。

・市街地中心部における自然共生スペースモデルとしてのキャンパスづくりを推進する。

・キャンパス内の移動が楽しくなるような仕掛けを工夫し，歩行移動の推進による低炭素化を推進する。

（7） 地域コミュニティ・オン・キャンパス計画

・正門周辺の集い・交流のゾーンを地域交流ゾーンとしてとらえ，公開講座等で利用しやすいよう配慮する。

・産学連携の中心となる産学官連携本部や，共通的利用の多い総合研究棟Ｉをキャンパスの中心部にとらえ，広場・交流ゾーンや図書・情報ゾーンとアクセスしやすい配置とすることで，交流を通じて産学協同を基盤とした地域産業の活性化を図る。

・学校部分と地域開放部分等の利用用途別に適したデザインを計画する。

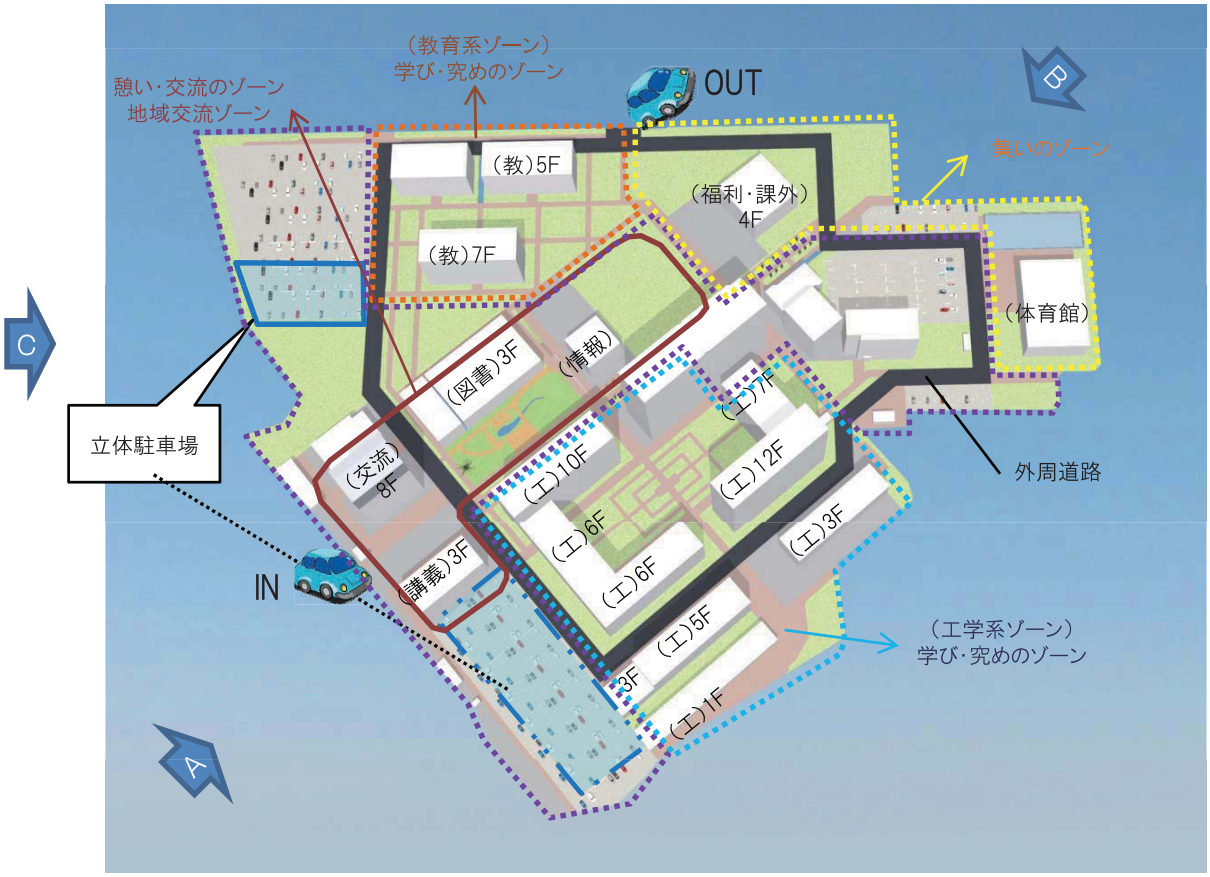
（7） フレームワークプラン図

計画の要旨

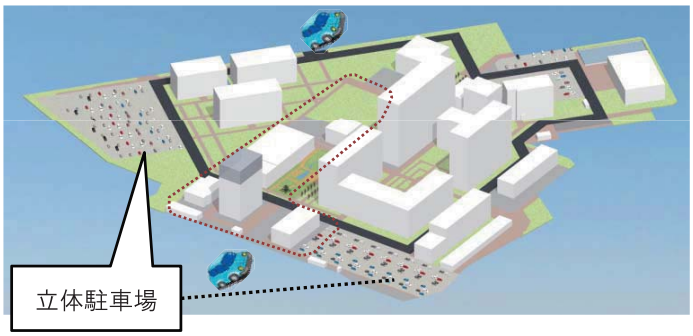
- ■ 正門から東門の中央に通じる『メインストリート』は，キャンパスモール（遊歩道）として地域や文京キャンパスの顔となるような印象的な景観を創出する。
- ■ 外周道路の配置及び駐車・駐輪場の集約化により，内部道路を車両通行禁止とし，安全・安心な環境を確保する。
- ■ 各ゾーンに緑地・交流スペースを配置し，それらに連続性を持たせる。
- ■ キャンパスのメインストリートに面した中心部分に，中央広場としてシンボル的な外部交流空間を配置する。
- ■ 正門周辺部分は，共通教育ゾーンも含め，地域開放スペース，カフェや地域交流が出来るスペース，事務棟を配置し，積極的な交流の場を提供する。
- ■ 隣地（隣家）に面した建物はなるべく低層化，中央は高層化し，地域への圧迫感を軽減する。
- ■ 車であふれるキャンパスの環境の改善，狭隘化している教育・研究環境の解消，憩いのスペース・交流スペースの確保，将来の大学の発展用地の確保等の解決策として，建物の高層化・複合化を推進し，緑地の割合を30%程度にし，緑豊かな美しい大学キャンパス環境を実現する。
- ■ 門に近い構内交通の要所の建物1階を部分的にピロティを設け駐輪場とし，キャンパス中心部への自転車の進入を防止する。

【フレームワークプラン図】

建物規模を考慮した具体例



※A方向※

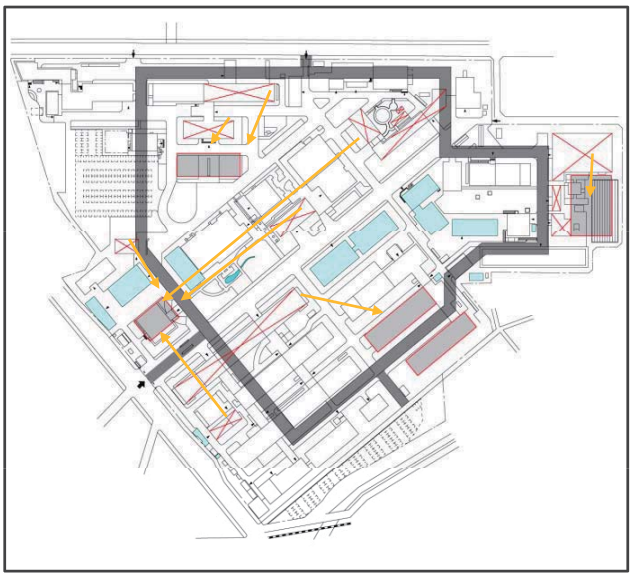


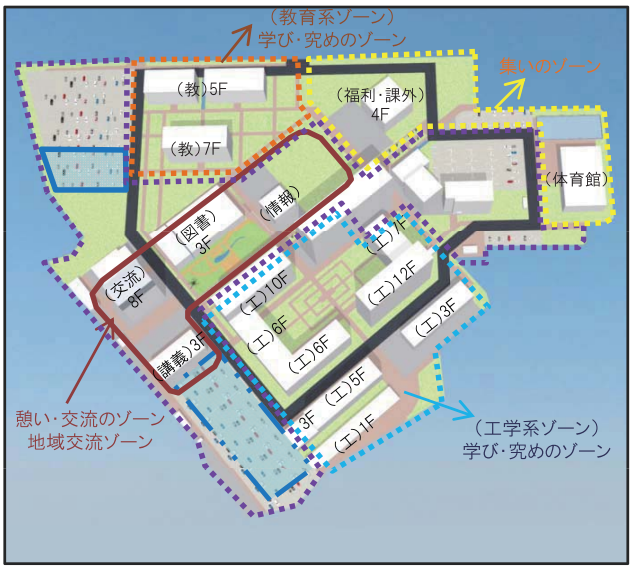
※B方向※

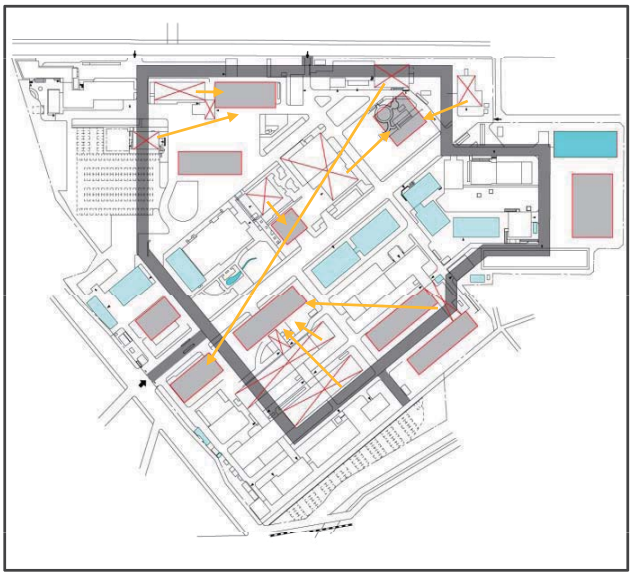
※C方向※

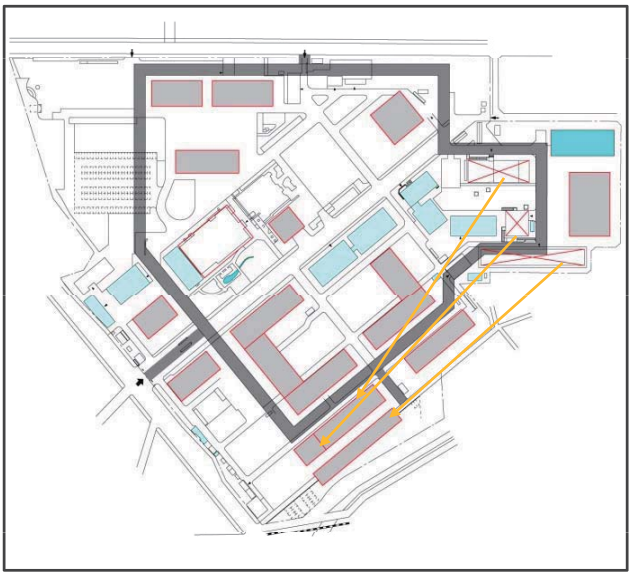
建物経年数を配慮した改築の具体例

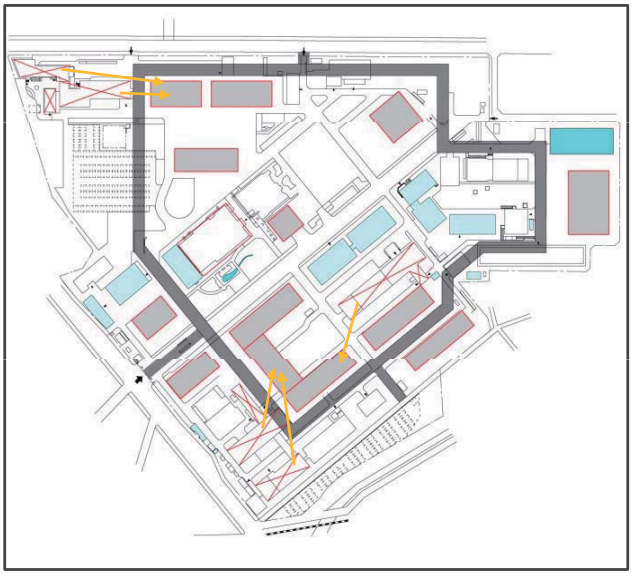
※注　ゾーンごとでの順序であり，キャンパス全体での順序を示すものでは無い

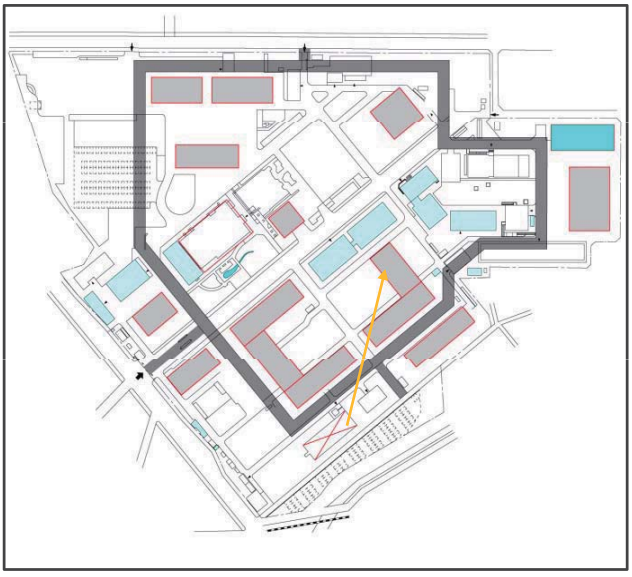












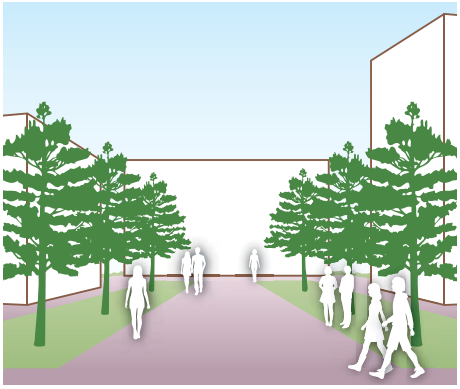
4—3 松岡キャンパス

（1） 整備の方針・考え方

・附属病院は，新病棟（H26完成）を中心に，中央診療棟・外来診療棟を全面的に改築して再編し，機能的・先進的病院に整備する。
・エネルギー供給方式を見直し，高効率なシステムに更新するとともに，エネルギーセンターの改築を計画する。
・看護師宿舎は，改築する。
・医学部は，医学科校舎を改築し，看護学科校舎は改修する。
・臨床教育研修センター・シミュレーションセンターは，病院系共同研究ゾーンに残し，改修する。
・メインストリートは，松岡キャンパスの顔として，キャンパスモール（遊歩道）を整備する。
・病院専用，教職員・学生用等の利用用途に配慮した駐車・駐輪場を効率的に配置し，整備する。
・病院用駐車場は，患者さん等の降雪・降雨時の安全を確保するために，立体駐車・駐輪場として整備し，屋内通路で病院と接続する。

（2） 効率的な敷地利用計画

ゾーニング
・学び・究めのゾーン　：医学系ゾーン（医学科，看護学科）
・療養のゾーン　：病院系ゾーン（附属病院）
・集いのゾーン　：福利厚生ゾーン，体育ゾーン
・憩い・交流のゾーン　：図書・情報ゾーン・広場・緑地
・交通ゾーン　：構内道路・駐車場（患者さん，教職員・学生），駐輪場
・共通施設　：エネルギーセンター，特高受電設備，ヘリポート
・南北軸の道路は，病院外来用，病院緊急用，医学部，医学部・一般用の4本とする。
・南北に通り抜け可能な道は，病院緊急用および，医学部・一般用の2本とする。
・メインストリートは車両通行禁止（緊急車両を除く）とする。



キャンパスモールのイメージ

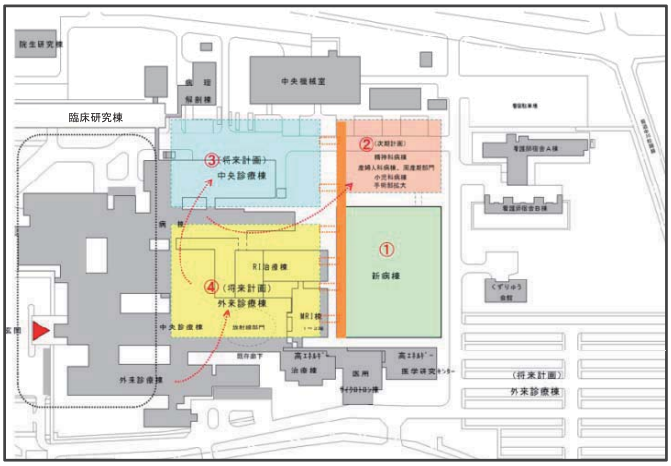
緑地広場のイメージ

（3） グリーンキャンパス計画

・敷地に占める緑地率は現状の27.3%から35%以上を目指す。
・建物高層化により生み出した建物間の空間に，ポケットパークをいくつか作り，それらを連続し緑の回廊としてキャンパスモールに接続する。
・病院患者さんがリハビリやストレス解消等の散策に利用できる緑地広場等を整備し，四季の草花等を楽しめる癒しの空間として整備する。
・福井の原生種を中心に，適切な樹種，ボリューム，配置，剪定方法などを考慮し，効率的かつ維持管理費の少ない計画をする。

（4） 建物の有効利用と改築・改修計画（附属病院再整備を含む）

・核となる建物（残す建物）：新病棟（H26完成）等
・改築（新築）する建物　　：昭和時代に建てた建物はすべて改築する。
・建物の高層化計画　　：「6階建て」以上を基本とする。
・新たに必要な施設，将来計画用の建物用地の確保：建物の高層化・複合化によって計画用地を確保する。
・附属病院の次期再開発　：北病棟，中央診療棟，外来診療棟を新築する。



①新病棟新営

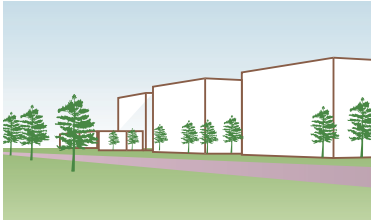
②次期病棟他新営

③中央診療棟新営

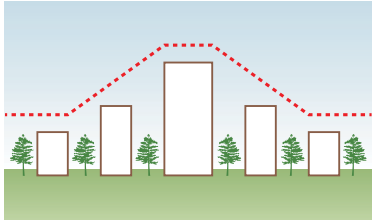
④外来診療棟新営

（5） キャンパスデザイン計画

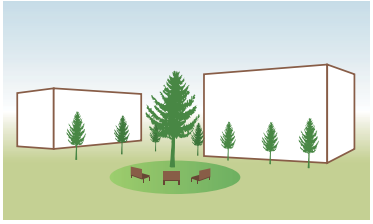
・新病棟を核として，建物形態，壁面線，スカイライン，外装材，色調等調和と連続性を考慮する。ただし，図書館，福利厚生施設，交流施設等の公共性の高い建物は，人を引き込む魅力として，外観の一部にアクセントとなるような形態や外装材を取り入れる。
・ベンチ等のファニチャーを配置し，地域住民や教職員・学生等との交流の場として整備する。
・大学の顔となるシンボルを整備し，イメージアップを図る



建物形態，壁面線，スカイライン等の調和と連続性の保持



原則的に敷地周辺部を低層から中層とし，中心部を高層エリアとすることで，地域への圧迫感を軽減する



広場の確保及びファニチャーを設置する

（6） エコキャンパス計画

・省エネルギー，緑化，視覚的教育効果もあるグリーンカーテンの導入促進を図る。
・公用車の低炭素化，キャンパス内の通行車両に対する低炭素化活動を推進する。
・キャンパス内の移動が楽しくなるような仕掛けを工夫し，歩行移動の推進による低炭素化を推進する。
・患者さんのように，一般市民が最も多く出入りするキャンパスとして，エネルギーの節減と利用者満足度をバランスさせるモデル的役割を担っていく。

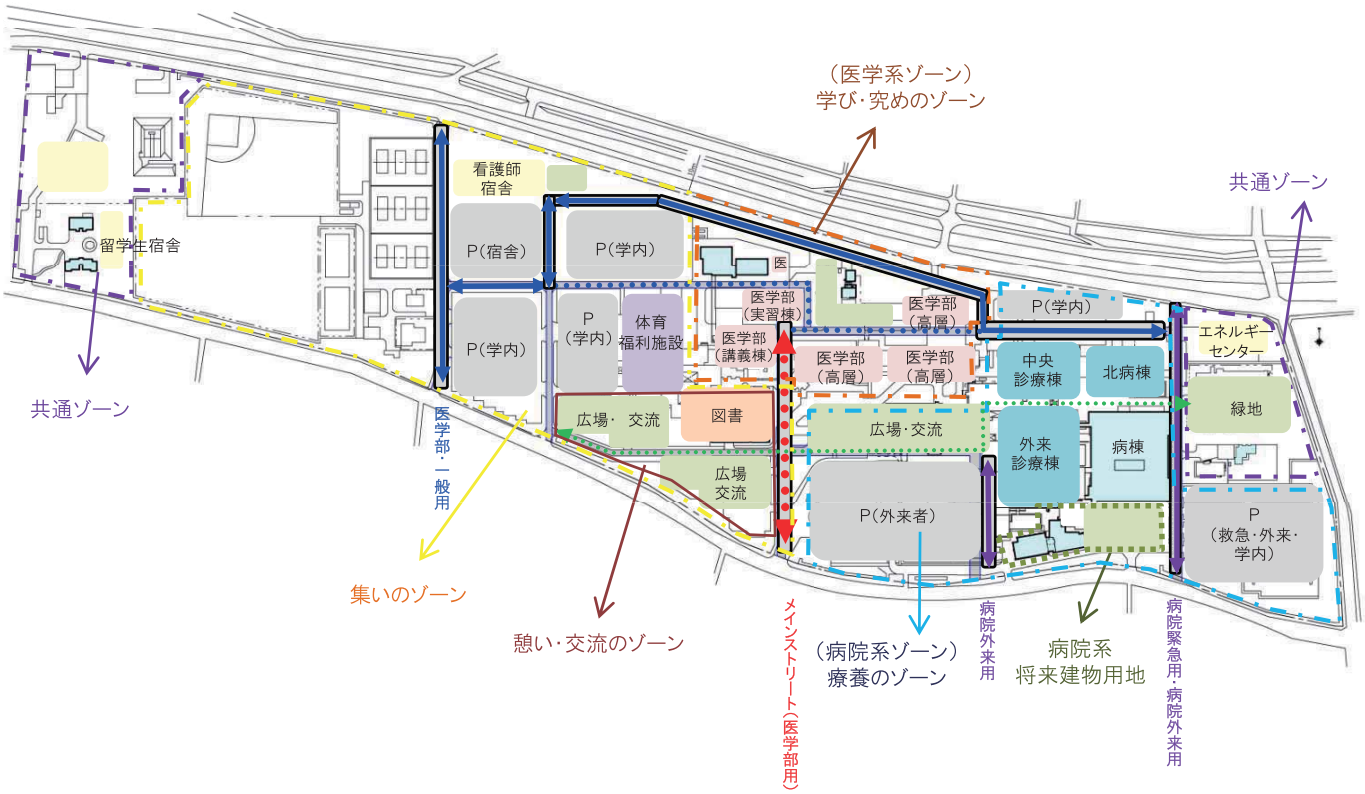
（7） 地域コミュニティ・オン・キャンパス計画

・患者さんが安心して利用でき，地域住民が気軽に立ち寄れることで人のつながりを感じられる計画とする。
・シミュレーションセンター等を有する病院系共同ゾーンを駐車場と隣接して計画し，外部利用者のアクセスしやすい環境を計画する。
・広場・緑地ゾーンを外部から歩道等で安全にアクセスしやすい計画とし，地域の利用者にとって，学生の活気が感じられ，明るくやさしさにあふれたキャンパスとなるように計画する。
・災害発生時には救命救急医療の拠点としての役割を担える計画とする。

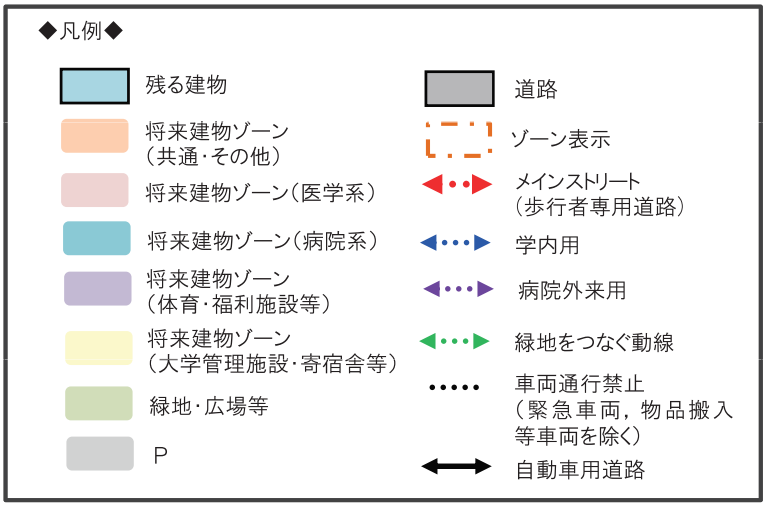
（8） フレームワークプラン図

計画の要旨

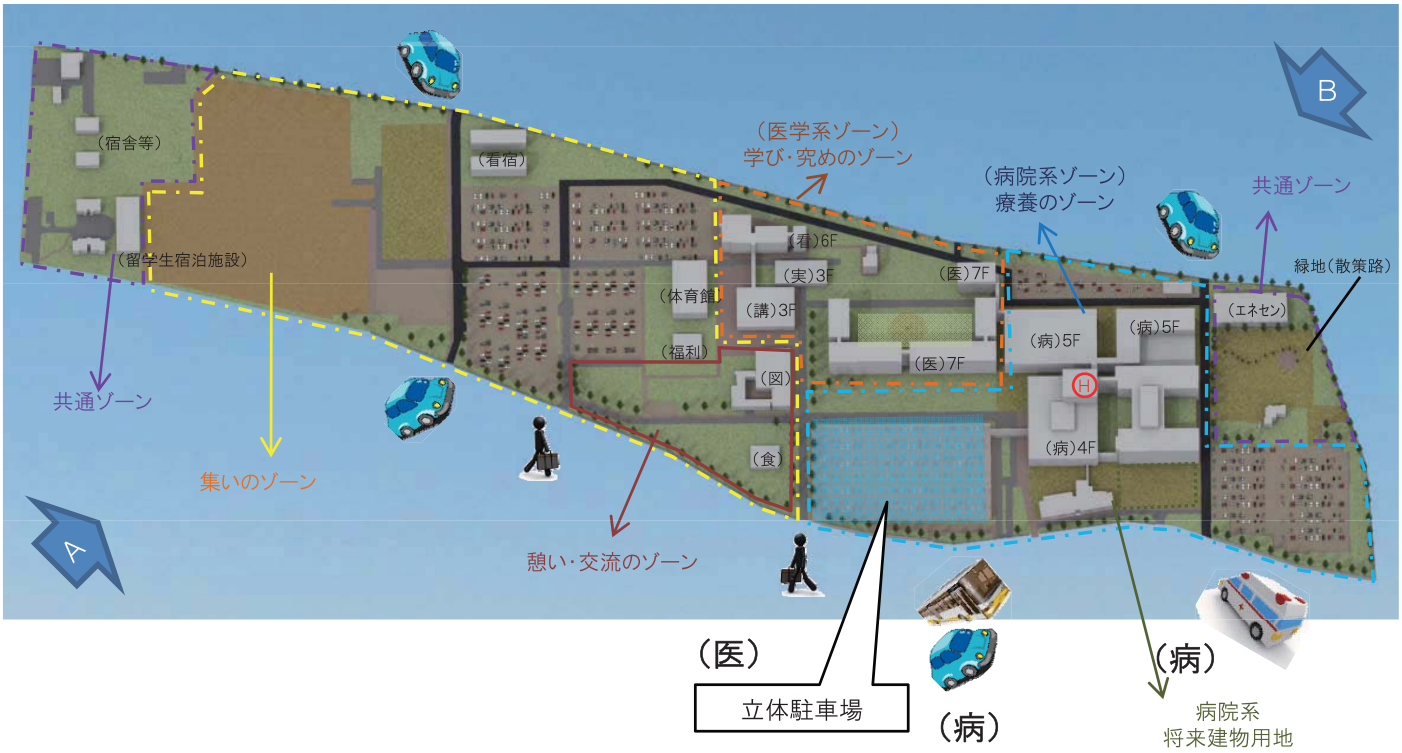
■自動車の出入口を限定し，歩車道分離により，安全･安心な環境とする。
■『メインストリート』は，松岡キャンパスの顔となるよう，歩行者専用キャンパスモールとして計画する。また，アイストップとなるような建物配置を検討し，建物ファサードには十分配慮する。
■附属病院は，H26年完成の病棟を中心に，北病棟･中央診療棟･外来診療棟を利便性と省エネルギー性を勘案し高層とし，コンパクトに計画する。
■医学部と附属病院は，近接する位置に計画する。
■患者さんの療養等のために緑地･広場を計画する。
■降雪･降雨時の患者さん等の安全確保を図るために，立体駐車駐輪場を整備し，屋内通路で病院側との接続を計画する。
■車であふれるキャンパス環境の改善，狭隘化している教育･研究･医療環境の解消，憩いスペース･交流スペースの確保，将来の大学の発展用地の確保等の解決策として，建物の高層化･複合化を推進すると共に，緑地の割合を上げ，緑豊かな大学本来の美しいキャンパス環境を計画する。



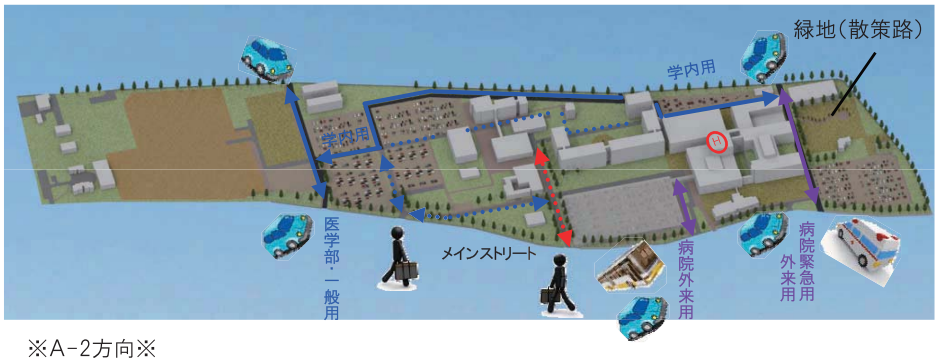
【フレームワークプラン図】



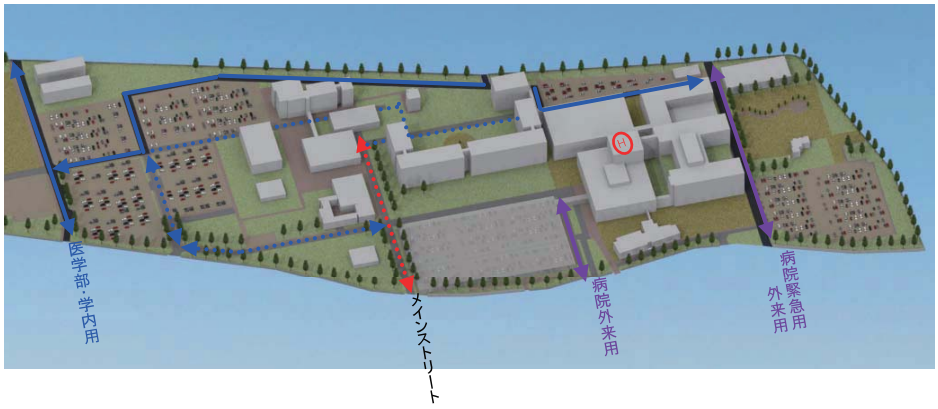
建物規模を考慮した具体例



※A-1方向※



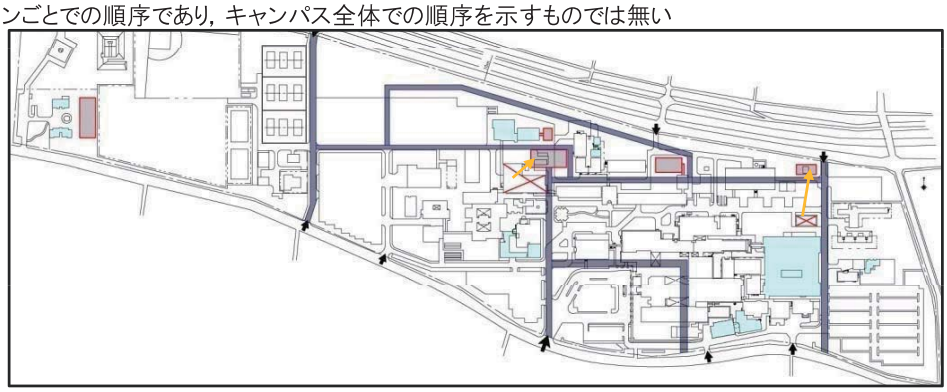
※A-2方向※

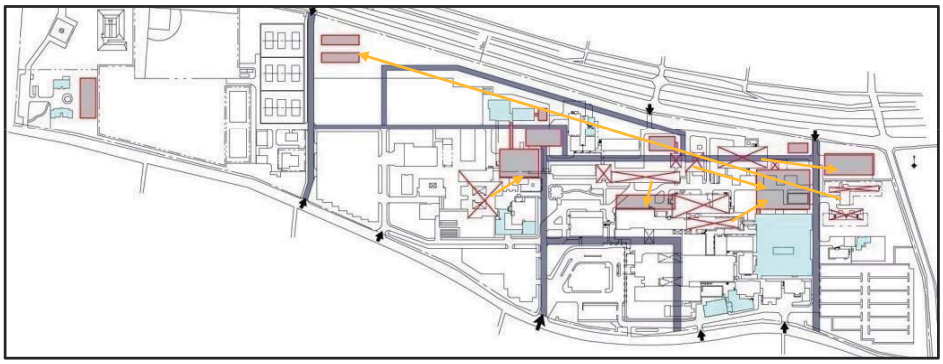


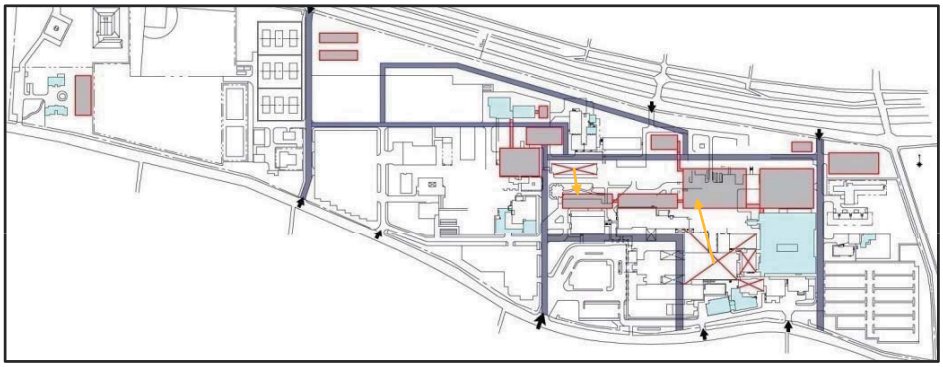
※B方向※

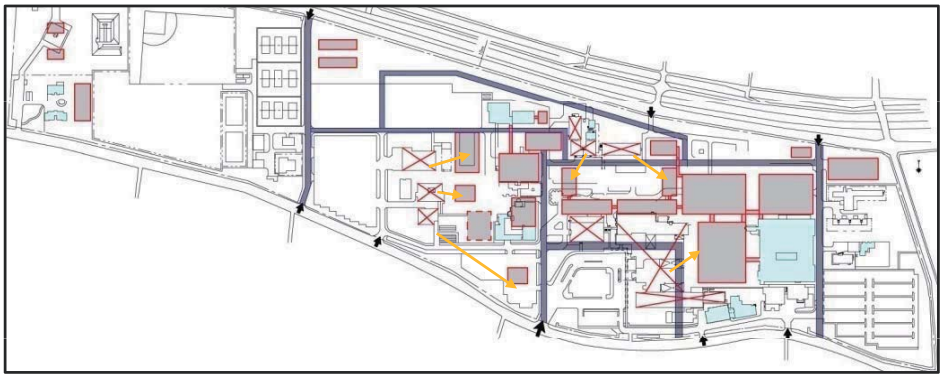
建物経年数を配慮した改築の具体例

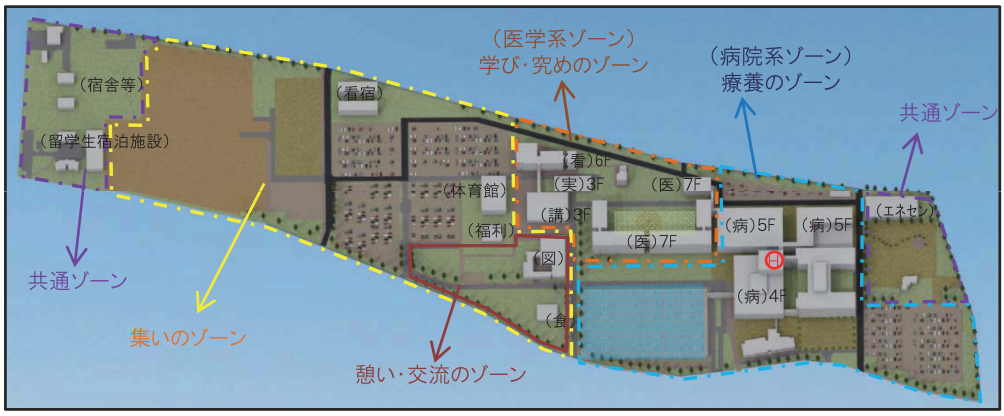
※注　ゾーンごとでの順序であり，キャンパス全体での順序を示すものでは無い











4－4　二の宮キャンパス（附属幼稚園・小学校・中学校）

（1）整備の方針・考え方

教育（子ども）

安全安心な環境の中で，自主的に学べ，協同の下にコミュニティが生まれる施設環境の整備

幼児・児童・生徒の心身の健康に配慮し，キャンパス内での活動における十分な安全性を備え，防災面や防犯面においても十分な安心感のある施設環境を整備する。

幼児・児童・生徒の一人一人が，自主的に学ぶことができ，異年齢・異学年交流をはじめとした他者との協同によって豊かな人間性を育成することができるよう，快適な生活の場・居場所となる施設環境を整備する。

また，グローバル化社会の時代にあり，高度情報通信化により周囲に様々な情報があふれる中から，子どもたちが適切な方法で知識の基盤となる情報を入手でき，異なる他者との協同において多様な表現方法や伝達手段を用いて，新しい価値を創発していくことのできる施設環境を整備する。

教育（学生・教師）

学び続ける教員を支えていく機能的な施設環境の整備

大学の附属学校としての使命である教師教育に対する社会的要求に応えていくため，教育実習生や現職教員を始めとした教員すべてが日常的に，これまで培われたノウハウを基盤とした実践的指導力を高めることのできる活動基地となる施設環境を整備する。

また，日常的な教員間の連携や，教員と実習生との実践を通じた交流においては，多様なコミュニケーション形態に対応できる環境とし，必要となる教育に関する情報を円滑に入手できるように配慮するとともに，教員や実習生へのサポートが継続的に行える施設環境を整備する。

教育研究

世代をつなぎ，地域と連携した教育を創造する，社会的な施設環境の整備

大学と附属学校が緊密な連携を取りながら，幼児・児童・生徒が学校や家庭で直面する教育的問題を的確にとらえ，教育に関する研究成果として地域の公立学校等に還元されるよう，大学との緊密な連携を維持しやすい施設環境を整備する。

幼稚園，小学校，中学校のそれぞれにおいてこれまで培われた学びの資産を互いが高めあうため共有でき，実社会と有機的に繋がり合い，子どもたちと教員それぞれの探究が次世代への実践的な研究に発展できるよう，想定される教育内容・教育方法の多様な変化に応じて柔軟に対応できる施設環境を整備する。

地域貢献

生涯学習を支え，地域における文化のシンボルとして誇れる施設環境の整備

大学と附属学校が連携し，地域における多様な人たちの生涯学習の場として，附属学校の豊かな文化を基盤とした高度な文化的内容を提供できるよう，ユニバーサルデザインを採用した施設環境を整備する。

また，他の公立学校や地域住民と連携することによる教育のセンター的役割を果たすことで，福井における教育文化の拠点として活用できる施設環境を整備する。

（2）効率的な敷地利用計画

ゾーニング

・学び・発達のゾーン：幼稚園，小学校，中学校の校舎で幼児・児童・生徒が主に利用する部分
・管理のゾーン：教員や職員が主に利用する部分
・学び・憩いのゾーン：緑地，屋外活動部分
・交通ゾーン　：構内進入道路，駐車場，駐輪場
・交通計画　：駐車場がまとまって確保できるように整備を進め，歩車道分離を計画する。
・歩道計画　：児童・生徒が安全な通学環境となるように歩道の設置に配慮する。

（3） グリーンキャンパス計画

・四季を通じて教材活用が十分に図れる計画とする。また，福井の原生種を中心に，適切な配置，樹種，ボリューム，剪定方法等を考慮し，町並みの形成に貢献できる植栽を計画する。

（4） 建物の有効利用と改築・改修計画

・残る建物　：小学校校舎，小学校体育館
・階層の計画　：幼児・児童・生徒が適切に利用できるよう，なるべく高層化を行わず，4階程度までとする。
・教育方針に沿った建物の整備を前提とする。
・既存建物の有効利用を基本とし，教育方針により増改築整備を行う。
・教育効果の高い施設となるよう，教材としての活用効果に配慮する。
・利用者の健康が維持されるように採光，通風，換気等に配慮する。
・児童・生徒が高度情報通信ネットワーク社会において生きる力を身に付けることのできる学校環境作りに配慮する。
・福井の気候特性を鑑みた活動環境に配慮する。
・屋内運動施設においては，十分な通風，換気および自然採光と適切な室温を確保し，附属施設についてもこれらに十分に配慮する。また，災害時の避難施設としての機能も確保する。
・幼児・児童・生徒の安全を確保するため，セキュリティに十分に配慮する。

（5） キャンパスデザイン計画

・幼児・児童・生徒の発育に寄与できることを心がけ，キャンパス全体で建物の調和のあるデザイン・色調，サイン等を計画する。
・各校舎の外観は，発達の段階に応じて知的好奇心を与え，キャンパスのシンボルとして愛着がわき，美観を保つデザインを計画する。

（6） エコキャンパス計画

・視覚的効果および教育材料の一環としてグリーンカーテンの取組みを推進する。
・太陽光発電や，風力発電等の再生可能エネルギーを省エネルギーのみならず，教育材料として利用可能な計画とする。
・教育的効果の高い取組みを優先的に整備し，全国の幼小中学校におけるエコモデルキャンパスを目指す。
・日常生活におけるエネルギー使用量やCO_2排出量の「見える化」を推進し，幼児・児童・生徒・職員等の省エネルギー意識を高め，低炭素化教育が可能となる整備を行う。

（7） 地域コミュニティ・オン・キャンパス計画

・幼児・児童・生徒の発育の状態に合わせたサイズ，サイン等に特に配慮し，学校（教育利用）部分と地域開放部分等の利用用途別に適したデザインを計画する。
・利用対象者に応じて利用可能なゾーンを明確に分け，扉等によって非開放部分のセキュリティを確保できるよう計画する。
・地域開放部分は正門や駐車場等，外部からアクセスしやすいようにゾーニングし，外部利用者が落ち着いて利用できるよう，休憩所や便所，更衣室等の利用者アメニティを適切に計画する。

（8） 施設・スペース活用計画

・スペースの弾力的利用が可能となるように適切な間仕切り計画とする。
・幼稚園・小学校・中学校で共同利用できるスペースは集約し，効率化を図る。

（9） フレームワークプラン図

計画の要旨

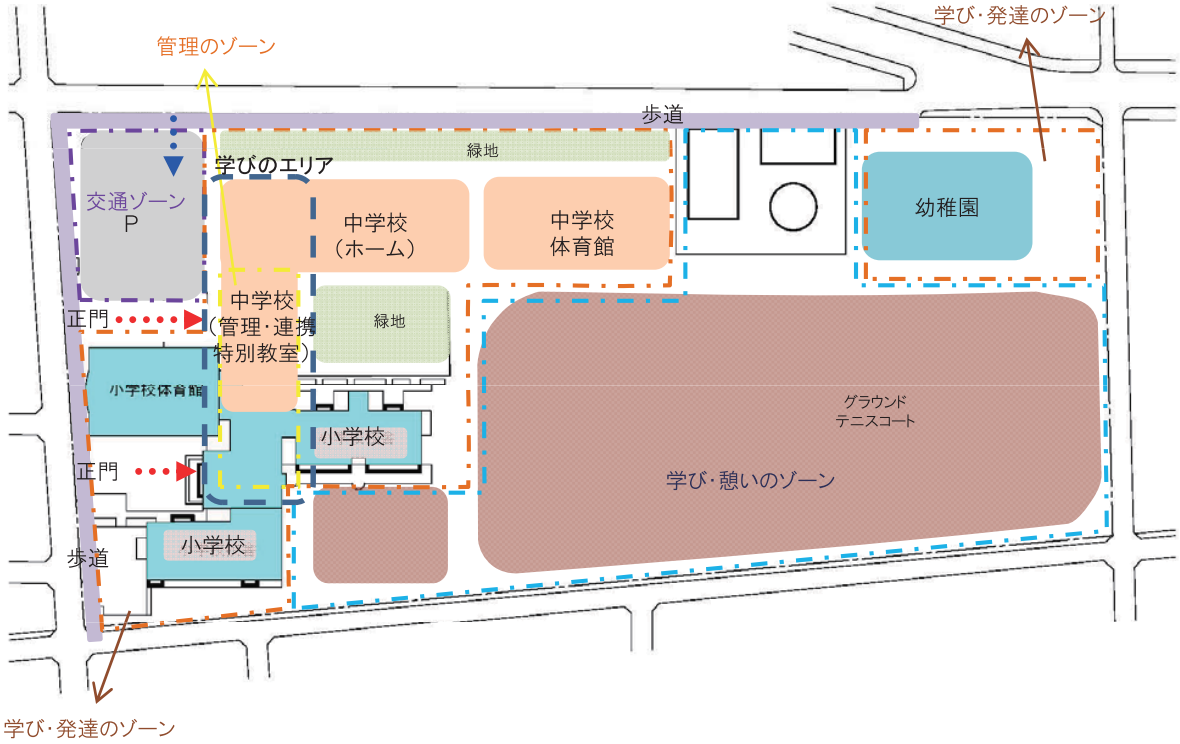
■大学と附属学校の緊密な連携を強化し，教育に関する研究のフィールドとしての活用が図りやすいように管理のゾーンに職員室や教生控室，大学職員連携室等を機能的に集約し，キャンパスの核を形成する計画とする。

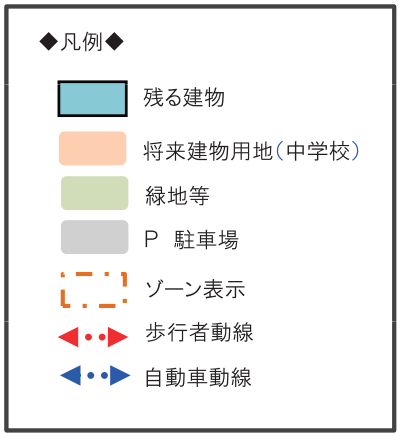
■学びのエリアを設定・構築する。学びのエリアには特別教室や多目的スペースを重点的に配置し，県内に誇る中学校の豊かな学びの資産をキャンパスを利用する子どもたちを始め，教員，地域の訪問者等，来学者全員が共有でき，これまで培われてきた教育のノウハウを活用しやすい計画とする。

■改築する中学校校舎は，改築を予定している中学校体育館や新校舎計画地，また，小学校校舎に対して機能的な接続ができるように，フレキシビリティを十分に持たせ，二の宮キャンパスのハブ機能となるように配慮する。

■平成5年に建築された小学校はオープンスペースで構成されており，スペースの見直しや再配分を行いやすい間取りであることから，校舎躯体は有効活用し，内装や機能改修で対応する。

■幼稚園園舎については当面，現状計画とするが，今後の幼保一元化のあり方や，小中連携に関する検討等，幼児教育のあり方の動向を見極めながら教育内容・教育方法の研究に適した配置を検討する。





4－5 ハツ島キャンパス（附属特別支援学校）

（1） 整備の方針・考え方

教育（子ども・家庭）

安心安全な環境の下で，集団の中で個を育て，経験を通して生活力をはぐくむ施設環境の整備

児童・生徒一人一人の心身の健康および障害の状態に配慮し，キャンパス内での活動における十分な安全性を備え，防災面や防犯面においても十分な安心感のある施設環境を整備する。

異年齢・異学年交流をはじめとした他者との協同や，実生活に即した経験を通じて自分らしさを育成しながら生きる力を養い，自立に向けた生活教育の場として，快適な学びの場となる施設環境を整備する。

また，家庭と学校の緊密な連携が図れ，教育活動を円滑に展開しやすい施設環境を整備する。

教育（学生・教師）

学び続ける教員を支えていく機能的な施設環境の整備

大学の附属学校としての使命である教師教育に関する社会的要求に応えていくため，教育実習生や現職教員を始めとした教員と医療・福祉・労働等関連領域の専門職員すべてが継続的に，これまで培われたノウハウを活用し，連携しながら学ぶことのできる活動拠点となる施設環境を整備する。

また，想定される教育内容・教育方法の多様な変化に応じて，柔軟に対応できる高機能かつ多機能な教育環境を長期にわたり確保するとともに，特別支援教育に関する情報提供・入手が円滑にできる施設環境を整備する。

教育研究

生活教育を基盤とした特別支援教育推進のための，「生活」と「学習」が一体となれる施設環境の整備

児童・生徒が自分らしく生きる学びを創造していけるよう，学校や家庭で直面する教育的問題を迅速かつ的確にとらえ，また，特別支援教育に関する研究成果として地域の公立学校等に還元されるよう，大学との緊密な連携を維持しやすい施設環境を整備する。

子どもたち一人一人が「あそび・くらし・仕事」を中心とした多様な学びを通じ，生きる力を培うことができ，異年齢・異能力構成による縦割り集団活動を通じて児童・生徒の自主性及び年下の子を思いやる力やコミュニケーション力をはぐくめる等，学校における社会的体験を通した特別支援教育のあり方を継続的検討・推進していけるよう，日常および社会における活動要素をありのままに取り込むことのできる施設環境を整備する。

当事者および地域に資する特別支援教育の発展のため，子どもたちや保護者，教員および地域の協力者等においてはそれぞれの意思が尊重され，権利が保障されるよう，適切な連携関係が構築しやすい施設環境を整備する。

地域連携

地域に開かれた，インクルージョン教育の拠点となる施設環境の整備

附属学校の豊かな文化を基盤とし，特別支援教育に関する地域住民の理解を深め，福井県における特別支援教育の中核校としてまた，地域における教育・医療・福祉・労働の関係者やボランティア等の生涯教育・学習の場としての活用が図れるように，ユニバーサルデザインを採用した施設環境を整備する。

また，スペシャルニーズを持つ人のキャリア教育や社会活動を支援するために，多様な人たちとの交流機会にあふれ，人間関係が形成しやすく，他の公立学校や福祉機関等と連携を図りやすい施設環境を整備する。

（2） 効率的な敷地利用計画

ゾーニング

- ・学び・発達のゾーン　：小学部，中学部，高等部で生徒が主に利用する部分
- ・管理のゾーン　：教員や職員が主に利用する部分
- ・学び・憩いのゾーン　：緑地，屋外活動部分
- ・社会へのつながりのゾーン　：職業棟，（仮称）地域交流棟
- ・交通ゾーン　：構内進入路，駐車場，駐輪場
- ・交通計画　：駐車場がまとまって確保できるように整備を進め，歩車道分離を計画する。特に，他の社会福祉機関との連携が図りやすい計画とする。
- ・歩道計画　：児童・生徒が安全な通学環境となるように歩道の設置に配慮する。

（3） グリーンキャンパス計画

・「ふようのもり」を生かした計画とする。
四季を通じて教材活用が十分に図れる計画とする。また，福井の原生種を中心に，適切な配置，樹種，ボリューム，剪定方法などを考慮し，町並みの形成に貢献できる植栽ガイドラインを計画する。

（4） 建物の有効利用と改築・改修計画

・シンボル：壁画「平和の楽園」を適切に維持する。
・残る建物 ：（仮称）地域連携棟
・改築（新築）する建物 ：増築する（仮称）地域連携棟以外の建物。
・階層の計画 ：児童・生徒が適切に利用できるよう，なるべく高層化は行わず，2階程度とする。
・教育方針に沿った建物の整備を前提とする。
・既存建物の有効利用を基本とし，教育方針により増改築整備を行う。
・教育効果の高い施設となるよう，教材としての活用効果に配慮する。
・利用者の健康が維持されるように採光，通風，換気等に配慮する。
・児童・生徒が高度情報通信ネットワーク社会において生きる力を育てる学校環境作りに配慮する。
・気候特性に配慮した，活動機能を維持できる施設環境に配慮する。
・屋内運動施設・附属施設においては，十分な通風，換気および自然採光と適切な室温を確保する。
・児童・生徒の安全が確保されるようにセキュリティに配慮する。

（5） キャンパスデザイン計画

・子どもの落ち着きを得られやすい色調を基本とし，教育・実習が行いやすい計画とする。

（6） エコキャンパス計画

・視覚的効果および教育材料の一環としてグリーンカーテンの取組みを推進する。
・太陽光発電や，風力発電等の再生可能エネルギーを省エネルギーのみならず，教育材料として利用可能な計画とする。
・教育的効果の高い取組みを優先的に整備し，全国モデルとなる教育環境を整備する。
・日常生活におけるエネルギー使用量やCO_2排出量の「見える化」を推進し，幼児・児童・生徒・職員等の省エネルギー意識を高め，低炭素化教育が可能となる整備を行う。

（7） 地域コミュニティ・オン・キャンパス計画

・子どもたちの発育の状態に合わせたサイズ，サイン等に特に配慮し，学校（教育利用）部分と地域開放部分等の利用用途別に適したデザインを計画する。
・地域開放部分は正門等，外部からアクセスしやすいようにゾーニングし，外部利用者が落ち着いて利用できるよう，休憩所や便所等のアメニティを適切に計画する。
・陶芸や版画等の技術を通じた交流においては，外部利用者が安全に利用できるよう，多人数の利用を想定した制作機器のレイアウトに配慮したスペースを計画する。

（8） 施設・スペース活用計画

・スペースの弾力的利用が可能となるように適切な間仕切り計画とする。

（9） フレームワークプラン図

①横動線による活動の連続性を重視する考え方

計画の要旨

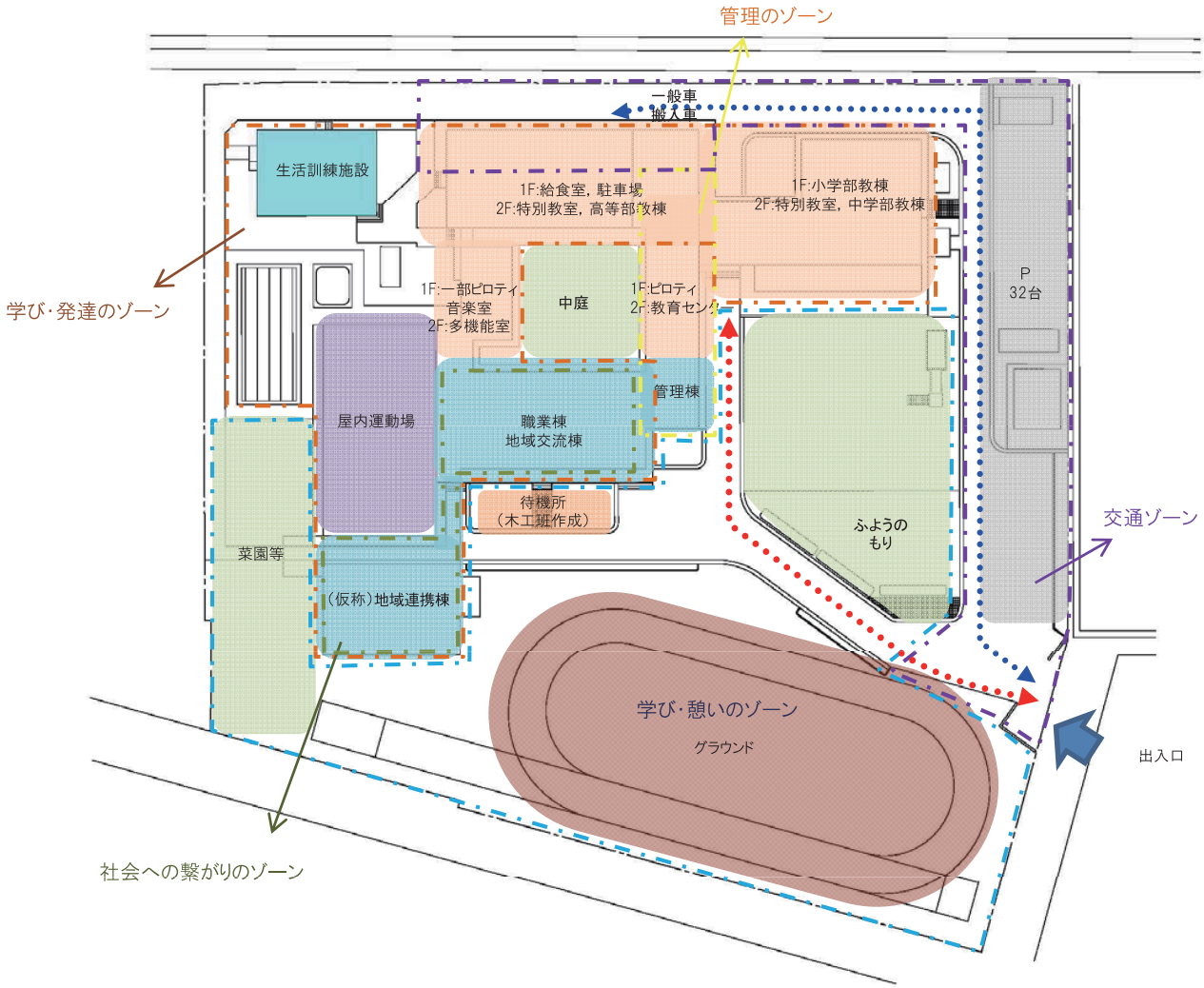
■ハザードマップにより浸水が1～2メートルであるので，特別支援が必要な生徒･児童の安全確保を優先に考え，2階部分にできるだけ居住スペースを確保する。

■中庭と「ふようのもり」を連続的に接続することで屋外活動ゾーンを拡大する。

■職業棟，地域連携ゾーンを正門からアクセスしやすい場所とし，地域に対する特別支援センター機能を強化する。

■教室は全て北側の良好な眺望を取り込み，生徒の落ち着きが得られやすい配置とする。

■シンボルである「平和の楽園」の壁画がある建物は適切に維持する。



◆凡例◆

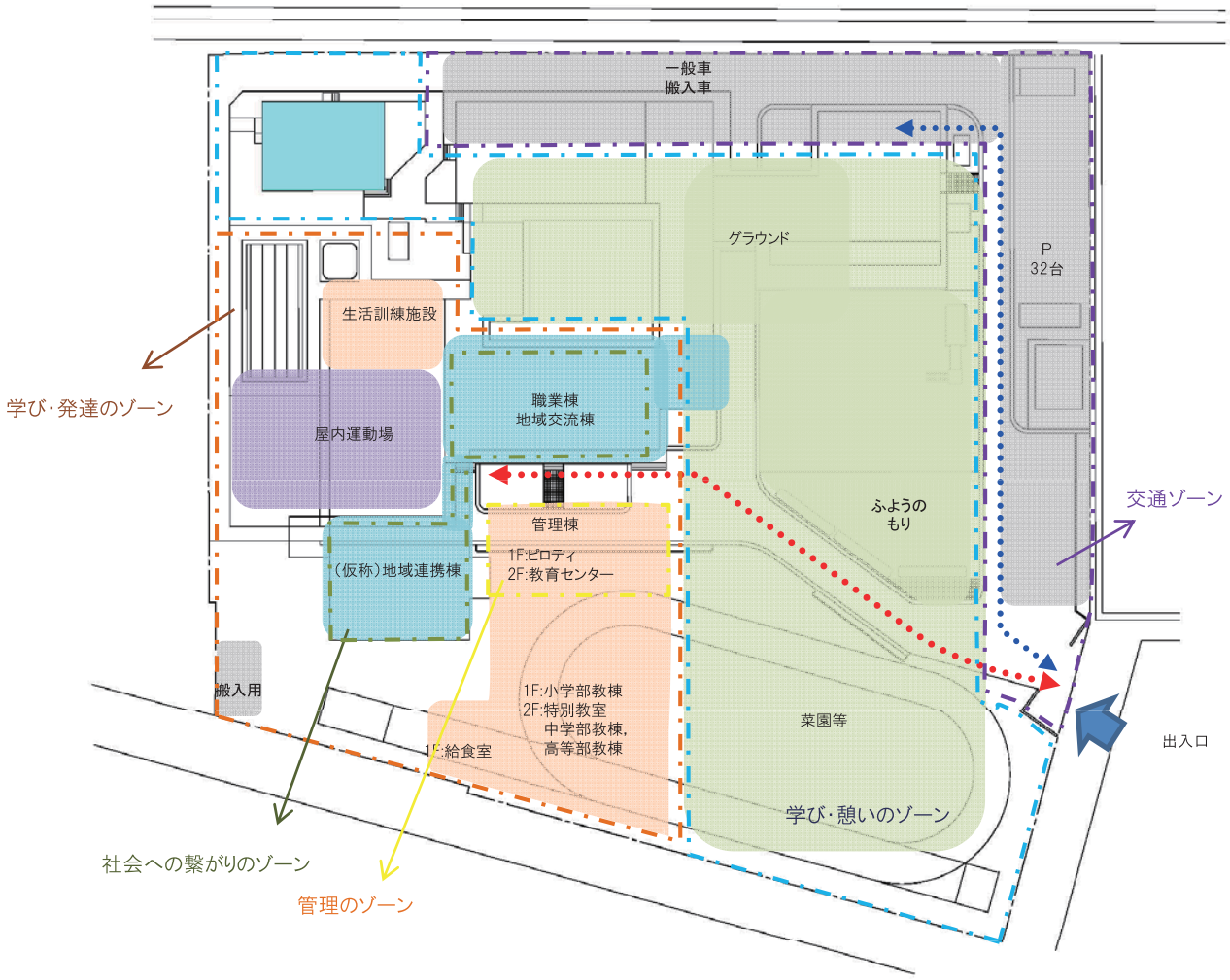
- 残る建物
- 将来建物用地
- 緑地等
- P 駐車場
- ゾーン表示
- 歩行者動線
- 自動車動線

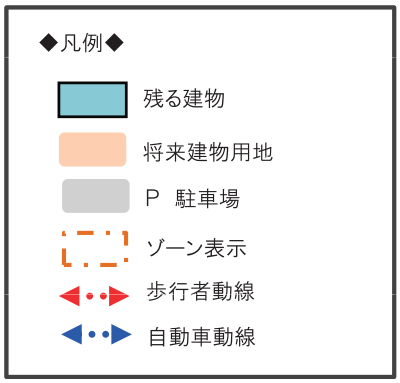
フレームワークプラン図

②屋外との有機的つながりに重点をおき，開放感や居住性を重視する考え方

計画の要旨

■歩者分離を優先的に考え，北側に駐車場をまとめて配置する。
■中庭と「ふようのもり」を連続的に接続することで屋外活動ゾーンを拡大する。
■職業棟，地域連携ゾーンを正門からアクセスしやすい場所とし，地域に対する特別支援センター機能を強化する。
■教室は全て南側の良好な環境を取り込み，生徒の落ち着きが得られやすい配置とする。
■シンボルである「平和の楽園」の壁画がある建物は適切に維持する。





5. キャンパス・アクションプラン　～キャンパス中期計画～（フレームワークプランに基づく今後6～12年後までの改修・改築計画等）

5－1　アクションプラン策定の基本方針（全キャンパス共通）

フレームワークプランで計画する，社会に開かれ，個性輝くサスティナブルキャンパスの実現を目指し，具体的な中期整備計画としてアクションプランを立案する。中期計画期間やキャンパスマスタープラン更新に配慮した6年間でステージ構成を行い，中期的視野から，平成25年～平成30年を「1stステージ」，平成31年～平成36年を「2ndステージ」として2期で計画する。

社会情勢によって，フレームワークプランやアクションプランで例示していない建物を計画する必要が出てくることも考えられるが，それぞれのプランで示す基本方針に十分配慮し，将来的に十分活用できる施設となるように検討を行う。また，整備を行った施設等については，具体的に教育・研究活動や地域社会等にどのような効果を与えているか検証を行い，次期アクションプランにおける整備効果向上に繋げていく。

アクションプラン策定の基本方針を次のとおりとする。

（1）施設整備計画

・耐震性能が十分でない建物を優先的に改修し，併せて最新の機能等を付加し再生させる。
・築後30年が経過し老朽化した建物・設備は，計画的に機能改修を行い，最新の機能等を付加し再生させる。
・狭隘が進み教育・研究等に支障が生じることが危惧され，新たな活動等さらなる発展のためにスペースが必要となる場合は，建物の新築・増築整備を計画する。
・学習，研究，就職，国家試験対応，課外活動等を通して，学生が充実したキャンパスライフを送るのに最適な環境となるようキャンパスアメニティの保全と向上につながる整備を行う。

（2）環境整備計画

・キャンパス動線，歩道・車道，駐車・駐輪場，広場・緑地等の環境整備を行い，学内構成員のQOLの向上を図る。
・キャンパス利用者の利用動線に配慮し，安全な歩行環境を整備する。
・フレームワークプランにおける交流ゾーンの緑化を優先的に行い，長期的視点で学生や職員，地域のコミュニティ拠点を整備する。
・散策の場・憩いの場となる見通しが良く，明るい緑地を整備する。
・建物整備進行状況に合わせ，利便性の高い駐車場を順序良く整備する。

（3）エコキャンパス計画

・環境負荷の低減と省エネルギー・省CO2・省コストを積極的に推進する。
・自然エネルギーや再生可能エネルギーを導入し、エネルギーの地産地消を促進する。

5—2　文京キャンパス

（1）整備の方針・考え方

・文京キャンパスは，福井大学の本部，教育地域科学部，工学部があり，今後ともこの位置づけで既存の学部・研究科・センター等を中心に，将来にわたって発展することが可能となるようキャンパスの整備を進める。

（2）施設整備計画

■新築すべき建物
- 事務棟 ・教師教育協働改革センター
- 第一体育館・第二体育館
- 総合研究棟
- 留学生宿泊施設

■改修すべき建物
- 総合研究棟Ⅳ-2（工学系講義室棟）・総合研究棟Ⅷ（工学系4号館）

■解体すべき建物
- 耐震性能が不足している教育地域科学部2号館を解体し，跡地は当面の間，駐車場・駐輪場として整備する。

■既存施設の有効活用
- 総合研究棟Ⅰの11階，12階と総合研究棟Ⅷ（工学系4号館）の一部を入替えることにより，高層ビルでは使い難い実験装置を有効に活用する。

■電気設備

・ 文京団地で使用するエネルギーの97%が電力であるため，電力の安定供給は最重要課題である。電力消費に対するウェイトが大きくなってきているため，各変電施設の状況を定期的に点検し，適切な維持管理を継続する。
・ 事務棟及び総合研究棟Ⅷ（工学系4号館）は高圧配電設備が老朽化しているため，建物の改築・改修に合わせ更新する。
・ 2ndステージでは主受変電設備，総合研究棟Ⅲ（工学部1号館）高圧配電盤，総合研究棟の高圧配電設備等，電力負担が大きい設備が更新時期を迎えるため，更新計画を立案する。
・ 建物の改修・改築にあたってはLED等の高効率照明器具を採用し，初期照度補正等の適切な制御方法を組み合わせることで省エネルギー化を図る。

■空調設備

・ ボイラーによる暖房は総合研究棟Ⅷ（工学系4号館）のみとなり，ボイラーサイズに比して空調面積が少ないため，建物の改修に合わせて空調方式を見直す。
・ 耐震改修に合わせて空調機器の更新を行ってきたが，1stステージでは，総合研究棟Ⅲ，総合研究棟Ⅰ等が，2ndステージでは総合研究棟Ⅱ，産学官連携本部Ⅱ号棟，アカデミーホール等が更新対象時期となってくるため，更新計画を立案する。

■給水設備

・ 主受水槽は地下タンク式であり，漏水の有無や外部からの影響の有無について確認ができないため，早急な更新の必要がある。また，現在井戸水のみの使用であるが，周辺地域では塩化が進んでいるため，飲料不適時の対策設備の準備を進める。
・ 給水主管は一部，地下ピット内配管となっているが，地中埋設となっている部分はほとんどが老朽化しており，配管自体が水質に影響を与える懸念があることや，漏水の有無の把握ができない，耐震性能が低い等が問題である。共同溝と一体的に更新整備を計画し，飲料水の安全，供給信頼度の向上を図る。

■ガス設備

・ 維持管理の容易さや取扱いの安全性から電力化を行っているが，実験機器等ではガス設備が必要である。
・ 構内には埋設されている旧式の白ガス管が残っており，管の腐食によるガス漏洩の恐れや地震時等に継手部分が緩む等耐震性が低いことが懸念されるため，早急にﾎﾟﾘｴﾁﾚﾝ（PE）管に更新する必要がある。

■計量・計測設備

・BEMS等を用いて電力、給水、ガス等の使用量等の適正な計量・計測を行い、エネルギーマネジメントに資する。

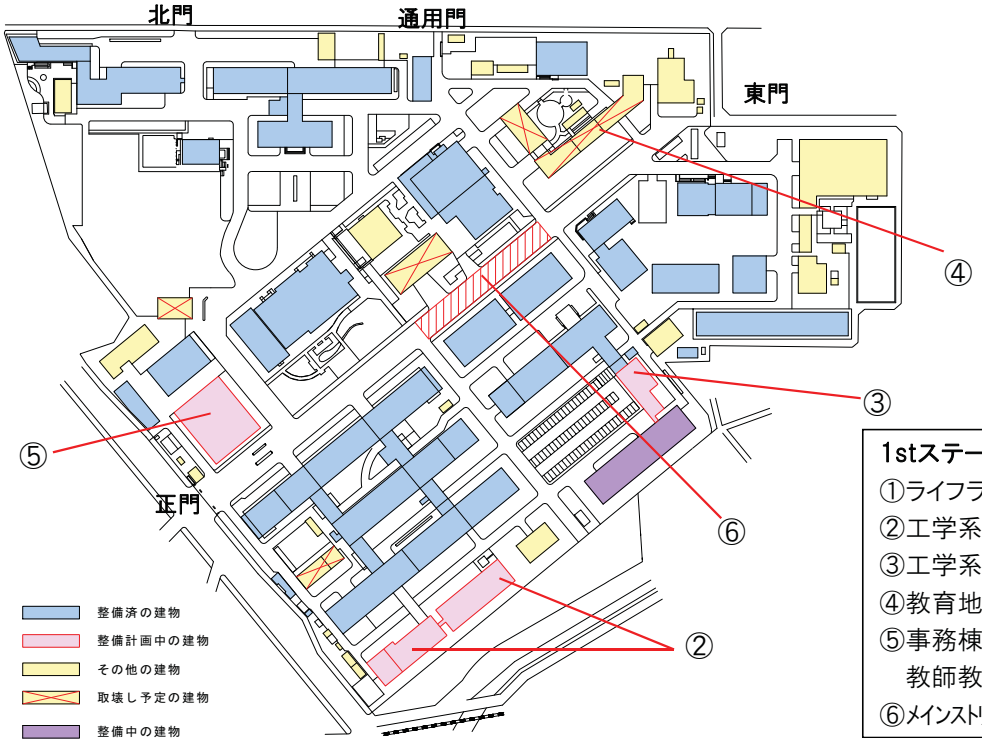
■共同溝

・ インフラストラクチャーの効率的な維持管理性能や供給信頼度の向上のため，構内の共同溝を整備する。

（3） 整備計画図

今後6年間～12年間程度を想定した建物等の整備計画を記載する。
「1stステージ」は平成25年～平成30年，「2ndステージ」は平成31年～平成36年である。

1stステ-ジ゛では，耐震性能の悪い建物，老朽建物の整備を中心とする。

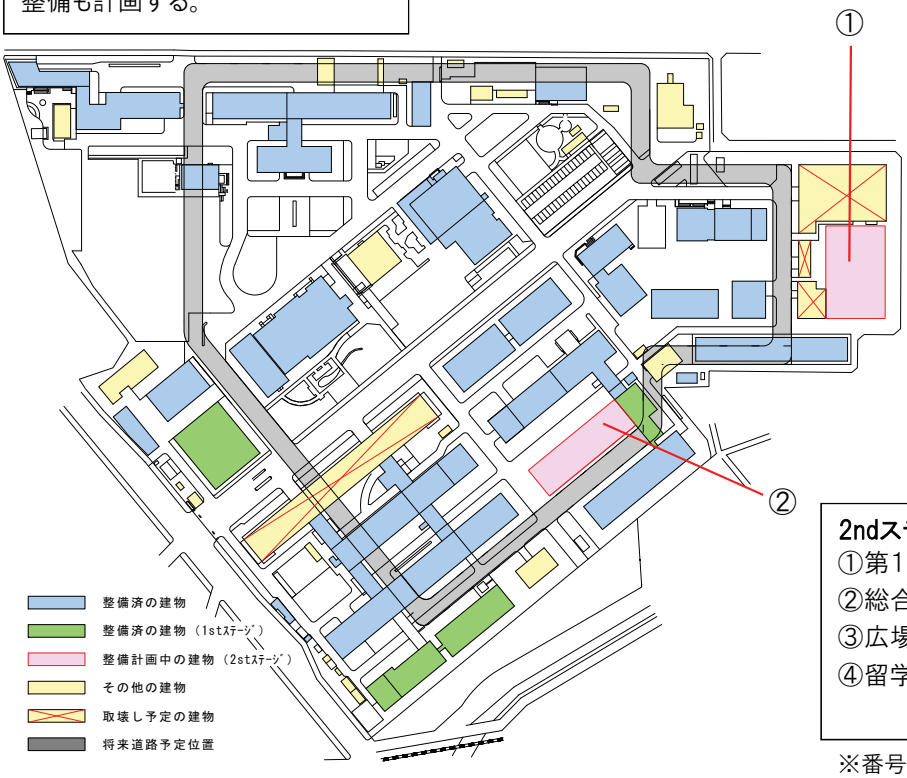


1stステージの整備計画
①ライフライン再生（給水設備）
②工学系4号館改修（老朽）
③工学系講義室棟改修（老朽）
④教育地域科学部2号館取り壊し
⑤事務棟・
　教師教育協働改革センター新築
⑥ﾒｲﾝｽﾄﾘｰﾄ（ｷｬﾝﾊﾟｽﾓｰﾙ）の整備

※番号は整備順位を表示するものではない

【1stステージ　整備計画図】

2ndステ-ジ゛では，耐震性能の確保されていない建物の整備を優先するが，外部資金，教育研究方針等の状況をみながら，新・増築等の整備も計画する。



2ndステージの整備計画
①第1・第2体育館改築
②総合研究棟新築
③広場等の整備
④留学生宿泊施設新築
　　（建設予定地は今後検討）

※番号は整備順位を表示するものではない

【 2ndステージ　整備計画図】

（4） 環境整備計画

■交通量調査結果を踏まえた応急措置

- 正門，北門周辺の環境整備を行う。
- 駐車場，駐輪場を確保するとともに，利便性の高い整備を進める。
- メインストリートは車両通行禁止（緊急車両、物品供給車両等を除く），駐輪禁止に徐々に移行させていく。
  また，「キャンパスモール」は地域や大学としての顔を持たせるため，舗装のデザイン変更や並木，ファニチャーを配置する等の整備を進める。
- サイン計画の検討を進める。（英文併記や点字ブロック等の設置計画も含む）

■パブリックスペースの整備

- 学生，職員及び地域住民等が散策したり，憩いの場となるキャンパス広場や緑地の整備を行う。
- 正門を起点とした東西のメインストリート及びこれに交差する南北のクロスストリートの2つを主軸として歩道や並木を計画し，キャンパスの骨格として整備する。
- 敷地中央の食堂・大学会館・図書館周辺を交流ゾーンと位置づけ，緑地を整理して広場等の交流・憩いの空間（コミュニケーションスペース）として整備し，キャンパス全体の活性化を図る。
- 総合研究棟Ⅰ前の通路部分は歩行者ゾーン（車両通過時間制限）として，大学会館前の空間と一体化し、中央広場・キャンパスモールとする。将来も主軸が交差する位置にあり，広場周囲に屋根付き休憩所や中央にモニュメントを設ける等，キャンパス中央広場としてシンボル的な外部空間を計画する。
- 緑地は樹木の剪定を定期的に行い，見通しが良く・明るく・散策できる芝生等の緑地に改造する。
- 敷地南に隣接する雑木林（県有地）との連絡口を整備し，地域住民と学生等の交流の促進を図る。

（5） エコキャンパス計画

- 総合研究棟Ⅷ（工学系4号館）の改修に伴い，ボイラー設備を廃止し二酸化炭素の排出量を抑制する。
- 施設の新営・改修に際しては，断熱や遮熱の強化と建物デザイン等による日射制御（抑制・導入）を採用する等，建物のパッシブソーラー化を図る。
- 照明器具をLED化するなど高効率照明器具を採用する。
- 各種省エネルギー制御の採用を推進する。例えば，居室等には人感センサーによる点滅制御を採用し，照明器具の消し忘れの防止や，廊下・階段室には人感センサーによる減光制御を採用し，未通行時の無駄な消費電力の軽減等を行う。
- 変圧器は常時損失を発生する機器であり，省エネルギー効果が高い高効率変圧器を採用する。
- 個別式の空調設備は高効率機器を採用する。
- 節水型の衛生器具を採用し，使用水量の削減を行う。

5—3 松岡キャンパス

（1） 整備の方針・考え方

・松岡キャンパスは，医学部（医学科・看護学科）及び附属病院のキャンパスであり，医学教育・研究や地域住民等から大きな期待が寄せられている地域医療の拠点としての役割を果たすためのキャンパスの整備を進める。
・医学部の定員増に伴う施設の狭隘化を解消し，教育・研究設備としての機能を強化する。
・附属病院の再整備については，新病棟完成後，既存病院の改修を順次行い，病院機能の向上を図る。また，医療施設から教育・研究施設への転用を図るなど，既存施設の有効活用を具現化する。
・学生，職員，病院患者及び地域住民等が散策したり，憩いの場となるようキャンパス広場や緑地の整備を行う。
・病院機能の信頼性・安全性確保のため，保全計画，改修更新計画に基づく基幹環境整備を実施する。
・降雪時等の患者さんの安全を確保する対策を計画する。

（2） 施設整備計画

■新築すべき建物
・ 医系総合研究棟
・ 留学生宿泊施設

■改修すべき建物
・（病院再整備）既存病棟・外来診療棟・中央診療棟
・（耐震・機能改修）臨床研究棟
・（機能改修）基礎研究棟・院生研究棟・RI施設・生物資源棟・福利施設 etc.
・（既存ストックの有効活用）西病棟の一部を医学部として改修する

■電気設備
・ 病院再整備に伴って，松岡キャンパスのエネルギー消費割合は電力に依存する割合が増える。また，非常時に病院の機能維持のためには非常電源や無停電電源が必要であり，電力の安定供給は最重要課題である。
・ 建物の改修・改築にあたってはLED等の高効率照明器具を採用し，初期照度補正等の適切な制御方法を組み合わせることで省エネルギー化を図る。
・ 今後も，良好な維持管理・修繕・更新等を行うとともに，運用改善を継続的に実施する。

■空調設備
・ 学部等施設と病院施設は，運転時間、温度・湿度等の要求が異なることを配慮し，学部等施設は個別空調方式に，病院施設は中央空調方式と個別空調方式の併用へと利用特性に適した方式を採用する。
・ 学部等施設は個別空調方式とすることで，搬送動力の低減や搬送ロスの削減及び，余剰熱源・待機熱源を削減し，熱源規模を適正化する。さらに，各種制御を組み合わせて省エネルギーを図る。
・ 病院施設は再整備計画に合わせ，機器類を高効率形に更新するとともに、全体の空調熱源システムを見直して，省エネルギー、省CO2を図る。なお，病院再整備時においても，エネルギー使用量が極端に増加しないよう，エネルギー管理に留意する。

■給水設備
・ 中央機械室のポンプ設備の老朽更新を病院再整備に合わせて実施する。
・ 給水ポンプを小型・複数台にシステム化し，台数・回転数制御を行い省エネルギーを図るとともに維持管理の容易な設備とする。
・ 給水設備は病院機能維持において重要であるため，非常電源を供給する。
・ 災害時における給水のバックアップのため井戸を新設する。

■ガス設備
・ ガスは敷地東側のJA（吉田郡農業協同組合）のLPG基地から，共同溝及び建物トレンチを経て各建物に供給している。設置後30年以上経過している設備及び配管類は安全性を確保するため更新する。また，配管の殆どが共同溝及び建物トレンチを利用しており，ガス漏れ検知器が多数設置されているため，ガス漏れ検知器の適正な維持管理及び計画的な更新を行う。

■排水設備
・ 既設廃水処理施設は設置後29年が過ぎ経年劣化が著しく，また当初は生活排水処理も行っていたことや，実験排水の河川放流を目的とした設備として構築されているため，処理容量や処理設備が実情より過大なものとなっていることから，適正処理能力のものに更新する。また，更新時にはBCPの観点も考慮する。

■計量・計測設備
・BEMS等を用いて電力、給水、冷温水、ガス等の使用量等の適正な計量・計測を行い、エネルギーマネジメントに資する。

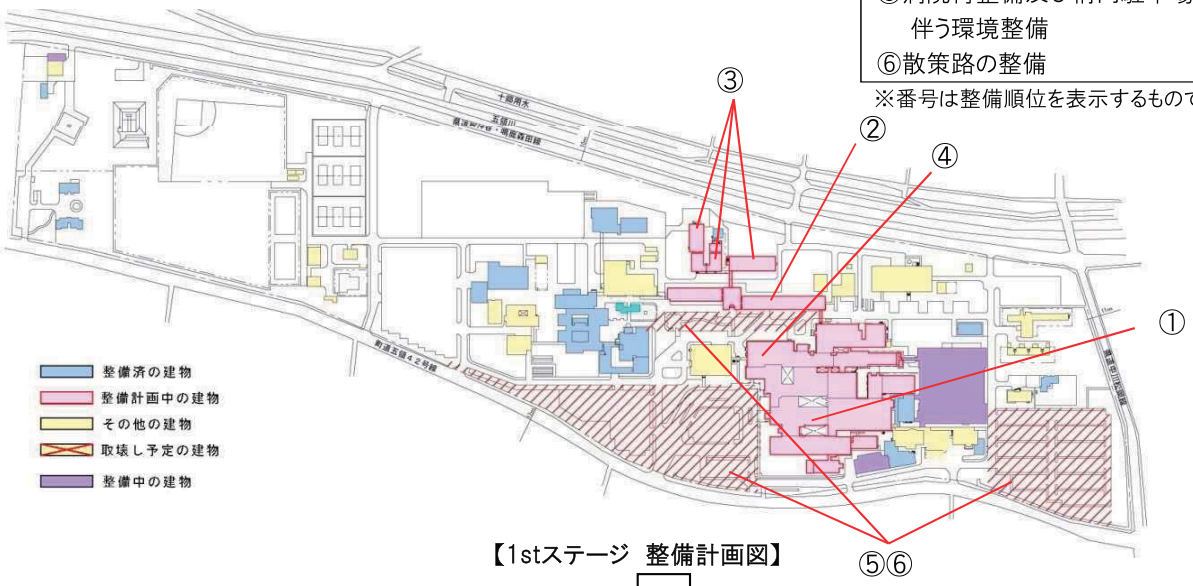
（3） 整備計画図

今後6年間～12年間程度を想定した建物等の整備計画を記載する。
「1stステージ」は平成25年～平成30年，「2ndステージ」は平成31年～平成36年である。

1stステージでは，病院再整備および耐震性能の悪い建物，老朽建物の整備を中心とする。

1stステージの整備計画
①附属病院再整備
（既設病棟・外来棟・中診棟改修）
②医学部基礎研究棟改修（機能）・
臨床研究棟改修（耐震・機能）
③院生研究棟改修・RI施設改修・
生物資源棟改修（機能）
④病院再整備に伴う研究スペースの確保（西病棟の一部）（機能）
⑤病院再整備及び構内駐車場管理に伴う環境整備
⑥散策路の整備

※番号は整備順位を表示するものではない

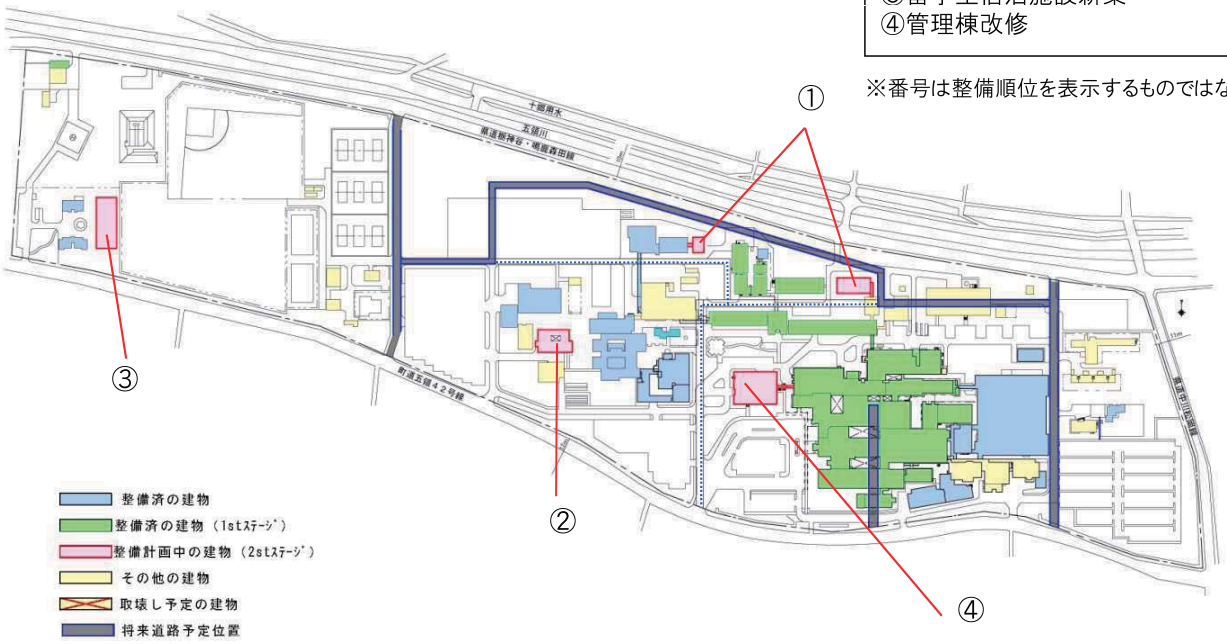


【1stステージ　整備計画図】

2ndステージでは，外部資金，教育研究方針等の状況をみながら，新・増築等の整備も計画する。

2ndステージの整備計画
①医系総合研究棟増築
②福利施設改修
③留学生宿泊施設新築
④管理棟改修

※番号は整備順位を表示するものではない



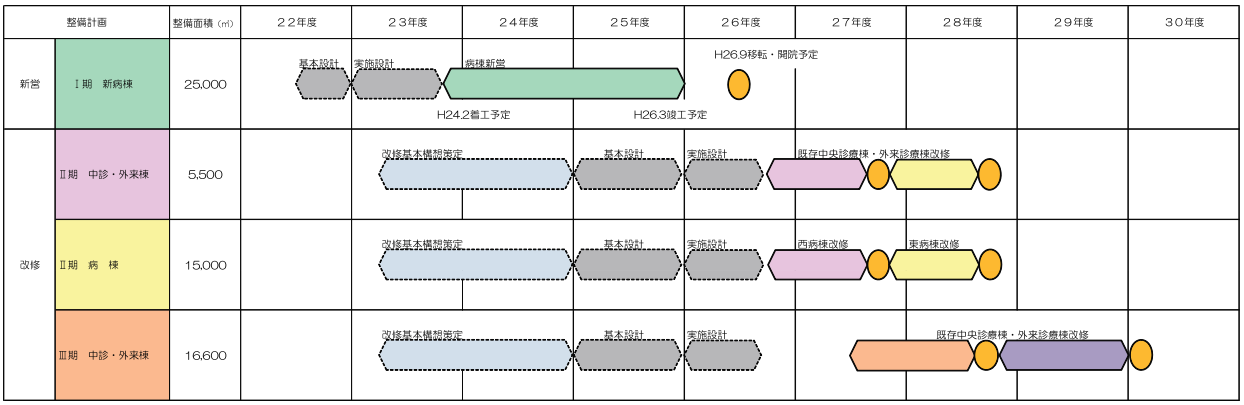
【 2ndステージ　整備計画図】

（4） 附属病院再整備計画

■病院再整備の基本理念（コンセプト）

①揺るぎ無き地域診療拠点の構築
②実践重視型教育環境の充実
③福井ブランドの先進医療の開発・実践
④快適・安全な医療空間の提供
⑤堅固な経営基盤の構築

■病院再整備計画の全体工程



■既存病院（病棟，中央診療棟，外来診療棟）改修

・新病棟完成・開院後，既存病院の改修に着手する。（平成26年度～平成30年度完了予定）
・外来棟から新病棟を直線で結ぶ通路をホスピタルストリートとして整備する。
・外来診療棟は患者数に見合う広さに拡張整備する。
・外来ホールにはエスカレーターを設置し、患者さんの利便性を向上させる。
・患者さん等の利便性向上の観点から，食堂・売店の配置や面積を見直す。
・既存病棟の一部を医学部の教育研究スペースとし、施設の有効利用を図る。

（5） 環境整備計画

■交通量調査結果を踏まえた措置

・新病棟の整備に伴い，東側道路は緊急車両通行の利便性を図る。
・駐車場，駐輪場を確保するとともに利便性の高い整備を進める。
・サイン計画の検討を進める。（英文併記や点字ブロック等の設置計画も含む）

■パブリックスペースの整備

・ キャンパス内には，医学部研究棟から医学図書館前まで，歩いて楽しめる散策路が整備されているが，学生や職員だけでなく，天気の良い日に患者さんのリハビリ等にも利用できるような整備を進める。例えば，病棟からの出入り口の整備や，散策路を一周する間に休憩ベンチ，季節の花を楽しめるビューポイントを整備する等が考えられる。
・敷地西側は陸上競技場，野球場，国際交流会館周囲空地，救急ヘリ発着場等と開けた状況である。今後，留学生の増加に対応するため，国際交流会館周辺用地等に，留学生宿舎等の増築を計画する。

（6） エコキャンパス計画

・施設の新営・改修に際しては，断熱や遮熱の強化と建物デザイン等による日射制御（抑制・導入）を採用する等，建物のパッシブソーラー化を図る。
・照明器具をLED化するなど高効率照明器具を採用する。
・各種省エネルギー制御の採用を推進する。例えば，居室等には人感センサーによる点滅制御を採用し，照明器具の消し忘れの防止や，廊下・階段室には人感センサーによる減光制御を採用し，未通行時の無駄な消費電力の軽減等を行う。
・変圧器は常時損失を発生する機器であり，省エネルギー効果が高い高効率変圧器を採用する。
・中央式の熱源システムは，高効率機器・システムの採用，既存蓄熱槽の効率的運用等により，電力消費量・熱料消費量の削減を行う。また，個別式の空調設備は高効率機器を採用する。
・節水型の衛生器具を採用し，使用水量の削減を行う。

5―4 二の宮キャンパス（附属幼稚園・小学校・中学校）

（1） 整備の方針・考え方

・二の宮キャンパスは，平成19年度における学習指導要領の改訂や社会状況の変化への対応を踏まえ，また，教育振興基本計画で実施すべきとされる教育上の方策等を鑑みつつ，これまで培われてきた探求型学習をさらに発展させ，多様な学びに対応していくことが重要となる。
・上記に対応するため，築後49年が経過し，新しい教育・研究に物理的・機能的に対応が出来ない附属中学校校舎を改築整備する。改築に際しては，多様な学びのスペースの充実，幼―小―中の12年間を見通し教育理念・方針が効果的に実現できるスペースの確保や配置計画，各学校間の連携のしやすさとスペースの共用等附属学校の効率的な運営に配慮した整備を行う。
・幼児・児童・生徒の安全面に十分に配慮し，特に，通学時および災害時における安全性確保と防犯のための整備を重点的に行う。
・実践力を備えた教員養成をこれまで以上に推進するにあたり，大学との緊密な連携を維持しやすく，ゆとりのある環境で学ぶことのできる環境整備を行う。

（2） 施設整備計画

■改築すべき建物
・ 中学校校舎
・ 中学校体育館
・ 技術家庭科教棟（機能的に中学校校舎と一体的に整備する）

■改修・増築すべき建物
・ 小学校校舎

■電気設備
・ 校舎改修・改築にあたってはLED等の高効率照明器具を採用し，初期照度補正等の適切な制御方法を組み合わせることで省エネルギー化を図る。

■空調設備
・ 中学校及び小学校で使用されているボイラーが設置から20年以上経過し劣化しているため，校舎改修・改築に合わせて，両校の空調熱源の統合，空調方式，定格容量の見直し，燃料代やCO_2の削減等について検討し，適切な容量，熱源方式のものに更新する。

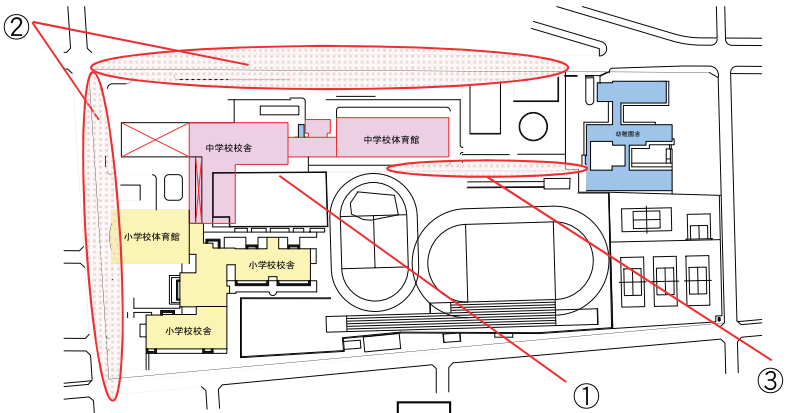
■給水設備
・ 現在，地下水を利用しているが，周辺地域において地下水の塩化が進んでいる地域もあり，将来的な水源確保について検討を進める必要がある。近年は井水浄化装置とその運用が一体として契約される手法もあり，同手法と市水の引き込みの経済性等を検討することが必要である。

■ガス設備
・ 建物周辺のガス配管は建物改修等に合わせて更新を行ってきているが，主配管は地中埋設の白ガス管で、設置から30年が経過しているため，管の腐食によるガス漏洩の恐れや地震時に継手部分が緩むこと，可とう性が低いことが懸念されるため，早急にﾎﾟﾘｴﾁﾚﾝ（PE）管に更新する必要がある。

■計量・計測設備
・BEMS等を用いて電力、給水、ガス等の使用量等の適正な計量・計測を行い、エネルギーマネジメントに資する。

（3） 整備計画図

今後6年間～12年間程度を想定した建物等の整備計画を記載する。
「1stステージ」は平成25年～平成30年，「2ndステージ」は平成31年～平成36年である。

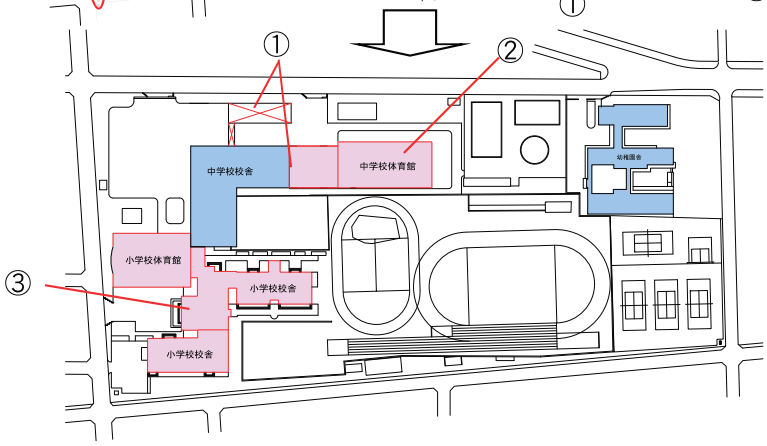


1stステージの整備計画
①附属中学校改築･改修
②通学歩道の確保 ※
③構内連絡通路の整備

※･･･関係諸機関との協議を進める

整備済みの建物
整備計画中の建物
その他の建物

【1stステージ　整備計画図】



2ndステージの整備計画
①技術家庭科教棟増築
②附属中学校体育館改築
③附属小学校改修
（機能改修）

整備済みの建物
整備計画中の建物
その他の建物

【 2ndステージ　整備計画図】

（4） 環境整備計画

■通学用歩道

・ 芦原街道（県道5号線）や，サンニの宮通りに接続する，キャンパス敷地北側および西側道路は通り抜け車両が多く，独立した歩道が設置されていない現在の状況では，通学時の幼児･児童･生徒の安全性が十分確保出来ていないため，関係諸機関との協議を進め，歩道整備の在り方を早急に検討する。

■構内連絡通路

・ キャンパス内は幼稚園だけが建物接続されておらず，キャンパス外へ出ないと，舗装路を通行できない。悪天候時においても安全にキャンパス内を移動し，連絡を十分に行えることが教育環境の向上につながるため，構内連絡通路を整備する。

■排水

・ 近年，ゲリラ豪雨に見舞われることが多く，特に中学校付近では冠水することがある。雨水排水能力について見直し，適切な排水機能を確保する必要がある。

■駐車場

・ 学校周辺では送迎用車両が校門付近や周辺民家付近に駐車するため，苦情が絶えない。公共交通機関での通学が条件とされているものの，事情等によってはやむを得ない状況もあり，安全に送迎ができる環境の整備について，運用面を含めて検討する。

・ 研究集会や保護者の会合等を行う場合，絶対的に駐車場が不足している状況である。駐車場のあり方について，キャンパス内の効率的な駐車場確保の検討や，周辺地域の協力体制を一体的に検討する。

■緑地

・ キャンパス内の樹木は豊かな環境を形成するだけでなく，教材として利用されるため，学習要素にあった樹木の選択が必要である。アンケートやヒアリング等を行い，現在の教育内容にあった樹種の選択を検討する。

（5） エコキャンパス計画

■中学校校舎

・ 中学校校舎の改築に際しては，断熱や遮熱の強化と建物デザイン等による日射制御（抑制･導入）の採用，高効率の照明器具･空調機器の採用，節水型の衛生器具の採用等により，建物のパッシブソーラー化を図る。また，計画にあたっては運用に十分配慮し，利用者にとって運用しやすい施設となることを重視する。

・ 校舎周辺には観賞，教材用としてだけでなく，省エネルギーの観点から、日射や照り返し，緑地･樹木等からの蒸散等による、温湿度や熱環境の緩和に配慮した緑地･植栽を効果的に計画する。

5―5 ハツ島キャンパス（附属特別支援学校）

（1） 整備の方針・考え方

・ハツ島キャンパスは，歴史的に大切にしてきた「生活教育」の実践と研究に基づき培われた，特別支援教育が推進でき，「自立と社会参加」へ向けての効果的な教育に対応できることが重要である。
・レインボータイムでの活動に代表される，小学部から高等部までが縦割り班で社会的な体験活動ができるホームや実習スペースの確保，整備を行う。
・現在職業棟で行っている「やきもの，木工，織物，紙とすり」を通した体験学習が，より社会的な体験になるよう，地域連携が図りやすい学習環境を整備し，インクルージョン教育が推進される環境整備を行う。
・インクルージョン教育を推進する地域のセンター的役割を果たすため，学外者にも利用しやすいバリアフリー対策，利用用途に応じたゾーニング、安全・安心な教育・研究環境のためのセキュリティの向上等を図る。また，教育に関する情報を蓄積・整理し，適切な形で発信していくために必要となる機能的な設備環境を整備する。
・実践力を備えた教員養成をこれまで以上に推進するにあたり，大学との緊密な連携を維持しやすく，ゆとりのある環境で学ぶことのできる環境整備を行う。
・児童・生徒の通学時や活動時における，交通事故防止等の安全対策を向上するため，構内進入路，歩道，駐車場の歩車道分離等について早急な検討・対策を行う。

（2） 施設整備計画

■新築すべき建物
・ 地域連携棟（仮称）

■改修すべき建物
・ 小学部教棟（機能改修）
・ 中・高等部教棟（機能改修）
・ 職業棟（機能改修）

■既存建物における検討
・ 改修・増築工事に際しては、キャンパスのシンボルである壁画「平和の楽園」の適切な保存方法について、計画・設計面また，工事による影響等の調査が必要である。
・ 日常生活訓練棟は平成5年建築の木造構造であるため、校舎全体の改修・増築時に、建物の劣化状況や施設機能・校舎との接続等の状況を調査し，計画する。

■電気設備
・ キャンパス内の空調設備が電化されていることから，電力の安定的供給は重要課題である。校舎改修にあたってはLED等の高効率照明を採用し，初期照度補正等の適切な制御方法を組み合わせることで省エネルギー化を図る。

■空調設備
・ 温水ボイラーは設置（昭和48年）から約40年が経過し老朽化しているので、校舎全体の改修・増築に合わせて適切な空調方式に更新する。校舎部分は電気ヒートポンプ式エアコンとし，効率と利便性の向上を図る。体育館については大空間の効率的な暖房として，現在同様，輻射式を採用するが，設置範囲と熱源方式について詳細な検討が必要である。

■給水設備
・ キャンパス内の年間使用水量がさほど多くないため，飲用水は現在と同様，市水での供給とし，校舎内の送水配管は改修に合わせて更新する。
・ 中水用として地下式の井水受水槽があるが，安全のためなるべく早期に地上式へ更新する。校舎内の送水配管は改修に合わせて更新する。

■ガス設備
・ キャンパス内の年間使用ガス量はさほど多くなく，かつガス供給個所も給食室と家庭科室，陶芸釜程度である。整備にあたっては「火」を使用する教育の効果を優先的に配慮し，教材として，近年導入が進む電化機器とのすみ分けを検討し，整備する。

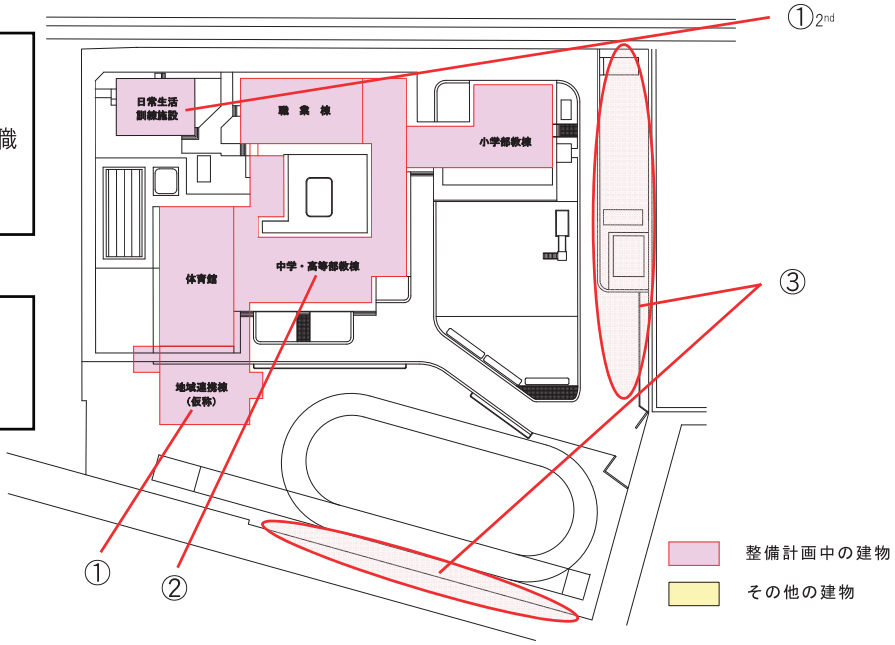
■計量・計測設備
・BEMS等を用いて電力、給水、ガス等の使用量等の適正な計量・計測を行い、エネルギーマネジメントに資する。

（3） 整備計画図

今後6年間～12年間程度を想定した建物等の整備計画を記載する。
「1stステージ」は平成25年～平成30年，「2ndステージ」は平成31年～平成36年である。

1stｽﾃｰｼﾞの整備計画
①地域連携棟（仮称）の新築
②小学校教棟，中学・高等部教棟，職業棟，体育館棟の改修
③駐車場の整備

2ndｽﾃｰｼﾞの整備計画
①日常生活訓練施設の機能改修



（4） 環境整備計画

■実習用フィールド

・ 子どもたちにとって，実習用フィールドが不足している状態である。キャンパス内の様々な緑地は貴重な実習用フィールドとなり得るため，校舎改修に際してまた，折に触れ，それぞれが利用しやすいよう，建物や他の緑地との繋がりに配慮しながら，できる限りの面積を確保する。
・ 校舎増築に際して，子どもたちの貴重な体験の場となっている築山が建設範囲にかかっているため，適切な場所を検討し，築山のある環境を維持・整備する。

■駐車場

・ 職員駐車場の見直しを行う。駐車場が日常的に利用する動線上にあるため，車の間から子どもが飛び出し，キャンパス内での人身事故に繋がりやすい状況となっているため，早急に改善計画を行う。車両入構口を分離する方法や，駐車場を敷地端部に移設し構内通行をしない方法等，駐車場の配置等について見直し，整備する。
・ 送迎用車両のスペースを確保する。現在，正門付近が職員駐車場となっていることで正門付近にゆったりとした送迎スペースがとれていない。職員駐車場のあり方を見直すことに合わせて，送迎時の安全なスペースを確保する。

（5） エコキャンパス計画

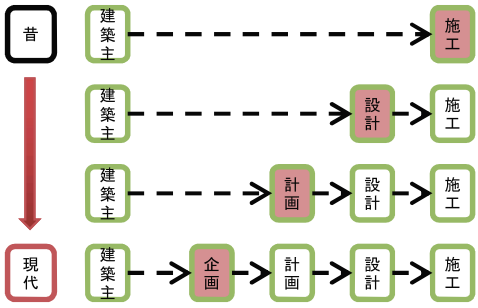
■改修・改築校舎

・ 校舎の改修・改築に際しては，断熱や遮熱の強化と建物デザイン等による日射制御（抑制・導入）の採用，高効率の照明器具・空調機器の採用，節水型の衛生器具の採用等により，建物のパッシブソーラー化を図る。また，計画にあたっては運用に十分配慮し，利用者にとって運用しやすい施設となることを重視する。
・ 校舎周辺には観賞，教材用としてだけでなく，省エネルギーの観点から，日射や照り返し，緑地・樹木等からの蒸散等による、温湿度や熱環境の緩和に配慮した緑地・植栽を効果的に計画する。

6. 戦略的な施設マネジメントの推進

文部科学省は第3次国立大学法人等施設整備5か年計画において基本的な考え方の一つとして，「長期的視点より施設整備に努める」とし，「既存施設の有効活用や適切な維持管理等の戦略的な施設マネジメントの推進とそれに必要な人材養成、多様な財源を活用した施設整備などシステム改革への取組を一層推進する」としている。

また、近年の建築生産プロセスにおいては，「施工」するプロセスより「設計」「計画」「企画」へと重点が移り変わっており，その過程において「建物のライフサイクル」を見越した建築生産プロセスが重要であるといわれている。



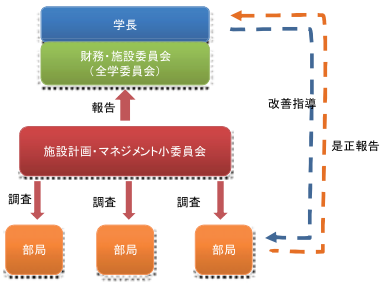
建築プロセスにおける重点の移り変わり
（建築学会　建築生産論より）

上記のような背景から，福井大学のアカデミックプランやキャンパスマスタープランを実現するためのツールとしてトップマネジメントによる施設マネジメントを推進することは不可欠である。本学が求める，最適な教育・研究・医療環境等の整備には要求に即した施設供給や既存施設の効率的な維持管理・持続的運用と，その原動力となる財源の確保が重要課題となる。さらに，この戦略的な施設マネジメントを推進するために，長期的視点で施設マネジメント情報の蓄積や優秀な施設マネジメント人材の確保および養成等が必要である。以下に本学における施設マネジメント実施のための検討の方向性を示す。

6－1　施設マネジメントの現況

（1）施設有効活用のための施設マネジメント体制

・「トップマネジメント」

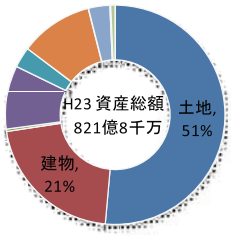


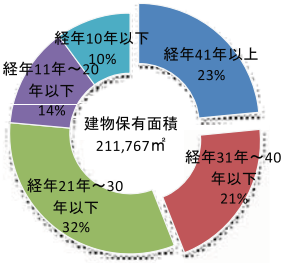
本学においては「福井大学における施設の有効利用に関する規則」により全学的視点に立った施設運営を推進し，施設の点検・評価に基づく効率的な利用を推進している。学長をトップとした全学委員会である「財務・施設委員会」，その下に具体的検討を行う「施設計画・マネジメント小委員会」（以下この章において，小委員会と称する）を置き，トップマネジメントで施設マネジメントを行う体制をとっている。

小委員会では施設の活用状況を定期的にまたは，必要に応じて随時調査し，点検・評価を行う。評価の結果，改善が必要と判断した場合，改善の指示が行われ，改善措置後，完了報告を行う体制となっている。

（2）財務構造と施設整備費

・「財務構造」





本学の平成23年度決算によれば，資産総額は821億8千円であり，そのうち土地が422億3千万円，建物が173億5千万円である。

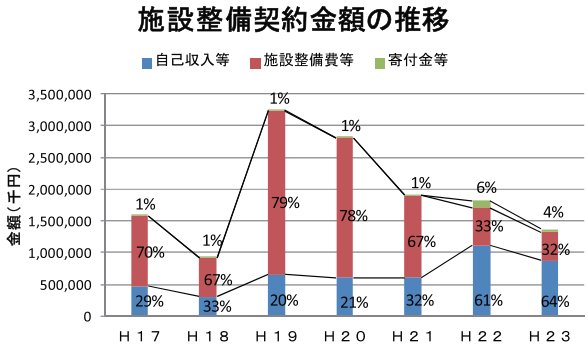
本学における建物保有面積のうち，経年30年以上のものは38%あり，これらはこのキャンパスマスタープランに基づき、今後30年のうちに建て替えが必要となる。これらの建て替え計画のためには多額の費用が必要となるが，キャンパスの機能を維持しつつ，更新・維持計画を効率的に行っていくために，施設マネジメントと財源確保は重要なテーマである。

平成17年度以降の施設整備契約金額の推移をみれば，平成17～平成21年度までは施設整備費等による整備が半数以上であるが，この期間は第2次施設緊急整備5カ年計画により施設耐震化対策を主に行っている。

平成22年度,平成23年度は自己収入等の整備比率が大きいが，ここでは目的積立金による医学図書館の整備等を行っている。

現在のところ，寄付金等による整備金額は10%に満たず，外部資金の活用は十分でない。近年の予算状況のひっ迫から，国からの補助金等は減少していくことが予想される。

今後厳しい財源の中での施設の整備・維持管理・運営には，施設費補助金以外の多様な財源の確保と既存施設の流動的利用や施設の一元管理等の推進が、施設マネジメント遂行上の重要な課題である。



6－2 施設マネジメントの基本方針

本学は，保有するキャンパスや施設を教育・研究・医療・社会貢献等の活動に効率的に利用・活用するため，利用ニーズに応じ，スペースの再配分や，施設の機能・環境を一定の水準以上に保持しつつ，福井における知の拠点にふさわしい施設環境を持続・運用し，また新たなニーズ等に対応する施設整備をするため，施設マネジメントの基本方針を次の通りとする。

（1） 施設マネジメントの基本的な視点の明確化

本学では次の基本的視点によって施設マネジメントを行っていく。

・クオリティ

施設は完成後利用されるにつれ物理的・機能的劣化が進行していくが，それを最小限に留め，かつ教育・研究・医療等のニーズ・動向に十分に対応し，活動の基盤となる施設環境の質を一定のレベル以上に持続的に維持・運用し，施設の寿命をなるべく延ばすことが求められている。そのため，日常的な維持保全・清掃の他，定期的な点検，予防保全的な修繕・更新，あるいは機能向上やニーズに即した改修・更新が必要である。また，防災(BCPも含む)，防犯，交通，屋外環境，インフラ，生活環境，構成員のQOL等についても，同様に配慮する必要がある。

・スペース

施設・スペース等の有効活用のため，常にその利用・活用状況を調査・把握し，目的・用途に応じた施設・スペースの需給度合い，利用度(利用率)を踏まえて適切に配分・管理するとともに，不足する場合は新増築等施設の確保(施設整備)を行う。

施設・スペース等で共有できるものが無い場合にも，新たに整備が必要であるが，利用期間に即した寿命の建物・設備を選択することで，初期投資や維持管理費を抑えることができる。また，新たな整備は，維持管理費等の増大に繋がる事から，必要以上に整備投資しないことが望ましい。

また，利用されない施設等は解体撤去を行う等適切なマネジメントを行う必要がある。

・リスク

クオリティやスペース等，マネジメントの実施には，投資が必要であることから，その投資のリスクについて，常に最適な判断ができる情報の収集，資料の作成が必要である。施設の投資は経営に関わる重要な事項なので，投資内容とともに，そのリスクについても，経営トップに報告し，了承を受けなければならない。

・コスト

上記マネジメントを踏まえた整備にかかる費用を管理し，コスト縮減，費用対効果の見極め(ライフサイクルコストLCCの観点），資産価値の向上・維持を図る必要がある。

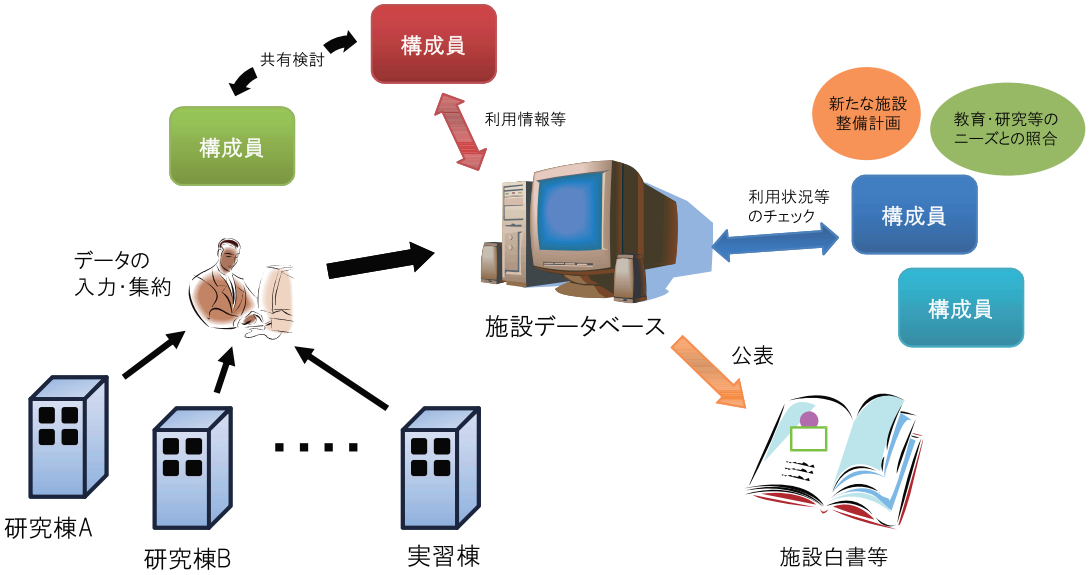
また，エネルギーの使用状況やコスト等をキャンパス毎，部局毎，建物毎などに把握し，省エネルギー施策や再生可能エネルギーの導入により，省CO_2・省エネルギー・省コスト等，エネルギーマネジメントを推進する。

（2） 施設マネジメントの見える化

「キャンパスマスタープラン2012」を具現化し，運用していく本学の全構成員が，それぞれの視点でチェックを行えるように施設白書等をホームページ上で公表する等して「施設・設備の整備・管理・利用状況，エネルギー使用状況等を見える化」し，大学の各構成員が，素早く必要な施設情報を得られ，施設利用・エネルギー利用の効率化や施設整備・維持管理等に対する意見， 改善等を提案できる状態にする必要がある。

メリットとして例えば，空きスペースや共用可能スペースの情報を提供して有効活用を促進することで，スペースニーズに対する素早い対応とともに，整備コストの削減，維持管理コストの確保を図ることが期待される。

また，各構成員が教育・研究環境や施設整備等に直接改善提案を提出することができる事により，更なる教育・研究環境等の改善・質の向上や省エネルギー等の意識の向上に繋がる事が期待される。



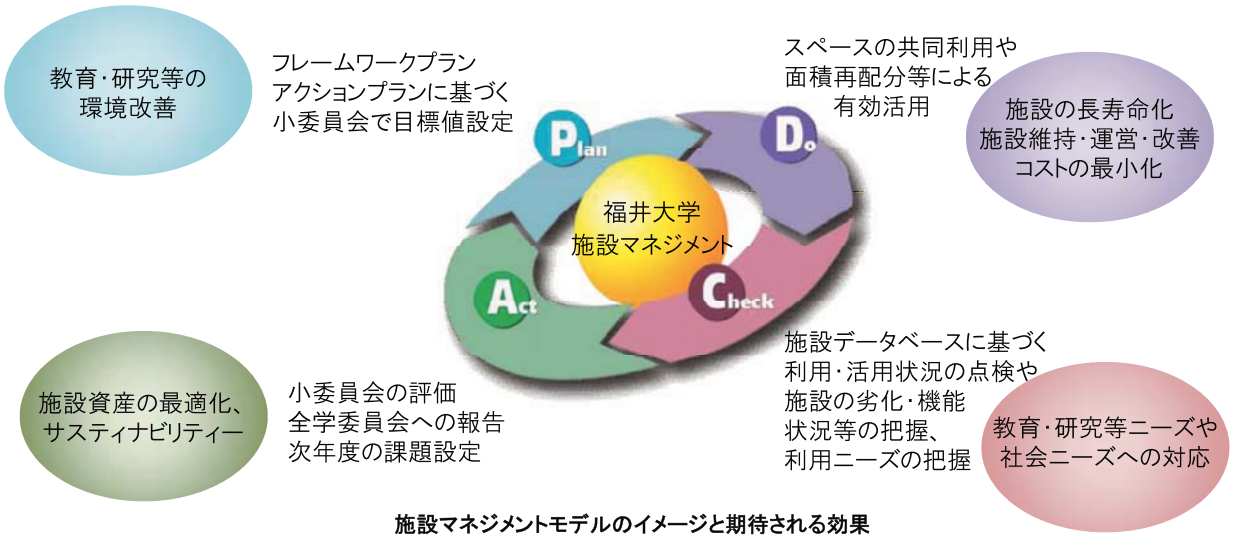
施設マネジメント見える化のイメージ図

（3） 本学の実情等に適した施設マネジメントモデルの構築

施設マネジメントを効率的に実行していくためには，常に次のPDCAサイクルを回す必要がある。また，施設マネジメントを推進する人材の養成や教育を実施し，組織的な施設マネジメント能力の強化を図ることが必要である。

さらに，本学の実情等に適した施設マネジメントモデルを構築し，トップマネジメントとして学内に定着させ，促進を図ることが重要である。

Plan･･･　キャンパスマスタープランの施設整備計画等により，小委員会で目標値を設定する。
Do･･･　施設整備による施設マネジメントと各部局による自主施設マネジメントを行う。
Check･･･ 小委員会での点検機能。年に数回，施設マネジメント推進状況を確認する。
Act･･･　小委員会での評価。「財務施設委員会」へ報告し，実績として記録する。次回・次年度への課題設定。
設定を行うに当たっては福井大学の地域性や特殊事情を十分に加味する内容とする。



施設マネジメントモデルのイメージと期待される効果

6－3 施設マネジメントの具体的な取組事項

施設マネジメントを推進するため、具体的な取組事項を以下の通りとする。

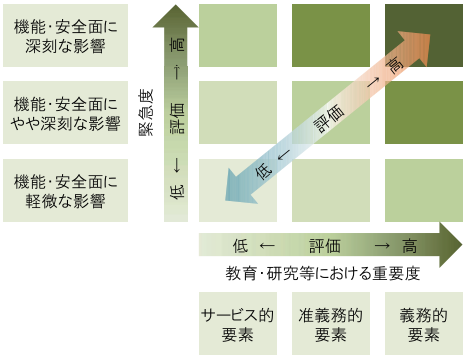
（1） 施設の利用・活用状況調査

効果的な施設マネジメントを実践するため，最初に施設の老朽・劣化度，教育・研究等のニーズ・動向，利用・活用状況等の現況調査を行う。本学が保有し・利用している全ての施設を棟毎や，必要により全ての部屋毎でこれらの調査を毎年行い，データベース化して常にその現況を把握する。

（2） 施設整備の優先順位

文部科学省の第3次5カ年計画の重点整備項目では，「老朽改善整備」・「狭隘解消整備」・「大学附属病院の再生」が挙げられており，本学もこの方針に沿った整備を行う。整備にあたっては，老朽・狭隘度や耐震性能等を安全性の指標とした優先度，教育・研究等の効果やその社会的ニーズを定量的に表現した指標による優先度，共同利用度合いや資金調達面での優先度等により整備順位を決定する。

これには例えば，施設ポートフォリオによる優先度判定の考え方を導入し，優先度判定を客観的に行えるようにすることで，業務の効率化と経営トップの判断指標とすることができる。



施設ポートフォリオによる優先度判定の例

（3） 建物管理情報の一元化

本学は平成24年度現在，14団地，178棟の建物を所有している。これらの建物管理に関する情報を「建物カルテシステム」等のデータベースを用いて一元的に管理し，施設の状態や施設の利用状況等，今後必要となる施設整備や維持管理に関する情報を迅速かつ確実に把握・共有する。所有する建物個々の状況を同時に把握できるメリットを生かし，キャンパス全体を見通したバランスの良い施設管理・運営業務を効率的に行う。

（4） スペースマネジメント

本学では保有スペースを「共用A」「共用B」「共用C」「専用A」「専用B」等の種別に分けデータベース化し，利用・活用状況の把握を行っている。これらを基に教育・研究等のニーズ・動向に合わせてスペースの集約・統合や再配分を行うとともに，スペース種別を適宜見直しを行う等，データベースを活用したスペースマネジメントを行う。

（5） 施設整備費等の財源確保

・多様な財源の活用

今後，国の予算情勢のひっ迫から施設費補助金や自己収入だけでは十分な整備を行うことができなくなることが予想されるため，他省庁の補助金，ESCO事業，民間資金，設備受託契約等の多様な財源を積極的に活用する整備の導入に努める。

・新たな施設需要等の財源確保

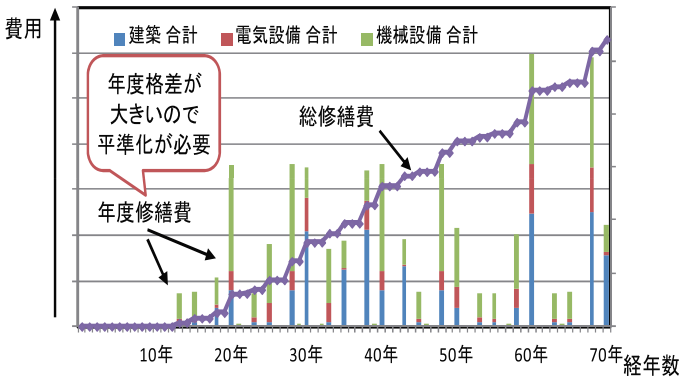
教育・研究・医療等の進展や社会情勢の変化に伴い，新たな施設需要が発生することもあることから，全学の施設の利用状況の把握，共用等に努め，施設の有効活用を図る。また，地球環境保全のための省エネルギー投資等に対応するため，新たな施設需要等の財源と合わせ，多様な財源の確保・運用に努める。更に，省エネルギーにより削減された光熱水費等を新たな省エネルギー施策に再投資できる循環予算制度の導入を検討する。

・中・長期保全計画の活用

建物の中・長期保全計画を策定するにあたっては，建物ライフサイクルコスト(LCC)の観点から保全計画とともに予算投資計画を策定し，適切な施設整備や維持管理等を実施する。

・予防保全の導入

従来の成り行きの「事後保全」から計画的な「予防保全」への移行を推進し，不測の故障や不具合を未然に防止し，それらによる予定外出費を防ぐとともに，施設の安定的な利用を可能とする。また，施設を安定的に利用できることは，教育・研究等の利用環境の質的向上につながる。予防保全への移行にあたっては建築設備等のメンテナンス周期，保全費用とその効果等を予算管理者に明示する必要があり，本学に適した方法を導入する。



建物ライフサイクルコストのイメージ

・スペースチャージ等による修繕・維持管理費・設備更新費等の財源確保

本学の現状の修繕費等では，保有する施設・設備の予防保全による修繕・改修や適正な施設環境の水準・機能維持，利用者のニーズへの適切な対応が困難なことから，修繕・改修等に必要な予算を確保するために，施設利用者の受益者負担によるスペースチャージやエネルギーチャージ等によって修繕費・維持管理費や設備更新費，省エネ改修費等を計画的に積み立て，執行できる予算制度の導入に努める。

（6） 外部組織との協議・連携

・高付加価値資産の有効活用

現在大学が保有している資産は建物や設備を含めて，一般的知見からすれば，とても付加価値の高いものが多くあり，学内利用は勿論のこと，地方自治体との協議・連携による利用，又地域住民等への開放，産学連携等により有効活用に努める。

・借用・共同利用等による施設の有効活用

地方自治体等の保有する公共施設のうち，本学と目的を同じくするもの等については，共同で利用・活用し，施設の効率利用を図ることで，スペースの有効活用や維持費の軽減，省エネルギーに繋がる。

また，先端的研究や産学官連携等を通した学術交流も生むことができる。これらを実現するために，地方自治体等との協議・連携を図り，学内構成員の活動拠点を拡充するとともに，本学の施設経費の低減に努める。

・地域における「知の拠点」の形成

有効活用出来たスペースや削減出来た維持費・光熱水費等を，教育・研究等のほか，地域における新しい産業技術の開発等に充てることで，技術開発・人材育成等を促進することができる。その結果，地域産業の発展や活性化等に貢献でき，地域における「知の拠点」「福井大学を中心とした学術地区」の形成につながっていくと考えられる。

7. その他キャンパスの現状

7—1. 上伏・安竹（農場）

（1） キャンパス環境

①キャンパスの立地環境

福井市の北西，文京団地から約4Km北西側で，田園地帯の中に位置している。敷地は河川にそった変形で敷地の高低差はそれほどなく平坦地である。

②所在地

●所在地：福井市上伏町5字石畑9番
●学部等：教育地域科学部・屋外運動場附属施設

③法的指定等

●都市計画区域内　市街化調整区域（建ぺい率70%・容積率400%）

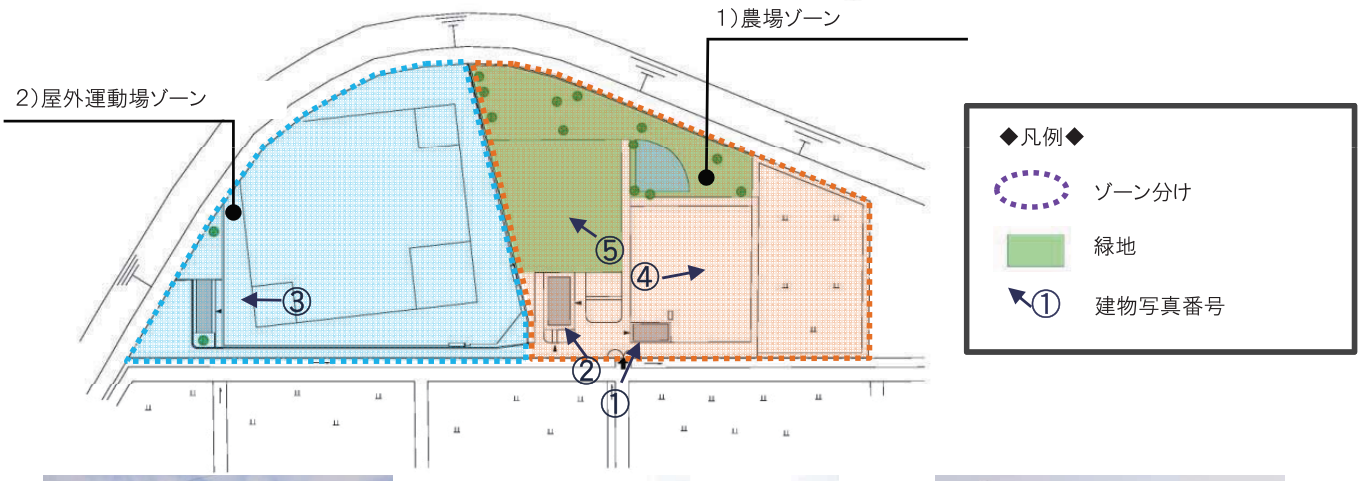
④敷地面積・建物面積

●敷地面積	33，164㎡
●建築面積	452㎡
●建物延床面積	542㎡
●建ぺい率	1．0%
●容積率	2．0%

⑤防災

福井市洪水ハザードマップ：洪水深が2.0m～5.0m未満の地域

⑥キャンパスゾーニングの現状・屋外環境整備



①. 温室（S61）

②. 管理作業棟（S61）

③. 更衣室兼器具庫（S62）

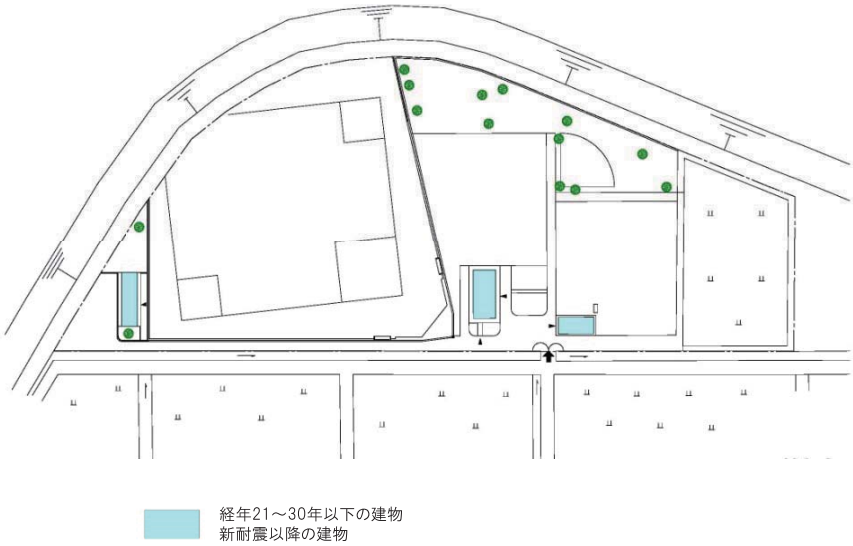
④. 実習畑

⑤. 多目的広場

（2） キャンパス整備の状況（耐震性能・経年数）

上伏・安竹（農場）の全体の建物面積　542㎡は,全て耐震性能は確保されている。また，経年は30年以下の建物であるが,補修が必要な部分もあり,今後は改修の検討が必要である。

【各建物の経年数・耐震性能】



7—2. 上里町宿舎

（1） キャンパス環境

①キャンパスの立地環境

県庁所在地である福井市の市街地北部に位置し，文京キャンパスから約1Km西側で，住宅街の中に位置している。えちぜん鉄道の線路に沿った変形で敷地の高低差はそれほどなく平坦地である。

②所在地

●所在地：福井市文京5丁目13番10号
●学部等：学生寄宿舎・国際交流会館

③法的指定等

●都市計画区域内　第1種住居地域（建ぺい率60%・容積率200%）
●準防火地域

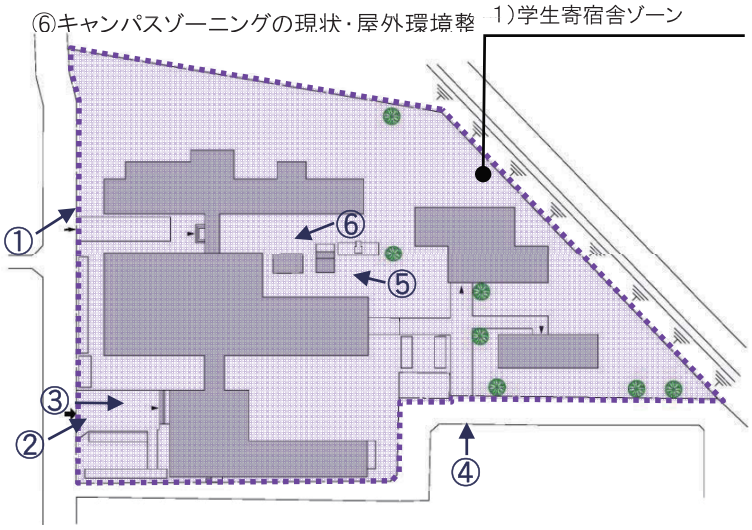
④敷地面積・建物面積

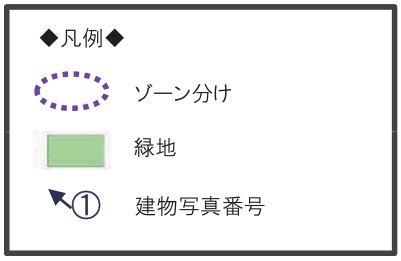
●敷地面積	5，893㎡
●建築面積	1，802㎡
●建物延床面積	5，635㎡
●建ぺい率	31．0%
●容積率	96．0%

⑤防災

福井市洪水ハザードマップ：洪水深が2.0m～5.0m未満の地域

⑥キャンパスゾーニングの現状・屋外環境整





①．国際交流学生宿舎A棟（H11）

②．国際交流学生宿舎B棟
（S40.41.H14耐震改修）
平成14年に耐震・機能改修完了。

③．国際交流学生宿舎C棟（S41.H14耐震改修）
平成14年に耐震・機能改修完了

④．留学生会館A棟・B棟（H元年）

⑤．ポンプ室（S50.H12）

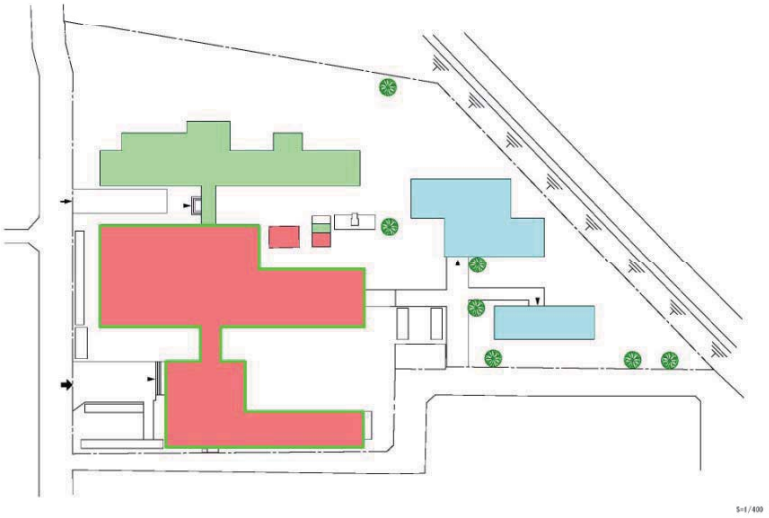
⑥．受電室（S40）

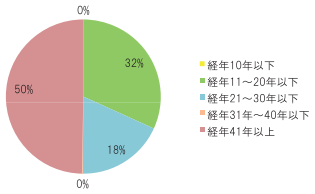
（2）キャンパス整備の状況（経年数・耐震性能）

（平成24年度末現在）

上里町宿舎の全体の建物面積　5,635㎡の内，耐震化率はほぼ100%である。しかし，経年が40年を超えた建物が全体の50%を占めており，今後は改築を含めた検討が必要となる。

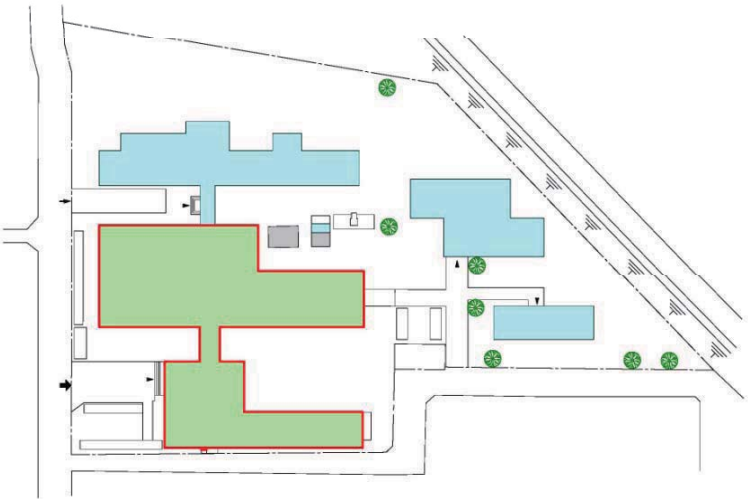
【各建物の経年数】

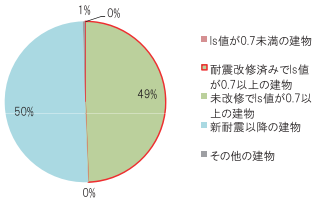




経年11年～20年以下の建物：1，789㎡
経年21年～30年以下の建物：1，035㎡
経年31年～40年以下の建物：8㎡
経年41年以上の建物：2，784㎡
改修後10年以上経過：2，784㎡

【各建物の耐震性能】





耐震改修済みでIs値が0.7以上の建物：2，784㎡
新耐震以降の建物：2，824㎡
その他の建物：27㎡

7—3. 文京第1･第2運動場

（1） キャンパス環境

①キャンパスの立地環境

県庁所在地である福井市の市街地北部に位置し，文京キャンパスの南側で，住宅街の中に位置している。敷地は整形で，敷地の高低差はそれほどなく平坦地である。

②所在地

●所在地：福井市文京3丁目29番1号（第1運動場）
　　福井市文京3丁目10番1号（第2運動場）
●学部等：屋外運動場附属施設

③法的指定等

●都市計画区域内　第1種中高層住居専用地域（建ぺい率60%･容積率200%）

④敷地面積･建物面積

	（第1運動場）		（第2運動場）
●敷地面積	26，233㎡	・	6，329㎡
●建築面積	249㎡	・	60㎡
●建物延床面積	249㎡	・	121㎡
●建ぺい率	1．0%	・	1．0%
●容積率	1．0%	・	1．0%

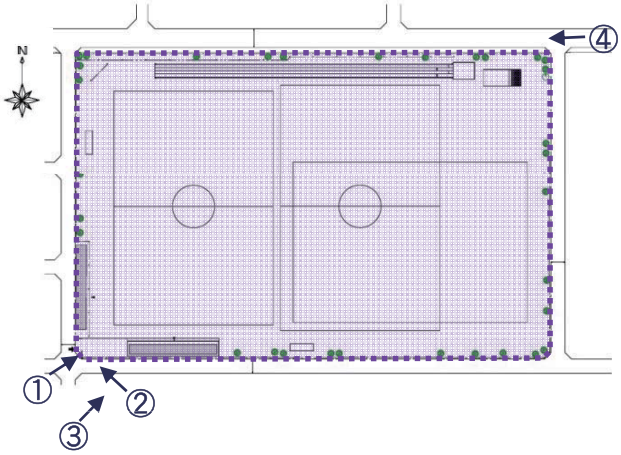
◆凡例◆
ゾーン分け
緑地
① 建物写真番号

⑤防災

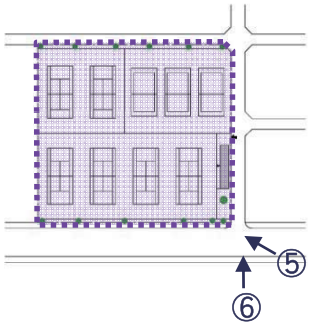
福井市洪水ハザードマップ：洪水深が1.0m～2.0m未満の地域

⑥キャンパスゾーン現状･屋外環境整備

（第1運動場）



（第2運動場）



①．第1運動場入口

②．入口横駐輪場

③．管理棟（S40）

④第1運動場北側道路

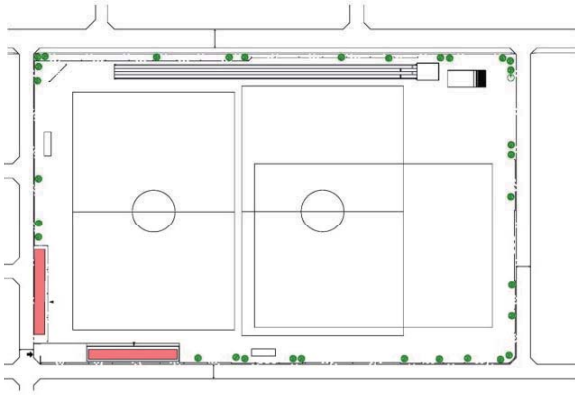
⑤．第2運動場

⑥第2運動場東側道路

（2） キャンパス整備の状況（耐震性能・経年数）

文京第1・第2運動場の全体の建物面積 370㎡は，経年が30年を超えた建物であり，且つ耐震診断・耐震改修を予定しない建物である。今後は改築を含めた検討が必要となる。

【各建物の経年数・耐震性能】



経年41年以上の建物
旧耐震かつ耐震診断・耐震改修を予定しない建物

経年31年～40年以下の建物
旧耐震かつ耐震診断・耐震改修を予定しない建物

8. 参考資料

（1）キャンパス整備の経緯

福井大学文京キャンパスは，大正12年(1923)，現キャンパス地に官立高等教育機関拡充により福井高等工業学校が設置されたことに始まり，昭和19年に福井工業専門学校と改称された。
昭和24年，国立学校設置法施行により福井師範学校(明治6年小学校師範学校として創立)，福井青年師範学校(昭和13年福井県立青年学校教員養成所として創立)及び福井工業専門学校(大正12年福井高等工業学校)を包括して学芸学部，工学部の2学部からなる新制大学として福井大学が設置された。この時，工学部は現文京地区にあったが，学芸学部は現鯖江市の旧兵舎跡を利用していた。
昭和23年6月28日の福井地震により施設も大きな被害を被り，この復旧を目指して昭和26年福井大学統合整備5か年計画を立案し，計画の一環として隣接地を買収した。(現教育地域科学部地区)
昭和27年4月～6月，戦災，震災からの復興を記念して福井復興博覧会が福井大学敷地を中心に開催され，その跡地に昭和27年10月学芸学部の一部が現鯖江市より移転した。残りも引き続き移転，昭和29年に移転が完了し，ほぼ現在のキャンパス体制ができあがり，現在に至っている。
当初の施設は木造が主体であったが，昭和30年頃から次第に鉄筋コンクリートに建て替えが進められた。

福井大学松岡キャンパスは，福井医科大学キャンパスとして九頭竜川河川敷の埋立地を利用して整備された。福井医科大学は，国の無医大県解消政策により，新設医科大学Ⅴ期校として昭和53年に創設され，昭和55年4月に開学した。

平成15年に旧・福井大学と旧・福井医科大学が統合し，平成16年国立大学の法人化と同時に国立大学法人福井大学が発足・開学した。現在，福井大学は教育地域科学部，工学部，医学部の3学部及びこれらを基盤とする各大学院から構成され，各学部は独自の歴史と伝統を継承している。

（2）各種委員会・WG 名簿

財務・施設委員会名簿(平成24年度)

学　長	（委員長）	福田　優
理　事(副学長)教育・学生		寺岡　英男
理　事(副学長)研究・評価		眞弓　光文
理　事(事務局長)経営・大学改革		高梨　桂治
医学部附属病院長		和田　有司
教育地域科学部長		中田　隆二
医学部長		上田　孝典
工学研究科長		岩井　善郎
教育地域科学部教授(評議員)		三橋　美典
医学部教授(評議員)		佐藤　真
工学研究科教授(評議員)		小林　克巳
附属図書館長		田村　信介

施設計画・マネジメント小委員会名簿(平成24年度)

理　事(事務局長)経営・大学改革	（主査）	高梨　桂治
教育地域科学部教授		岡崎　英一
医学部教授		横田　義史
医学部教授		腰地　孝昭
工学研究科教授		松下　聡
産学官連携本部長		米沢　晋
工学研究科講師(技術顧問)		高嶋　猛
財務部長		川尻　秀行
総務部研究推進課長		大橋　祐之
財務部施設企画課長		井上　孝
学務部教務課長		明田　敏彦

キャンパス施設整備計画WG名簿(平成24年度)

工学研究科教授	（主査）	松下　聡
工学研究科講師(技術顧問)		高嶋　猛
教育地域科学部教授		松木　健一
教育地域科学部教授		越野　格
医学部教授		安田　年博
医学部教授		宮本　薫
医学部教授		横山　修
理　事(事務局長)経営・大学改革		高梨　桂治

附属学校施設整備計画小WG名簿（平成24年度）

【教育地域科学部】

教育地域科学部長	（主査）	中田　隆二
教育地域科学部教授		越野　格
教育地域科学部准教授		岸　俊行
（二の宮キャンパス）附属中学校長		宗倉　啓
附属中学校副校長		岩崎　紳二
附属中学校教頭		柴田　顕光
附属小学校長		伊禮　三之
附属小学校副校長		瀧口　正之
附属小学校教頭		福本　ゆうみ
附属幼稚園長		澤崎　久和
附属幼稚園副園長		大崎　ふみ代
（ハツ島キャンパス）附属特別支援学校長		石井ﾊﾞｰｸﾏﾝ　麻子
附属特別支援学校副校長		石井　喜和
附属特別支援学校教頭		浅原　真治
附属特別支援学校教諭（主事）		天方　和也
附属特別支援学校教諭（主事）		前田　吉秀

【施設整備学識者】

教育地域科学部教授（技術顧問）	松木　健一
工学研究科教授（技術顧問）	松下　聡

【大学事務局】

教育地域科学部支援室長	岡倉　治巳
教育地域科学部支援室専門員（附属学校）	加藤　正人
教育地域科学部支援室附属学校係長	前川　奈々江
施設企画課長	井上　孝
施設企画課施設計画係長	吉田　清隆
施設企画課施設計画係	松原　裕香
施設企画課施設計画係	松間　福太郎

（3）キャンパスマスタープラン2012作成までの経緯

【平成23年度】

・平成23年 5月 9日　　キャンパス施設整備計画ワーキング（第1回）
「キャンパスマスタープラン2012」更新計画説明・基本方針（案）提示・意見交換

・平成23年 5月31日　　施設計画・マネジメント小委員会（第12回）
「キャンパスマスタープラン2012」策定のための「キャンパス施設整備計画ワーキング」の立上げについて報告

・平成23年 7月11日　　キャンパス施設整備計画ワーキング（第2回）
「キャンパスマスタープラン2012」基本方針（案）・アンケート（案）・交通量調査計画（案）提示・意見交換

・平成23年 9月30日　　キャンパス施設整備計画ワーキング（第3回）
「キャンパスマスタープラン2012」アンケート（案）・交通量調査結果（第1回）提示・意見交換

・平成23年12月20日　　キャンパス施設整備計画ワーキング（第4回）
「キャンパスマスタープラン2012」構成（案）・アンケート結果（案）・交通量調査結果（第2回）提示
意見交換

・平成24年 3月 6日　　キャンパス施設整備計画ワーキング（第5回）
「キャンパスマスタープラン2012（素案）」提示・ 意見交換

・平成24年 3月 8日　　施設計画・マネジメント小委員会（第13回）
「キャンパスマスタープラン2012（素案）」提示・意見交換

・平成24年 3月14日　　財務・施設委員会（第48回）
「キャンパスマスタープラン2012（素案）」提示・意見交換

【平成24年度】
・平成24年 7月 6日　　キャンパス施設整備計画ワーキング（第6回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示・ 意見交換

・平成24年 8月 1日　　施設計画・マネジメント小委員会（第15回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示・意見交換

・平成24年 9月12日　（二の宮）附属学校施設計画小ワーキング（第1回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示・意見交換

・平成24年 9月19日　　キャンパス施設整備計画ワーキング（第7回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示・ 意見交換

・平成24年 9月25日　（二の宮）附属学校施設計画小ワーキング（第2回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示・意見交換

・平成24年 9月25日　（八ツ島）附属学校施設計画小ワーキング（第1回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示・意見交換

・平成24年10月17日　（二の宮）附属学校施設計画小ワーキング（第3回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示・意見交換

・平成24年11月 8日　（八ツ島）附属学校施設計画小ワーキング（第2回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示・意見交換

・平成24年11月14日　（二の宮）附属学校施設計画小ワーキング（第4回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示・意見交換

・平成24年11月28日　　キャンパス施設整備計画ワーキング（第8回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示・ 意見交換

・平成24年12月 3日　　施設計画・マネジメント小委員会（第16回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示・意見交換

・平成24年12月12日　（八ツ島）附属学校施設計画小ワーキング（第3回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示・意見交換

・平成24年12月12日　　財務・施設委員会（第50回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示

・平成24年12月19日　（二の宮）附属学校施設計画小ワーキング（第5回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」提示・意見交換

・平成25年 1月30日　　財務・施設委員会（第51回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」意見交換

・平成25年 2月18日　　キャンパス施設整備計画ワーキング（第9回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」承認

・平成25年 3月 7日　　施設計画・マネジメント小委員会（第17回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」承認

・平成25年 3月 13日　　財務・施設委員会（第52回）
「キャンパスマスタープラン2012（案）」承認

・平成25年 3月 13日　　経営協議会（第42回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」承認

・平成25年 3月 14日　　役員会（第108回）
　　「キャンパスマスタープラン2012（案）」承認

（4）アンケート集計結果（抜粋版）

1. 実施時期・方法　平成23年11月～12月　学生へ用紙配布および学内Webサイトにてアンケート実施

2. 回答者属性

	学部生	大学院生	教員・医師・研修医・研究員（非常勤含む）	病院系職員（非常勤含む）	事務系職員（非常勤含む）	その他	合計
文京	1,583	438	101	0	123	1	2,246
松岡	519	26	57	51	85	6	744
回答数	2,102	464	158	51	208	7	2,990

3. キャンパス空間全体について

＜文京＞		
キャンパスが綺麗だと感じる 55%	＜理由 Best3＞	
	建物が新しく感じる（改修含む）	44%
	ゴミが落ちていない	25%
	樹木・芝生・花壇等が手入れされている	16%
キャンパスが綺麗だと感じない 45%	＜主な理由＞（複数回答）	yes
	自転車の停め方が悪い	73%
	駐車マナーが悪い	60%

＜松岡＞		
キャンパスが綺麗だと感じる 46%	＜理由 Best3＞	
	ゴミが落ちていない	55%
	樹木・芝生・花壇等が手入れされている	22%
	建物が新しく感じる（改修含む）	16%
キャンパスが綺麗だと感じない 54%	＜主な理由＞（複数回答）	yes
	建物が古く，汚れている	80%
	駐車マナーが悪い	79%
	建物の並びが悪い	51%
	建物の色彩が悪い	50%

4. 緑地や広場について

＜文京＞	
広いと感じる	10%
ちょうどよい広さだと感じる	48%
狭いと感じる	42%

利用目的では「昼食等くつろぐため」が40%、学生にあっては、「サークルや趣味の活動のため」とする回答が20%以上あった。それ以外には「利用していない」とする回答のほか、「観賞する」「通路として利用」「探求ネットワークの活動の場」とする回答があった。

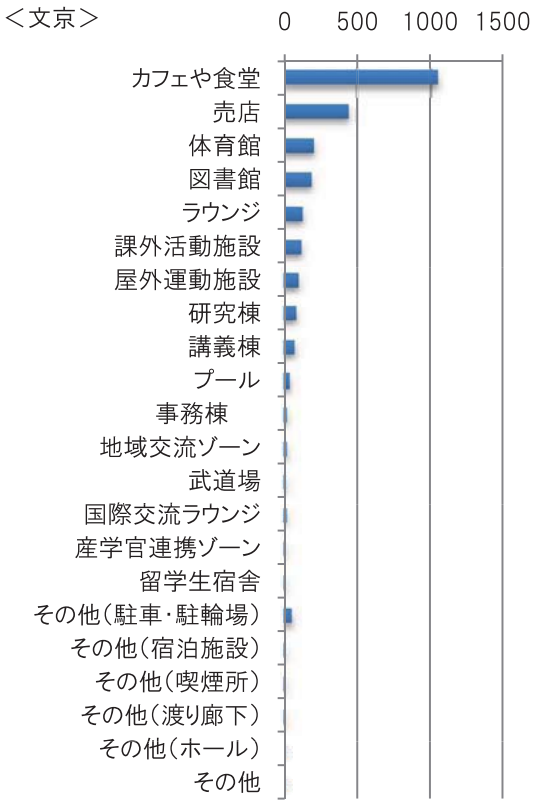
＜松岡＞	
広いと感じる	17%
ちょうどよい広さだと感じる	51%
狭いと感じる	32%

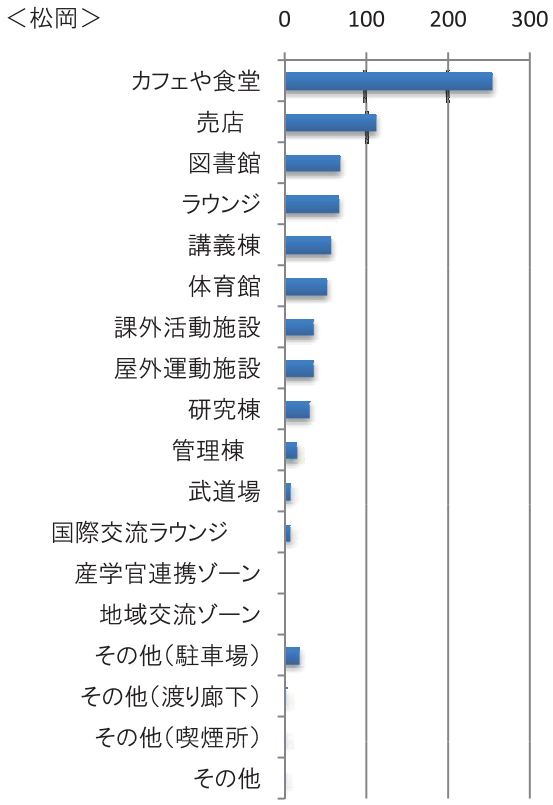
利用目的では、「昼食等くつろぐため」が17%、「その他」が72%であった。「その他」の回答では「観賞用」や，「利用目的を定めていない」が82%であった。

5. キャンパスの個性について

＜文京＞			＜松岡＞		
歴史と伝統を感じる建物がある	建物名称は？	残すべき？ Yes	歴史と伝統を感じる建物がある	建物名称は？	残すべき？ Yes
Yes　12%	総合研究棟Ⅰ	88%	Yes　11%	講義棟	67%
	総合研究棟Ⅷ（工学系4号館）	17%			

6. 充実要望のある施設





7. 構内サインの状況について

＜文京＞

構内サインの場所が良くわからない		28%
構内サインに問題を感じている 30%	場所はわかるが，設置個所が少ない	27%
	案内板サイズが小さい	5%
	文字や字が小さい	6%
現状問題が無い		28%
その他		7%

＜松岡＞

構内サインの場所が良くわからない		45%
構内サインに問題を感じている 30%	場所はわかるが，設置個所が少ない	19%
	案内板サイズが小さい	6%
	文字や字が小さい	5%
現状問題が無い		16%
その他		9%

8. 降雪時の状況について

＜文京＞

降雪時に困っている Yes 34%	＜主な理由＞
	駐車スペースが減少する
	歩道の除雪が不十分で危ない
	建屋間の移動で濡れる，転倒する

＜松岡＞

降雪時に困っている Yes 48%	＜主な理由＞
	駐車スペースが減少する
	タイル等で滑り，転倒する
	歩道に排雪されており，歩行者が車道を通行せざるを得ない

（5）用語集

インクルージョン教育(P72.86)	初等教育や中等教育段階において，障害を持った子供が大半の時間を通常学級で教育する実践。
インセンティブ制度(P20)	やる気を起こさせるような優遇制度
紙とすり(P54.85)	特別支援学校における「紙漉」のこと。
サスティナブルキャンパス(P4)	大学が抱える持続可能性に関わる課題(大学のミッション、地域との連携、キャンパス環境等)を解決したキャンパス。「地球環境に配慮した教育研究環境の実現」「環境負荷低減モデルの実現」を達成したキャンパス等。
事業継続計画 (BCP:Business Continuity Planning) (P40.57.80)	災害や事故等が発生し，操業度が一時的に低下した場合でも，その事業所にとって中核となる事業については継続が可能な状況までの低下に抑える(中核事業は継続させる)，また，回復時間をできる限り短縮させ，できるだけ早期に操業度を回復させることにより事業所の損失を最小限に抑え，災害や事故等の発生後でも事業を継続させていくための計画のこと。
整備率(P16.23.31)	保有面積／必要面積の比率
地域コミュニティ・オン・キャンパス(P58)	地域コミュニティをキャンパス内に引き込み，知の交流拠点として地域活性化に貢献する取組のこと。
地産地消(P79)	その地域で生産し、その地域で消費すること
実践教育GP(P23)	各大学・短期大学・高等専門学校等(以下「大学等」とする)が実施する教育改革の取組の中から，優れた取組を選び，支援するとともに，その取組について広く社会に情報提供を行うことにより，他の大学等が選ばれた取組を参考にしながら，教育改革に取り組むことを促進する，大学教育改革の一環の施策。この「優れた取組」を「Good Practice」と呼ぶ。これは，近年，国際機関の報告書などで「優れた取組」という意味で幅広く使われており，諸外国の大学教育改革でも注目されている言葉である。この言葉を略して，「GP」と呼ぶ。
ハートフル専用パーキング(P20)	障害のある方，高齢の方や小さなお子さんを連れた方などが優先的に利用できる駐車スペースのこと。
パッシブソーラー(P79.82.84.86)	機械動力等を使わず、地形や立地条件、周辺環境、気象条件等を考慮しながら、建物の開口部を大きくしたり、自然通風、蓄熱材や断熱材等を効果的に用いることで、受動的に自然エネルギーを利用すること。
バリアフリー(P54)	障害者、高齢者等の社会生活弱者が，社会生活に参加する上で生活の支障となる物理的な障害や，精神的な障壁等を取り除くこと。
必要面積(P16.31)	文部科学省が定めた「国立大学法人等建物基準面積算出表」大学教員等の定数から算出した面積と特殊要因等により加算が認められた面積の合計で、大学が必要とする施設面積
保有面積(P16.31)	大学が現に保有し、使用している面積。
整備率(P16.23.31)	保有面積／必要面積の比率
ユニバーサルデザイン(P58.69.72)	文化・言語・国籍の違い，老若男女といった差異，障害・能力の如何を問わずに利用することを可能とする施設・設備等の設計
レインボータイム(P85)	特別支援学校における，全校縦割り集団活動(ものづくりや体験活動を中心とした総合的活動)
BEMS (Building and Energy Management System) (P21.58)	ビル管理システムのことを指す。ビルの機器・設備等の運転・エネルギー管理によってエネルギー消費量の削減を図るためのシステムのこと。
ESCO事業(P90)	Energy Service Company事業の略。設備の更新・改修等により、顧客の水道光熱費等の経費削減を行い，削減実績から対価を得るビジネス形態のこと。
QOL (Quality Of Life)(P4.58.76.88)	一般に，ひとりひとりの人生の内容の質や社会的にみた生活の質のことを指し，つまりある人がどれだけ人間らしい生活や自分らしい生活を送り，人生に幸福を見出しているか，ということを尺度としてとらえる概念のこと。

この用語集に取り上げている用語は、このキャンパスマスタープランで使用している文章の意味を解説しているもので、一般的に使用される場合と解釈が相違する場合があります。

2013.03

お問い合わせ

国立法人福井大学 財務部施設企画課

〒910-1193

福井県吉田郡永平寺町松岡下合月23-3

TEL:0776-61-8631　FAX:0776-61-8143

E-mail:zskeikaku-k@ad.u-fukui.ac.jp

キャンパスマスタープランホームページ

http://ems.ou.u-fukui.ac.jp/skikaku/b-01.html